

---

# 僕と妖し

霧野ミコト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕と妖し

### 【Nコード】

N4323D

### 【作者名】

霧野ミコト

### 【あらすじ】

一見すると平凡だけである物に大人気な僕と、エス気質で人をからかうことが生きがいみたいな姫と、一見するとお金持ちの大和撫子なんだけど、ときどき暴走する志保。これは、そんな僕達のと、  
というか、僕のちよつとだけ災難なお話。

## 序話（前書き）

連載が別にやってますが、気晴らしに、というわけで、こっぴつのも載せてみようかと。

とりあえず、肩肘張らずに呑気に読めるものを書いてみました。

## 序話

季節は夏。

燦々とした太陽がじりじりと肌を刺すように光を降り注ぐ。

そんな午後のひとときの中、僕は、森の中を歩いていた。

自然と共に遊ぶ事を忘れた現代人にしては珍しく、その足取りはしつかりとしていて、森の中だと言う事を感じさせないほど、軽やかに土を踏みしめていく。

ここは、僕の庭みたいなところだから、当然と言えば当然だけど。

特にこの時期になると、いつもお世話になっている。

もちろん、理由はたった一つ、昼寝だ。

やはり、この時期は、普通にしていると、ものすごく暑い。

どんなに風通しを良くしたところで、たかが知れている。

おかげで、家にはいられるわけもなく、だからと言って、そのまま外を出歩くわけにもいかないため、こうしてここに来てしまうのだ。もちろん、文明の利器であるクーラーに頼れば、また話は変わってくるだろうけど、我が家にはそんな物はないし、僕自身、クーラーに長い間、あたっている、頭痛がしたりと、体調が悪くなるのだ。そんなものには、頼れるわけがない。

よって、自然に頼る事しか出来ないのだ。

とはいえ、ここでも十分に涼しい。

やはり、木々が鬱蒼と茂っているため、日の光はところどころ、木漏れ日程度でしか入って来ない。

しかも、山の中と言う事もあって、そよそよと吹く風は涼しく、心地いい。

この時期、一番の納涼スポットと言ってもいい。

それからしばらく歩いた後、木に背をあずけると、座り込む。

そこだけ、土の色や草の生え方がまちまちになっている。

いつも、ここで昼寝をしているからだ。

ここが、一番涼しくて、座る土や背中をあずける木の具合もかなりいい。

腰を降ろした後、軽く伸びをすると目を瞑る。

そよそよと吹く風が僕の頬を、髪を優しく撫でていく。

それがとても気持ちいい。

やっぱり、こうして外に出て、風に当たるほうが、ずいぶんと安らぐ。

きつと、クーラーじゃ、こうはいかないはずだ。

あれは、体力をどんどん奪っていくものだし。

ざわり

不意に強い風が吹いた。

目を瞑っていても、分かるぐらい、髪が大きく揺れる。

それに合わせて、木々がざわさわと音を立てて揺れ、陽の光がこぼれてくる。

涼やかな風に吹かれ、本来ならば暑いはずの日の光はどこか優しくげで、じりじりと照らすような事はない。

どこまでも穏やかな世界。

ざわり

また、強い風が吹いた。

だけど、今度は、先ほどとは違って、どこか底冷えするような冷たさを含んでいる。

おまけに、さきほどまでの穏やかな空気が嘘だったのかのように、ぴんと張り詰めた物に変わっている。

思わず、変な不安にかられた僕は、目をあけた。

熱を奪っていた涼やかな風は止み、木漏れ日も届かなくなり、辺りはずっと暗くなっていた。

そのせいか、先ほどまでの夏の暑さはどこかへと飛び出してしまったのだろつか、打って変わって、身体の芯が冷えるようなそんな寒さが辺りを満たしている。

不意に、視界の端に、影を捉えた。

けれど、その姿はぼんやりと白い靄のようなもので覆われており、はつきりしない。

それは、しっかりと見直しても変わらなかった。

もちろん、僕の目が悪いわけではない。

その薄い靄に隠れた影以外は、はつきりと見える。

その瞬間、ようやく、その影の主が何か分かった。

霊だ。

その独特の、なんとも形容し難い身体中にまとわりつくような感触で分かる。

周りの空気が凜としている分、余計にそれが目立つ。

僕がこうしてここに来る理由のもう一つがそれだ。

どこまでも、平凡な僕だけど、少しだけ、変わったところがある。

霊を引き寄せやすい体質なのだ。

理由は分からないが、気がついたら、見渡す限り、霊で囲まれている事なんて、何度もあった。

それに、辟易して、友人のつてで、そう言うものから身を守る方法は、習っていたのだが、さすがにそれを人前で堂々とやれるわけがない。

端から見れば、その姿は、確実に妖しく見えるだろう。

そのため、こんな人気のないところでしか納涼ができないのだ。

とはいえ……舌打ちをして、慌てて、立ち上がり、逃げ出そうと身構える。

どうにも、今回は、そんなものでは、役には立たないみたいだ。

元々、厳しい修行をした分けでもないのに、僕が使えるのは、せいぜい気休め程度の物。

そんなもので、明らかにこちらを狙っている物相手に通じるわけがない。

向こうがこちらに向ける物は、明らかに友好的なそぶりはない。

だいたい、友好的な存在ならば、薄靄の中に隠れて、こないかにも、と言った感じの雰囲気、近づいてくる事はないはずだ。

だから、せいぜい、僕にできるのは、逃げる事。

少々情けないような気もするけど、無茶な事をして、身に危険がおよんでは、元も子もない。

にじり寄ってくる影のスピードがあがった。

どうやら、逃げ出そうとしている事に、気がついたのかもしれない。こうなつては、一刻の猶予もない。

すくつ、と立ち上がると、影に背を向け、足を踏み出す。

まだ、距離は、そんなに縮まっていけないはず。

十分逃げられる、そう思っていた。

だけど、なぜか気がついたときには、何かに腕を掴まれた。

先程までの凜とした空気も、身体にまわり付くような感触も、いつのまにか消えている。

この原因はいったい何なのだろうか？

いや、そんな曖昧な言い方なんてしなくても良いだろう。

何かではなく、影なのだろう。

ここにいるのは、僕とその影だけなのだ。

内心で舌打ちをする。

こうして、捕まっている以上、もう、逃げられないだろう。力づくで振りほどいて逃げられるほど、僕には腕力はない。こうなれば、仕方がない。

覚悟を決めると、影の方へと振り向いた。

## 第一話 八月三十一日 前篇

カレンダーを見てみる。

日めくり式のそれは、しっかりと八月三十一日と示している。

つまり、高校生である僕にとっては、夏休み最後の日を表していると言う事になる。

それを見て、僕は心の奥底から思う。

あつという間の事だった、と。

もちろん休みなんて物は学生にとってはあつという間の物で、すぐに過ぎ去ってしまう物だって事ぐらいは僕だって分かっている。

実際去年の夏休みだって、その過ぎて行く日々の早さに驚いたものだ。

けれど、今回の夏休みに関しては、そんな理由じゃない。

別に楽しい事がたくさんで充実していたから、なんていうありきたりな理由ではない。

むしろ騒動が多すぎて心休まる暇がなかったから、と言うのが正しいところだろう。

もちろん、その原因となるものは一人しかない。

今思えば、きつとあの時から全てが始まってしまったのだろう。

そんな事を考えながら、隣で呑気に漫画を読んでいる少女を見る。彼女の名前は姫。

とは言っても、本名ではない。

どれだけ聞いても、教えてくれなかったのだ。

だから、仕方なく、僕が付けた。

たつぷりとした色艶のある長い髪に、黒曜石を埋め込んだかのように、綺麗に透き通った黒瞳。絶妙なバランスの上で整った顔。服の上でも分かるすらりとした肢体。その姿が、まるで絵本から出てきたお姫様のようなから、姫。

まあ、世間知らずで、天然で、どこか抜けたようなところがあるか



ら、なんていう理由もあつたりするけど。

とはいえ、それで姫と言うのも、かなり安直なようにも思えた。つけた僕自身だって、そのセンスのなさに辟易したものだ。ただ、彼女がそれを嫌がらなかったから、結局、それになったわけだけど。まあ、大して自分の呼び方に興味がなかったと言うのが正しいんだろうけど。

僕が必死になつて名前を考えているときも、彼女は今と同じように漫画を読んでいた。

それを考えると、自分のしていた事が無意味にも思えるけど、それはこの際、記憶の奥底に押し込んでおく。

そんな自分が可哀想だから。

それに、今考えるべき問題は、僕が置かれている状況だ。

とりあえず、この呑気に漫画を読んでいる少女は、何を思ったか、僕の家に住みついている。

しかも、せめて、もう少し、殊勝な態度でいてくれれば、まだ、我慢できると言うのに、さも当然そうに、堂々と居座っている。

だいたい、自覚があるのだろうか。

地元の高校に通う僕は、当然家族と暮らしている。

だから、もし、この状態が家族にばれでもしたら、それこそ惨事だ。知らない少女を、無断で居候させているのだ、騒ぎにならないほうがいい。

よつて、当然、本来なら、こそこそとしないといけないというのに、視線の先にいる彼女は、相変わらず、呑気に漫画を読んでいる。

それが、いつも続いているのだ。

おかげで、気を使うのはいつも僕で、気が休まる暇がなく、平穩だったはずの僕の生活があつさりと言を立てて崩れ去ったのだ。

もちろんその原因は、忘れもしない、あの夏休みの出来事だ。

あの時、振り返った僕の目の前にいたのは彼女だった。

彼女はどこか悪戯っぽい笑みを瞳に浮かべて、僕の事をじっと見つめていた。

その視線は、どこか僕の事を値踏みしているかのようにも思えて、居心地が悪くて、身体中がむず痒く、今すぐにでも逃げ出したかった。

幸い、相手は女の子なのだ、振りほどく事ぐらい簡単に出来るかもしれない。

だけど、僕はそれをしなかった。

いや、できなかった、というのが、正しいか。

今まで見た事のない、まさに完璧と言うべき、美貌を前にして、僕は動く事が出来なかったのだ。

なんとも悲しい男の性と言うものだろう。

けれど、そんな僕を置いてきぼりにした彼女は、しばらくじつくりと僕を吟味した後、

『決めた。今日から、私は君に憑く』

そう言ったのだ。

その言葉に、僕はようやく我を取り戻したけど、時、既に遅し。

彼女は、ずっと僕の腕を引くと、そっとキスをしたのだ。

一瞬何事だと思って、驚いたし、恥ずかしながら、彼女居ない暦が実年齢と言う恥ずかしい記録を持ってしまっているほど、全くもないので、これがファーストキス。

別に大事に取っていた分けじゃないけど、それでもこんな望まぬ形となり、ショックを受けていた。

けれど、身体中の力が抜けた事で遅まきながら現状に気がついた。

魂を抜かれたのだ。

しかも、身体力の抜け方が半端じゃないという事は、かなりの量を抜かれていると言う事。

下手したら、死にかなない量だ。

だけど、だからと言って、何をされたのかが分かったからと言って、それに対する対応策なんて物は知らない。霊感の類は少なからずあるとは言っても、それに対する対応策なんて知らない。

あくまでも、僕は一般庶民なのだ。

『うん、ごちそうさま。これで、憑依完了ね』

結果、何も出来ずに、なすがままの状態で、かなりの量を抜かれた。なんとか、意識が残っている分、致死量ではないのだろう。まあ、憑くと言ったからには、すぐには殺すつもりはなかったのだろうが、それでも、手違いで抜き過ぎた、なんて事も十分ありえる。まあ、実際は、無事に死んだりはしなかった。とりあえず、しばらくひどい脱力感に苛まれてまともに動く事も叶わなかったけど。そして、その日から、僕は迷惑千万な彼女との共同生活が始まってしまったのだ。

## 第二話 八月三十一日 中篇

「ねえ、由貴」

彼女と出会ったばかりの頃を思い返していると、横合いから声がした。

この部屋には、僕と姪しかいないから、その声は彼女の物なのだろう。

ちなみに、自己紹介が遅れたが、彼女が呼んだように僕の名前は由貴。

苗字は、名前みたいだが、志亜。

たいていの人は、僕の事を、由貴と呼ぶけど、たまに、白雪と呼ぶ人もいる。

『しあゆき』と『しらゆき』で、音の響きが似ているから、というのがしょうもない理由からだ。

とはいえ、だからと言って、それが嫌なわけでもない。

確かに、男らしくないし、それでからかわれたりするから、手放しで喜べるようなものではない。

だけど、逆に、それが親しみやすくて、クラス替えの時などで、自己紹介をする際、掴みのネタとして使えるから、初めての場所でもあまり困らない。

「お腹すいた」

そんな事を考えているうちに、彼女は、次の言葉を続けていた。僕が全く無反応だったから、それに業を煮やしたからなのだろう。

それ以前に、単に欲求に耐えられなくなったと言う事のほうが大きいかもしれないが。

彼女が食事をしたのは、僕と出会った時に見たのが最後。

それ以前の事は、当然知らないし、それから以降の事は、僕が、出してないから、食べていないはずだ。

「んじゃ、どこかに餌探しに行ったら？」

けれど、僕は、それをまともに取り合わない。

もちろん、意地悪をして、彼女が何も食べられないようにしているわけではない。

彼女が、人間が食べる食事を食べると言うのなら、さすがに、毎食と言うわけにはいかないが、飢えない程度にはきちんと出すつもりではいる。

とはいえ、一見すると、ほとんど生きているのと変わらないように見えても、そこは霊、人間が普通に食べているものでは、飢えをしのご事は出来ないらしい。

まあ、本来ならば、霊がお腹をすかせる事事態おかしいと言えばおかしい。

死んでしまっている以上、霊には、肉体がないのだから、それを維持するためのエネルギーは必要ない。

けれど、それはあくまでも普通の霊の事で、普通とは言いがたい彼女は、他の霊とは少し違う。

そもそも、彼女とは出会いの時点でおかしすぎるのだ。

なぜ、霊である彼女が、僕に触れる事が出来たのか、と言う事だ。

霊は物質的存在じゃないから、当然物に触れる事はできない。

ポルターガイストなんて言う霊障もあるが、あれは実際に霊がその物に触っているのではなく、霊の持つ力で動かしているだけの事。

もちろん、動かすだけの力を持っている霊なんて言うのは、本当に強い力を持っている霊だけで、ほとんどいない。

けれど、彼女は、そんな一般例とは違い、普通に僕に触れてきた。

それはつまり、彼女が物質的に存在していると言う事になり、当然、維持するためにエネルギーも必要になる、そういう事だ。

ただ、そのエネルギーと言うものが、僕としては非常に困ったものなのだ。

「目の前にいるんだから、わざわざ、探す必要なんてないでしょ。ほら、早く魂を抜かせなさい」

そう、そのエネルギーと言うのは、人の魂なのだ。

彼女は、人の魂を抜き取って、それを糧に物質化しているのだ。

「ほら、こんな綺麗な女の子と、公然とキスできるんだから、嬉しいでしょう？」

しかも、その手段と言うのがキスなのだ。

もちろん、他にも、いろいろと手段はあるにはあるらしいが、なぜか教えてくれない。

まあ、どうせ、からかうためなんだろうとは思っけど。

僕が、以前、キスされたことに関して、文句を言った時、それはそれはおもしろそうに笑っていたし。

純情な男子高生の心を弄ばないで欲しいものだ。

「結構です。だいたい、好きでもない人とキスが出来るほど、器用な性格してないんです」

僕は、彼女の言葉を、あっさりと切り捨てると、彼女から漫画を奪い返し、本棚に戻す。

放っておいたら、そこら辺に散らかしたままにするからだ。

以前なんか、ほんの少し、それこそ、小一時間ほど、部屋を空けている間に、この少女は、思わず呆然とする事しか出来ないほど散らかしてくれたのだ。

あの後、母親にその大惨事を見られて、こっぴどく叱られてしまった。

もちろん、彼女は、あっさりと、姿を隠して、我関せずと言った面持ちをして、ふわふわ浮いていたが。

実体化ができれば、姿を消す事もできるらしいのだが、あの時は、そんな事すら気にならないほど、殺したい程憎かったものだ。

「またまた、由貴ちゃんてば、照れちゃって可愛いんだから」

「由貴ちゃん言うな」

おまけに、僕が女性慣れしてない事を良いことに、セクハラまがいの発言もしてくる。

本当にはた迷惑な人なのだ。

まあ、死んでしまっている以上、人と呼ぶのもなんとなく、変なよ

うな気もするけど。

「今時、ファーストキスを大事に取っておくような可愛い男っていないわよ？ある意味、絶滅危惧種ね」

「悪かったな、彼女の一人もいなくて！」

ただ、本当に死んでいるのか、怪しい物だけど。

ここまで、俗世にまみれた霊なんて聞いた事ない。

霊だけに例にない。

「いや、そんなに落ち込まなくても」

そこまで、考えたところで、あまりの寒さに、打ちひしがれてしまった。

傍にいる彼女は、何か勘違いしているらしく、哀れみのこもった目で僕を見ている。

どうせ、今まで彼女がいなかった事に、打ちひしがれているとでも思ったのだろうが、見当違いもいいところだ。

彼女いない暦が実年齢なんて事ぐらいで、誰が絶望するものか。

いつか、僕にだって、素敵な彼女ができるはずだ。

まあ、そう言つて、全く出来なかった十七年間だけど、この際、そんな事は華麗にスルーしておこう。

悲しいだけだし。

「ね、ほら、なんなら、お姉さんが慰めてあげるから？」

「お断りします」

ただ、だからと言つて、彼女と、どうこうなるつもりは、毛頭ないけど。

霊相手に、と言つのもあるけど、それ以前に、性格の方に難あり、だ。

見た目に関しては、文句なしなんだけど、やっぱり、性格が良くないというにも、その気にはなれない。

「ていうか、お姉さん、て言う年齢でもないでしょうに」

まあ、年齢もネックになっていると言えば、そうなんだけど。

実際の年齢は良く分からないけれど、確実に僕よりも相当上なのは

分かる。

まだ、二つ三つ上なら大丈夫だけど、彼女の持つ雰囲気は、軽く僕の何倍も生きているように感じさせてくれる。

「そんな事言ってるから、もてないのよ」

だから、素直に思った事を言ってみたのだが、噛みつかれてしまった。

まあ、確かに、女性に対して、歳の事を言うのは、あまり褒められた事じゃないのは分かってる。

ただ、それも時によりけりだ。

だいたい、彼女のこめかみと頬を見てみれば、良く分かる。

こめかみには青筋を浮かべ、頬はびくびくと痙攣させている。

凶星をさされて、逆上しているのだろう。

なら、素直に相手してやる必要はない。

これ以上一緒にいても、言い合いになるだけの事は必至。

いちいち相手してはこっちが疲れるだけだ。

だったら、さっさと離れてしまったほうがいいだろう。

手のひらをひらひらとさせると、彼女を置いて部屋を出る。

ただ、だからと言って、家の中でやることなんてない。

時間はまだ昼を過ぎたばかり。

当然、テレビで面白い番組をやっているわけもなく、仕方なしに僕は外へと出る。

途端に、日本の夏特有のむっとした熱気が身体中にまとわり付く。家の中も十分暑かったが、それに比べ物にならないぐらいの暑さ。地獄だ。

何もしていないのに、すでに滝のように汗をかき、シャツは軽く濡れて張り付いている。

ため息を履きながらも、足を進める。

いつまでも、こんなところにいるのは、確実に脱水症状を起こす事は容易に想像が付く。

だからと言って、あっさりと家に帰っては、外に出た意味もない。



それに、中に入ったところで、風も吹かなければ、冷房器具があるわけでもないんだから、涼が取れるわけでもない。  
なら、このまま歩くしかない。

それに、歩いているうちに、納涼にちょうどいい場所が見つかるかも知れない。

### 第三話 八月三十一日・後篇

それから、しばらく歩いたけれど、結局行きついた先は、いつもの場所、つまりは姫と出会った場所だった。

元々、僕の知っている納涼スポットなんてここしかないのだから、当然と言えば当然なのだが、少々釈然としない。

けれど、それでも、相変わらず、そこは、山から吹きおろされる風は涼やかで、夏のうだるような暑さから解放してくれる。

疫病神と寸分変わらぬ彼女に出会った忌わしき場所だけど、やっぱりここは僕にとっては一番落ち着ける場所には変わらない。

瞳を閉じる。

彼女がいるおかげで、僕には安息の時はない。

変に気を許しているうちに、こっそりと魂を抜き取られるような事だって十分に考えられる。

意外と彼女はしたたかなのだ。

僕が初めて出会ったとき、その美しい容貌に見とれて、呆然としている間に、魂を抜き取り、憑依した事が、いい例だ。

だから、ちよつとでも隙は見せられず、いつでも気を張ってなくてはいけなくて、最近ではそのプレッシャーのせいで、まともに眠れない状況になっている。

おまけに、彼女は何が何でも僕から魂を抜きたいらしく、いろいろと画策して、数々の作戦で翻弄してくれている。

その作戦は、軽く思い出すだけでも、両手では数え切れないほどの事なのだ。

まず、最初は、彼女が僕に憑いて初日の事だった。

何とかして、彼女を振り払おうとしたけれど、いくらやっても、どうにもならない事を悟った僕は、諦めて家に帰った。

もちろん、見ず知らずの見てくれだけはいい少女を、堂々と家の中に招き入れるわけには行かない。

変に詮索をされた結果、余計に話をこじらされるわけにはいかない。一応、僕の霊感と言う物は、血筋から来ているみたいで、祖父からそういう体質を受け継いだと言う事になっている。

あまりにも、霊が寄ってくるので、親に聞いてみたら、そう答えられたのだ。

とはいえ、だからといって、僕の家族が、霊能力者家族と言うわけでもない。

あくまでも、祖父がそうだっただけで、僕以外の家族は、集まってくる事はおろか、視る事すらできないのだ。

そのため、一度として、霊なんて物は、見た事もなければ、感じた事もないのだ、いきなり現れた少女を霊だと言ったところで信じてもらえる可能性は薄い。

むしろ、気でも違えたかと思われる可能性の方が高いだろう。

もちろん、彼女が消えるところを見せれば、それで解決するのだろうが、その時の、僕には、彼女が消える事が出来るなんて事は知らなかったわけだし、それに何より、目の前で、少女が消えたなんて事になれば、大騒動になる事ぐらい予想できる。

ならば、結局、こっそりと彼女を家に招き入れるしかなかった。

とはいえ、そこまでは良かったのだ。

彼女をどんなに振り払おうとしたところで、完全に憑いてしまっている以上、霊に対する特別な修練を積んだわけではない僕には、どうすることもできない。

なら、抵抗する事を止めて、気が澄むまで、憑かれていればいいだけの事。

彼女とて、いつまでも、僕に憑くような事もないだろうし、運が良ければ成仏してくれるかもしれない。

例え、それが叶わなかったとしても、その時はその時で、専門家に頼めばいいだけの事。

幸い、僕には、一応、そういった事を専門に扱う知り合いがいる。僕が使っている簡易結界だって、その知り合いに教えてもらったの

だ。

もちろん、その実力は折り紙つきで、何度も僕にとり憑いたたちの悪い霊を祓ってくれた。

いくらでも対応策がある分、まだ、諦めはつくのだ。

けれど、家に帰り、部屋に戻った辺りで、気が付いた事があった。

僕の目の前で堂々と座り込んでいる彼女。

先ほと言ったように、後々、面倒な事が起きる事を未然に防ぐために、彼女の事は内密にしておく。

ということは、家族に秘密なのだから、彼女の居場所は僕の傍、僕の部屋しかない。

つまり、僕と彼女は、同じ部屋で過ごす事になり、狙われている僕としてはかなり危険な状態に陥る事になると言う事だ。

もちろん、それは、当たり前的事で、すぐにでも思い当たるような事なのけれども、僕は、それに全く気が付かなかったのだ。

いきなり自分でもどうしようもないような相手にとり憑かれた挙句、その霊は、実体化ができ、更には、まるで淫魔かのように、キスを迫ってくるのだ、まともな思考回路に戻るには少々時間が必要だった。

けれど、問題点がわかったからと言って、彼女を僕の部屋から追出すわけには行かない。

世間一般的な家庭である我が家は、一軒家ではあるが、部屋数はそんなにない。

そのため、全部屋綺麗に使われてしまっているため、空いている部屋なんて物はないため、適当に彼女を押し込んで置けるような場所はない。

だからと言って、親に事情を説明するわけにもいかない。

それでは、本末転倒もいいところだ。

僕は、進んで、騒ぎを起こすつもりはない

結局、彼女と一緒に過ごす事に決めたのだが、その決断を後悔するような事ばかりが起きたのだ。

恋人いない暦十七年の僕は、当然、女性経験はなく、そのため、女性と言う存在は未知なもの。

何一つとして、知らない。

そんな僕を前にして、彼女は、わざわざ無防備な姿をさらすのだ。まずは、いきなり、僕の前で、意味もなく、服を脱ぎ始めたのだ。おそらく、誘惑でも何でもして、僕から魂を頂こうと言う魂胆なのだろう。

唇を突き出しているから、すぐに分かった。

彼女も、家の中では孤立無援で、さらには、あまり僕にとっては有利ではない場所だと言う事が分かったのだろう。

彼女が迫ってくるのを逃れようとして、助けを求めたり、騒いだりしたところで、彼女の衣服が乱れていれば、逆に僕の方が危うくなる。

僕が彼女に襲いかかったと誤解されてもおかしくはないだろう。

けれど、それが分かっていても、彼女のその姿は僕をぐらつかせた。逃げる事も受け入れる事も出来ずに、ただ耐える事しか許されないせいなものもあるだろう。

だけど、それ以上に、やはり、僕とて、年頃の男。

女性と言うものに、全く興味がないわけではない。

むしろ、全く未知の領域な分だけ、余計に興味が強いかもしれない。そのため、どうしても、すっぱり振り払えない、抗えない。

そんな反応に困っている僕を見て、効果ありと思った彼女は、今度は、下着姿になったかと思ったら、僕にしなだれかかってきたのだ。いきなりの事に驚いた僕は、慌てて彼女を引き剥がしたが、その際に触れた、彼女の女性特有の柔らかさに、理性が飛びそうになってしまった。

いや、もしかすると、その瞬間的には、飛んでしまっていたのかもしれない。

その時の、僕は、半ば本気で、

『このまま流されてもいいかも』

なんて、思いかけていたのだ。

やっている事は単なる変態。

それも物凄くたちの悪いタイプの変態なのだが、どうしようもない男の性が、反応してしまうのだ。

もちろん、すぐに、我を取り戻したため、流される事はなかったのだが、その対応があらさまだったのだろう、彼女ももう一押しだと、挙句の果てには、更に下着を取って、シーツを身体に包ませるだけの艶姿になると、いじらしげに濡れそぼったような瞳をして、僕をじつと見たと思ったたら、ふと視線をそらすのだ。

その姿を見た瞬間、強烈に僕の中にある男の部分を刺激し、一瞬頭が真っ白になった。

男は本能的に、逃げる物を追いかけてしまったため、その一瞬引かれた事に対して、火が付いてしまったのだ。

ただ、それと同時に、運良く、携帯がなったため、なんとかぎりぎりのところで我に帰り、そのまま流されるような事はなかったのだが、もうほんの少しでも遅ければ、完全に僕は、彼女に落ちて、襲いかかっていただろう。

今思い返しても、もしそうなった時の事を考えたら、ぞつとしない。その時に電話をくれたのは、学校の友人だったのだが、本当に心の奥底から感謝したものだ。

まあ、その友人は、僕の妙なテンションに引き気味で、用が終わるとさっさと切ってしまったが。

「んん」

軽く伸びをすると、そのまま背を木にあずける。

一日目の事をちょっと思っただけなのだが、軽い疲労感を感じた。

まあ、彼女との間に起こった出来事は精神的にかなりきついものがあるから、それは仕方ないのかもしれないけれど、思い返すだけでも、疲労を感じるのは少々辛いものがある。

そう思うのなら、思っただけの事なのだが、それも

うまくいかない。

彼女との出来事はインパクトが強いせいか、忘れる事はおろか、考えないようにすることすらできない。

悲しい事だけれども、彼女に憑かれて以来、彼女中心の生活になってしまっているのだ。

ただ、唯一何も考えないでいられる時間だつてある。

それが、この瞬間だ。

一応、彼女に憑かれているのだが、僕と彼女はワンセットではない。お互いにお互いの居場所が分かるような事もないし、お互いがお互い繋がっているわけでもない。

そのため、一緒にいなければ、お互いの事なんて全く分からない。つまり、お互いに干渉し合う事はない。

それは僕にとつては非常に大きい。

彼女からの干渉がなければ、のんびりと出来る。

もちろん、彼女の行動があまりにもインパクトが強いせいで考えずにはいられないけれども、眠ってしまったえば問題はない。

さすがに、夢の中まで彼女が占めるような事はない。

幸い、今は、周りには誰もいないため、眠りの邪魔をするものは居ない。

当然、彼女も僕の居場所が分かるはずもないので、彼女が乱入してくる事もない。

それでも、一応、気休め程度に簡易結界を張り巡らせておく。

彼女に関しては、場所が分からない以上、不必要かもしれないけれど、それ以外の霊の事だつてある。

ただでさえ、姫で手一杯だというのに、これ以上、増えられたら、それこそ今度こそ、死んでしまいかねない。

もし、綺麗な女性との甘い一時を夢見て、僕の事を羨んでいる人が居るなら、何度でも口を酸っぱくして言おう。

性格の悪い美人ほど手に終えない物はない、と。

特に、歳と経験を重ねた女性なんかは、理解の範疇外の話だ、と。

それでも、夢見る事を忘れない人なら、その時は、彼女を貸そう。  
彼女と一緒にいれば、嫌でも分かる。

そのあまりにものひどさに。

毎日毎日、もう泣きそうになるほど、こっちは全く手を出せないというのに、誘惑され、迫られ、押し倒されるのだ。

確実に、そのストレスで、白髪が増えるか、ハゲるはずだ。

僕だって、最近、ストレスのせいか、抜け毛が増えてきて、ハゲやしないか、戦々恐々の日々を過ごしているのだ。

もし冗談だと思っている人がいるなら、僕が入った後の浴場を見てみるといい。

排水溝に抜けた僕の髪が溜まっているはずだ。

それでも、本当にそれでも、まだ羨むと言っのなら、僕はその人を心の底から尊敬したいと思う。

その勇敢な心意気に。

それと同時に、その無謀な諸行に呆れもするだろうけど。

「ふあああ」

まあ、そんな冗談はさておき、そろそろ昼寝でもしてみよう。

睡眠不足を解消するにはうってつけなのだ、ここで寝ずにどこで寝ると言っのだ。

僕は、そつと瞳を閉じて、眠りに付いた。



### 第三話 八月三十一日・後篇（後書き）

とりあえず、これで、八月三十一日編は終了です。  
このくそ寒い時期にやるネタじゃあないですが……  
気にしないでくださいww

#### 第四話 九月一日・幻想（前書き）

ちよつとやばめかもしれませんね。

でもでも、大丈夫……

だと思いたい。

てか、大丈夫だと願いたい。

ホント、僕って、どうにもこんな感じのきわどいネタが好きなんですよねえ。

#### 第四話 九月一日・幻想

海上に写る街のネオン。

その色とりどりの輝きは、陳腐な表現だが、まるで宝石箱のようで、見るもの全てを魅了する。

けれど、それを窓越しに眺める僕には、どこにも熱はなく、むしろ、まるでそれには、一片の見るべき価値は見受けられないとも言っているかのように、どこか冷めたような眼で見ている。

いや、真実、それには見るべき価値などない。

それ以上に、見るべき物、愛でるべき物がすぐそばにあるのだ。

視線の先を窓から部屋の中に変える。

キングサイズのベッドが一つにテーブルセットが置いてあるだけの部屋。

宿泊だけを目的とした部屋である事がすぐに見て取れる。

けれど、宿泊目的だけの部屋にしては、そこは、まるでおとぎ話に出てくるお城のように、一つ一つ丹精込められた豪華な小物が、全く嫌味にならないほど、極自然に置かれている。

確かに、それは海の上に散らばる偽物の宝石よりも、ずっとずっと価値はあるだろう。

例えば、自分のすぐ傍に置いてある何でもなさそうな花瓶。

けれど、そこに、施されている装飾は、美しい女神の裸体を、植物のつたが複雑に絡み合い、決して下卑たいやらしさなどない、上品で高貴な色気をかもし出しており、その価値は、一般サラリーマンの年収にも匹敵するほどの物。

家宝にするには、十分な代物であり、また、眼の保養にする事も可能だろう。

僕とて、その花瓶の美しさには、心を奪われかけた。

けれど、それが、僕の言っている見るべき物、愛でるべき物かと聞かれたら、答えはノーだ。

それよりも、もっと美しく、もっと心奪われる存在が、すぐ傍にある。

僕は、また視線の先を変える。

今度は、ベッド。

いや、違つか、ベッドの上にある存在。

まるで神々の芸術作品かと思わずにはいられない、至高の存在。

極上のビロードを闇夜の空に広がる漆黒で染めたような髪。高純度でその先が見えてしまいそうなほど美しく澄んだ黒曜石のような瞳。シミやそばかすなどが全く見られない白磁器のような白く滑らかな肌。抱きしめれば脆く儚く折れてしまいそうなほど華奢でありながら、出るべきところはしっかりと出ている肢体。

その一つ一つが強烈に己の美しさを象徴しているが、決してそれがいびつになる事はなく、むしろしつかりとした調和が取れている。

まさしく、それは、完成された美。

誰もが羨み、望み、手を伸ばしながらも、決して届く事などない至高の存在。

その芸術作品……彼女の名は、姫。

そして、彼女こそ、見るべき、愛でるべき存在。

僕が心の奥底から、愛さなくてはならない存在。

不意に眼が合った。

相変わらず、澄んだ黒瞳は、僕の胸を、心を射抜き、誘う。

それが、彼女の合図。

僕は、そつと一歩踏み出し彼女に近づく。

緊張しているのか、はたまた期待しているのか、彼女の頬や肌は、上気して薄いピンク色に染まっている。

更に一歩踏み出す。

美貌の女性は、もう僕の目の前。

手をほんの少し伸ばしただけで、彼女に振れる事も、この腕で抱きしめる事も、更にそれ以上の事も出来る。

頭の中に、僕の腕の中に包まれる彼女の姿が浮かぶ。

惜しげもなくさらされた裸体。その姿は、まるで花瓶に描かれた女神のように、エロティックながらも、全くいやらしさなどなく、どこか神々しさを秘めている。

彼女が瞳を閉じる。

先ほどまで強烈に惹き付けていた黒瞳は、姿を隠したが、逆にそれがよりいっそう強い瞳の印象を与える。

もう一度あの澄んだ瞳を見たい、と。

そして、その瞳を見るためには、何をすべきなのか、と。

僕は、手を伸ばし彼女の肩に手を回す。

彼女が何を望んでいるのか。

そんな事、閉じた瞳を見れば分かる。

そっと彼女の唇を指でなぞる。

ぷつくりと弾力のあるそれは、僕の指を軽く弾きながらも、どこかでしっかりと吸い付くようにしてまとわり付く。

「焦らさないで」

その行為の後、彼女は瞳を閉じまま、ねだるようにそう呟く。

その声は砂糖菓子のように甘く、吐かれた吐息は、首筋を優しく、撫でる。

一瞬、被虐心のろうそくに火が灯り、このままもう少しの間焦らしてみようかと思ったが、すぐに切り捨てた。

確かに、このまま、彼女を焦らししてみるのも楽しいだろう。

仔猫のように甘えてくる彼女は、美しいその外見とは違って、愛らしくて、可愛らしくみえる。

けれど、だからこそ、そこに盲点があるのだ。

美しいながらも、愛らしく、可愛らしい彼女。

その姿が、僕の心の中にある男の部分を、強烈に刺激し、理性の鎖などあつさり引きちぎってしまえと甘く誘惑するのだ。

そして、それに耐える必要など、今ここにはない。

僕は彼女を求め、彼女もまた僕を求め、受け入れている。

焦らすという行為を行う気などすぐに消えてなくなってしまったの

だ。

彼女の肩を抱く力を本の少しだけ強める。

彼女がそれに小さく反応したが、気にせず、彼女との距離を縮める。彼女の吐く息は、既に耳よりも肌で感じるほうが早く、まだ触れ合ってもいないのに、僕の唇は熱く熱を持っている。

興奮しているのだろう。

この神々の芸術作品である彼女の唇を我が物にできる事を。

更には、それから起るであろう出来事に。

瞳を閉じる。

上気し、熱を持った朱色の頬を、彼女の照れたような表情を見てみたいと思つたが、キスをするときに、それをするのは野暮な事。

瞳は閉じ、心の眼で、彼女の姿を捉える事こそ、この瞬間に相応しい。

一瞬だけ止めた動きを再開する。彼女の息遣いが、心音が、瞳を閉じた事によつて、さらに強く感じられる。

そして、もう後一コマ。

次の瞬間には、唇が触れる。

第五話 九月一日 一人だけのブレックファースト（前書き）

まあ、いろいろあつて予定遅れて一日開きましたww

## 第五話 九月一日 一人だけのブレックファースト

「ぬあ！」

もう少しで触れる、そう思うと同時に、眼を開け、その場から飛びのいた。

既に、僕の眼が捉えている世界は、先ほどまであった豪奢で煌びやかな物ではなく、普段良く眼にする世界。

いつも、僕が過ごす世界。

そう、自分の部屋が写っている。

カーテンの脇から陽光がわずかながらも差し、ベッドを照らしている。

そして、そのベッドの上には

「あいたたたた」

姫がいた。

ただ、その姫もまた、先ほどとは違い、しっかりと服を着ている。

つまり、先ほどまで見ていた物は、夢、と言う事。

まあ、だいたい、キャラが違いすぎるのだから、すぐに分かる事だろう。

あんなキザったい台詞や、いかにも女性慣れしてますよ、と言わんばかりの仕草のどれを取っても、僕には繋がらない。

と言うよりも、僕の本当の姿と全く逆方向に向かっている。

「もう、女の子には優しくしなさいよね」

ベッドで打ちつけてしまったのだらう。しばらく、頭をさすっていた彼女が、ぼやきながら、ベッドから降りてくる。

「なら、寝込みを襲うのは止めて欲しいものだね」

けれど、言わせてもらえば、それは自業自得。

彼女が性懲りもなく、眠っている僕にちょっかいを出すからそうなるのだ。

一応、僕は寝るときにも簡易結界をはっている。



もちろん、僕程度の力では、彼女の事を近づけさせないような事は出来ないし、眠っているのだから、意思の力が働かず、結界自体の効力も弱くなってしまう。

けれど、その代わりと言ってはなんだが、その結界に触れた途端に、眼が覚める。

どうも、僕のはっている結界は、僕自身に直結しているらしく、それに触れると、まるで、自分の身体に触れたように感じるため、眼が覚めてしまうのだ。

そして、眠りが浅いとき、つまり、人が夢を見るようなタイミングで、結界に触れる、または越えた場合は、夢にも影響を与えるのだ。もちろん、あんな場面は年頃の僕にしてみれば、心臓に悪いし、彼女が結界に触れるたびに眼が覚めるのだ。

正直勘弁して欲しい事なのだが、

「由貴が隙を見せるのが悪いのよ」

目の前にいる女性は、悪びれることなく、あっさりとそう答えてくれる。

全く、悪いともなんとも思っていないのだろう。

まあ、悪いと思っていれば、僕に憑いたり、迫って来たりなんてしないだろう。

きつと、言っただけ無駄なのだ。

「……さっさと着替えるか」

内心でため息をつく、服に手をかける。

すぐ傍に、姫がいるけど、気にしない事にする。

どうせ、出て言ってくれ、と言ったところで聞いてくれない事は承知済みの事。

以前、かなり口を酸っぱくして言ったときも全く聞いてくれなかったのだ。

なら、言っただけ無駄と言っただろう。

こと彼女の事に関しては、もう無駄な事はしたくない。

と言っよりも、そんな事をする余裕なんてない、と言っのが正しい

ところなんだろうけども。

前日の内にハンガーにかけておいた制服に袖を通すと、部屋を出る。それに習うようにして、彼女も僕に付いて出てくる。

もちろん、姿は消して、である。

階下に降り、ダイニングに向かう。

けれど、そこには、朝食どころか、母親の姿すらない。

まあ、今日は始業式。

午前中で終わってしまったため、弁当はいらない。

おまけに、母は低血圧のため、朝に非常に弱く、なかなか起きられない。

つまり、お弁当の準備をしないでいいんだから、ついでに朝食の準備だつてしなくてもいいだろうと考え、完全にベッドの中ですよやとお休み中なのだ。

まあ、だからと言って、普通に弁当がある日に、朝食を作ってくれているのかと言うと、そういうわけでもなく、パンや朝食の材料にインスタントのスープ類があるのだから、自分でどうにかしろ、と完全に僕任せにしている。

とはいえ、僕とて、そんなに料理がうまいわけでもなければ、作る事に生きがいを感じているような人間でもないの、たいていは、パンとインスタントコーヒーですませてしまう。

まあ、そのせいで、三限目あたりで、お腹の虫が鳴りだしてしまうけれども。

それはさておき、壁にかけてある時計を見る。

部屋を出る際に、時計を全く見ずに来てしまったため、時刻が全く分らない。

目覚ましなんかをかけていれば、まだ、見る機会もあるだろうが、残念ながら、そんな物は、僕の部屋にはないし、それ以前にかけない。

かけるだけ、無駄なのだ。

姫がちよっかいを出してくるせいで、目覚ましは鳴るよりも早く、

眼が覚めてしまうのだ。

そう言う意味では、彼女のちょっかいも少しぐらい感謝してやってもいいんじゃないか、と思うかもしれないが、それをやられるのが早朝なのだ。

ただでさえ、彼女のせいで寝付くのが遅いのに、そんなに早く起こされては、まともに休む事が出来ない。

案の定、今日もまた時計を見てみれば、針は六時を差している。

高校は、八時半までに登校すれば良く、距離的に見ても非常に近い  
ため、歩きでも十分程度で付いてしまう。

そのため、七時過ぎに起きても十分に間に合う。

だというのに、こんな早い時間に起こされると、逆にすることがなく、暇をもてあます事になるため、彼女のやっている事は非常に迷惑なのだ。

だからと言って、文句を言ったところで、素直に言う事を聞く彼女でもないのだから、何も言えない。

それなら、無駄に労力を使うよりも、もっと別に使うべきだろう。

彼女のせいで、時間はいくらでもありまっているのだ。

冷蔵庫を開けて、中身をチェックする。

とはいえ、朝の早い時間にやる事なんて限られる。

せいぜい、朝食作りぐらいだ。

けれど、大した腕をしてるわけでもない僕なのだ、当然作れる物は限られている。

冷蔵庫の中から、卵とベーコンを取り出すと、閉める。

この材料で分かる通り、作るのはベーコンエッグだ。

それに、食パンとインスタントスープとインスタントコーヒーをつけておしまいだ。

インスタントが多いような気がするが、インスタントじゃないと作れないのだから、どうしようもない。

もちろん、エプロンを着ておく事も忘れない。

油とかがはねて、制服が汚れてもしたら、きつと母に小言を言われ

てしまう。

食パンをトースターに入れて、タイマーをセットし、ガスコンロに火をつけ、フライパンを暖め、温まったところで、油を入れ、フライパン全体になじませる。

それに、合わせて、卵をフライパンの上で割り、僕は半熟で片面焼き派のため、少量の水を入れて、ふたをする。

しばらく、待った後、ふたを開けると、水蒸気が、ぱあっ、と視界に広がる。

朝とは言え、まだまだ暑さの残るこの時期に、熱い水蒸気を浴びるのは少々辛いが、我慢するしかないだろう。

水蒸気が全部飛んだところで、蒸らしている間に取ってきた皿に、目玉焼きを盛り、ガスコンロのスイッチは切り、ベーコンは余熱で温める。

かりかりのベーコンも好きなのは好きだが、少々柔らかさが残ったベーコンも割りと好きなのだ。

まあ、ベーコン好きが聞いたら、邪道だ、と叫ばれるかもしれないが、それでも、僕はそれが好きなのだ。

それはさておき、コーヒークップとマグカップをそれぞれ出すと、それぞれに合った物を入れ、お湯を注ぐ。

それと同時に、それなりに芳しい匂いが鼻腔を掠める。

安価なものだけでも、それでも、大して肥えていない僕の舌を満足させるには十分なものだ。

チーン

そして、そうこうしている間に、どうやら、トーストの方も焼けたらしく、トースターの小気味いい軽快な音が鳴った。

それを取り出すと、マーガリンを塗る。

ジャムとかもいいけど、あれだと少々しんなりとしすぎる。

やっぱり、トーストは、芳ばしい香りにさくさくとした食感をしてないと食べた気にはならない。

「いただきます」

それら全てを準備し終えると、エプロンを脱ぎ、元の場所に戻し、席に付き、そう言つて手を合わせてから、朝食を取り始める。

なんだか、その動作は子供っぽく見えるが、昔からやっているため、どうしても抜けないのだ。

まあ、食卓での行儀を考えると当然の事と言えば当然の事なのだが。「ねえ、私には何もないの？」

トーストにかじりついたところで、不意に隣に浮かんでいる彼女がそう尋ねる。

僕が朝食を食べようとしている姿を見て、彼女もまたお腹がすいたのだらう。

まあ、かれこれ僕に憑いてから何も食べていないのだ、その状態で目の前で何か食べられていたら、そう思つてしまつてもしかたないだらう。

「ない」

だからと言つて、彼女に出すものは、やはりない。

普通に人が食べるものじゃ、飢えがしのげるわけでもないし、だからと言つて、魂なんて物をやるつもりは毛頭ない。

それに、別に彼女は何かを食べなければ消えてしまつてしまつたわけでもない。

あくまで、彼女にエネルギーが必要なのは、実体化するためだけの事であつて、霊として存在するには必要ない。

よつて、僕が彼女の餌になつてやる必要もないと言つたわけだ。

まあ、例え、消えてしまつても、餌になつてやるつもりはない。せつかく、邪魔者が消えてくれる絶好の機会なのだ、見逃す手はないだらう。

ただし、そうなれば、彼女もまた、かなり手段を選ばないようになるかもしれない。

自分が消えてしまうのだ。彼女もなりふりかまわなくなるだらう。そう考えると、今の状態で助かつたのかもしれない。

呑気にそんな事を考えながら、朝食の続きを再開する。

なんだかんだ言っで、かなりきつい状況ながらも、少々の救いはあるみたいだ。

不幸中の幸いと言うのはこの事なのだろう。

ただ、やはり釈然としないものは心に残るが。

「むー、けち。いいじゃん、少しぐらい」

いまだ隣でふわふわと浮いていた彼女が、恨めしげな目をしながら、僕の頬をつつく。

どうやら、少し拗ねているのだろうが、そんなものは無視してもかまわないだろう。

下手にかまって、迫られたらたまったものじゃない。

とは言え、それにしても、彼女もまた器用な事をしてくれる。

実体化していなければ、もちろん、彼女は僕に触れる事は出来ない。そのため、僕の頬をつつくために、わざわざ指だけを実体化している。

ただ、まだ僕は彼女が視えるから、かまわないかもしれないけれど、もし、視えない人が見たら、卒倒物だ。

空中に指だけが浮いて見えるのだから、怪奇現象以外なんでもないだろう。

それを考えたら、すぐさまやめさせるべきなんだろうが、幸い、まだ誰も起きていないし、目下のところ、彼女の事は無視する方向。なら、言う必要もないだろう。

せめて、食事の時間の時だけは静かにしたい。

もちろん、にぎやかなのも嫌いなわけじゃないけど、彼女との場合は、にぎやかではなく、騒がしいのであって、疲れるだけだから、その範疇には入らないだろう。

## 第六話 九月一日 お支度タイム

「ごちそうさま」

ふにふにと頬を彼女につつかれながらも、箸を進め、綺麗に完食する。

比較的食べるのが早い僕なのだけでも、やはり彼女の邪魔が気になって、意外と時間がかかってしまった。

時計を見てみれば、既に時計の針は七時を指そうとしていた。

まあ、時間が有り余っていたのだから、ちょうどいいといえばちょうどいいのかもしれないが、なんとなく時間の無駄遣いをしてしまった感が否めない。

「はい、邪魔」

相変わらず、飽きもせず僕に僕の頬をつついてる彼女を、そう言つて、どかすと、食器をまとめて洗い場に持って行く。

その場に置いておいても、母は洗ってくれない。

作るのが自分ならば、洗うのも自分。最後まで自分が責任持つてやれ、との事なのだが、たぶん、自分でやるのが面倒なだけだろう。うちの母の面倒くさがりは筋金入りだけに、十分に考えられる。先ほど使っていたエプロンを再度着直すと、軽く水でゆすいだ後、洗剤を泡立てたスポンジで磨き、また水でゆすいで汚れを落とす。

「汚れがまだ残ってる」

「うるさいな、分かってるよ」

一旦水でゆすいだ後、まだ落としきれていない汚れがあつたのだが、目ざとく見つけた彼女は横でぼそりと呟く。

なんだか、物凄く腹が立った。

まるで姑の嫁いびりのようで、お前は、どこの姑だ、と突っ込みたくなる。

もう一度、磨きなおして、水でゆすぐ。

今度はしっかりと汚れは落ちたらしく、軽く水を切ると流し台にか

けておく。

そうすれば、後は勝手に乾くだろう。

「はい、由貴の朝ご飯も終わったわけだし、次は私の番だね」

どこか洗剤臭さを残す手を、軽く水でゆすいでから、傍にかけておいたタオルで拭くと、エプロンを脱いで元の場所に戻したところで、彼女は再度おねだりを始めた。

どれだけおねだりされたところで、僕が了承する事はないのだから、蒸し返さないで欲しい。

「ほらほら、さっさと目を閉じてしまいなさいって。そうすれば、後は、お姉さんがしつかりとリードしてあげるから」

なので、それを相手にせずにいるのだが、さらに、言い募ってくるが、それを無視すると、洗面所に向かう。

少々煩わしかったのもあるが、朝食が終われば、次は歯磨きをしなくてはいけない。

朝食を食べる前に歯磨きをする人もいるが、僕にはどうしてもそれが納得できない。

歯磨きと言うのは、口の中を綺麗にするための行為。

なのに、朝食を食べる前に歯磨きをしてしまつては、それは無意味としか思えない。

食べたら結局また汚れてしまふ。

それとも、また、食べた後に歯磨きをすると言うのだろうか。

なんだか、それじゃ食べる前にした歯磨きの方が無意味にも思える。

洗面所に立てかけてある歯ブラシを取ると、水で一旦ぬらした後、歯磨き粉を付け、再度ぬらすと、口の中に入れ、磨き始める。

泡立ちのいいそれのおかげで、口の中はすでに泡だらけ。

それを使って、綺麗に歯垢を落としていく。

とは言つても、一応、毎食後に歯磨きをするように心がけているため、そんなに汚れてはいない。

それに、元々、僕がしつかりと歯磨きするのは、コーヒーが理由なのだ。



母に似たせいか、少々低血圧で、朝に弱いところがある。

そのため、目を覚ますためには、どうしても、カフェインが欲しくなり、コーヒーに手を伸ばしてしまう。

もちろん、コーヒーを飲み過ぎると、歯は黄ばみ、口をあけて笑うわけにもいかない状態にまでなる事もある。

そんな不潔そうな口の中を見せられるほど、羞恥心が欠如しているわけではない。

結局、出来る限り白い歯を見せるためには、しっかりと歯磨きをするしかないのだ。

五分ほどかけてしっかりと磨くと、口をゆすぐ。

どこかのテレビ番組で言っていたけれど、口の中の歯垢を全て除去するためには最低でも十分必要らしい。

それぐらいやらないと、細かい部分まで綺麗にならないのだろうが、そんなに長い間、歯磨きなんてしてられない。

そんなに長い間口に入れていたら、歯磨き粉は唾液で、泡立ちが悪くなるだろうし、そもそも口の中が歯磨き粉の味で気持ち悪くなってしまう。

それに、僕はあくまでも、黄ばみ防止のためにやっているわけで、完璧に歯垢を落とすつもりはない。

それを聞いて、眉間にしわを寄せるような人もいるかも知れないが、何を言われたところで僕は頷いたりはいしないだろう。

人として最低限の身だしなみさえ整えられればそれで僕は十分なのだ。

綺麗に口の中をゆすぎ終わると、洗顔フォームを手に取り、顔を洗い始める。

普通なら、起きてすぐにやる事なんだろうけど、どうせ朝食を食べた後に、歯磨きをしに来るのだから、その時に合わせてやってしまおうが、効率的なので、後回しにしてしまうのだ。

もちろん、髪の設定も、このときにあわせてやる。

まあ、髪はそんなに長くないし、そもそも髪型にさほどこだわって

いるわけでもない。

せいぜい、寝癖を直す程度なので、すぐに終わる。

身支度をすっかり終わると、洗面所を出ると、自分の部屋に戻る。背後を見てみれば、洗面所に行くときには置いてきたはずの姫が、いつの間にか、僕の後ろにぴったりとくっついていた。

うっかりと物には触れないため、暇つぶしはできないし、僕以外と話せるわけでもないのだから、僕に引っ付いているしかないだろう。とは言っても、別に部屋に戻ってもすぐに、下に降りるので、付いて来る必要はないが。

僕が部屋に戻ってきたのは、単に、カバンを取りに戻っただけの事。始業式だけなので、当然荷物はなく、本当なら持っていく必要もないのだけど、さすがに手ぶらで学校に行くわけにもいかない。机の上に置いておいたそれを手に取ると、すぐに部屋を出る。

そして、相変わらず姫はその後ろをひよこひよこ付いてくる。

なんだか、知らない人が見たら、変な二人組みだと思われるだろう。またはご主人様とそれになつく仔犬みたいな構図だろうか。

実際は、彼女の方が圧倒的有利な立場にいるわけだから、その構図には当てはまらないだろうが。

どちらにしろ、変なものには変わりはない。

それをやる羽目になっている僕ですら、変な二人組みだと思っているわけだし。

ただ、彼女の方は全く気にするどころか、むしろ、憑いているわけだから、当然と思っているだろう。

## 第七話 九月一日 学校へ行こう！

階下に降りて、玄関にカバンを置いておくと、リビングに入る。

壁にかけてある時計を見ると、時刻は、七時半前。

家を出るにはまだまだ早い。

内心でため息を吐きつつも、とりあえず、テレビを付けてみるが、興味の惹かれるような物はなく、むしろ、朝から萎えてしまいそうなニュースばかりが流れている。

政治家の汚職やら、凶悪犯罪、異常気象など、明らかにマイナスのニュースなんて流さずに、もう少し、元気の沸いてくるような明るい物を流して欲しいものだ。

「あ、お兄ちゃん、もう起きてたんだ？」

テレビを消して、新聞でも取りに行こうかと、立ち上がろうとしたところで、声がした。

突然の事で、思わずびくりと反応して、そのままの勢いで振り返ったのだが、そこには妹の美樹の姿があった。

まあ、この家に、僕の事を『お兄ちゃん』なんて呼ぶのは一人しかないから、すぐに分かれるといえば分かるのだが。

「眼が覚めちまったからな」

「ふーん。いつもは冬眠中の熊よろしく惰眠をむさぼっているのに、珍しい事もあるんだね」

とはいえ、この妹が本当に可愛くない。

兄の欲目じゃないが、顔に関しては割りと整っているし、スタイルだってそんなに悪くないため、学校ではそれなりにもてるみたいではあるのだが、口を開くとがらりと印象が変わる。

少々きついところがある。

今みたいに、くすくすと笑いながらさらり皮肉を言う事なんてしょっちゅうだ。

「て、うわっ。もしかして、もうご飯食べて終わってるの？何、お

兄ちゃん、槍でも降らしたいわけ？」

しかも、流し台に僕が使い終わった食器が並んであるのを見つけると、大げさに驚いて見せ、更に続けてくれる。

本当に可愛くない妹だ。

確かに僕は、美樹の言うとおり、朝に弱くて中々起きずに、布団の中でごろごろとしてしまっていたが、だからといって、そう言う言い方はないと思う。

僕だって、普通に朝早く起きる事だってある。

もちろん、今日は姫に邪魔されたから、と言うのが理由だけど、姫に憑かれる前も、起きれるときは普通に起きていたのだ。もう少し兄を敬って欲しい。

「そりゃ、ちようどいいな。槍なんか降ってくれば、学校に行かなくてもすむし」

だからと言って、そんな事を言ったところで、美樹はまともに取り合わないのは、分かっているので、適当に流しておく。

この家での力関係は、完璧に決まってしまうている。

一番強いのが、母。

財布の紐を握っているのと家事の一切を取り仕切っているのだから、逆らえない。

次に来るのが、美樹。

皮肉屋で毒舌家、かなりきつい事を言うし、何より目つきが悪い。

ややつりあがった切れ長の瞳は、強烈な威圧感を放ち、その目で睨まれでもしたら、すぐさま萎縮してしまう。

以前、母に頼まれて、美樹を起こしに部屋に行った時、まだまだ眠たかったのだろう。

軽くノックをしてから、ドアの隙間に頭だけ入れて

『そろそろ起きろ、だつてよ』

背中を向けて眠っている君に向かってそう言ったのだが

『うるさい。眠い』

首だけを捻って、静かながらもずっしりとしたプレッシャーを込め

た声で、言い返されたのだが、その時の目なんて、もう本当にすごかった。

修羅とか鬼とか、そういうものすら裸足で逃げ出していくような、それこそ筆舌に尽くしがたいほどの恐怖を植えつけられてしまった。もちろん、その後は、半泣きになりながら謝って、ほうほうの体で逃げ出した。

たぶん、あれから、僕と美樹の力関係が決まってしまったんだろう。そして、三番目が父。

普通に考えれば、悪くても二番目に来るものだろうが、仕事が忙しいため、ほとんど家にいないため、家での発言権はほとんどないに等しい。

家長であり、一家の大黒柱であるはずの人だと言うのに、少し可哀想な気もするが、それ以上に辛いのは、間違いなく一番弱い立場の僕だ。

霊を無意識の内に引き寄せてしまうという変な体質を持ち、母からは、面倒くさいからと言って家事を押し付けられ、断る食事抜きと脅される。

妹には、その恐ろしさから頭が上がりず、常に皮肉と毒舌を浴びせられる。

父には、家で肩身の狭い、と嘆く愚痴を延々と聞かされ、お酒を飲みだすと泣きながら絡まれる。

もう、家にはどこにも僕が力を発揮する場所などないのだ。

いいように周りにいじられるだけなのだ。

しかも、唯一のオアシスだった自分の部屋も姫に侵略されてしまっている。

これを、辛いといわずに何を辛いと言おうか。

とりあえず、普通の人なら家出を考えてもおかしくない。

例え、そうならなかったとしても、きつとこんな生活に耐えられるわけがない。

こうして、まともに志亜家が機能しているのは、ひとえに僕が我慢

に我慢を重ね、耐え忍び、損な役回りを一手に引き受けてきたからこそだ。

そこをしっかりと理解して、むしろ感謝して欲しいものだ。「お兄ちゃん、邪魔。テレビ見ないんだったら、テレビの前に陣取らないでよ」

そんな心からの願いをあつさり打ち砕き、僕を押しつけて、座りこむ。

しかも、蹴り倒して、だ。

我が妹ながら、本当に足癖の悪い。

だからと言って、文句を言ったところで

『邪魔だから悪いのよ』

そんな事を言わつて、にらまれてしまうのがおちだ。

本当にいい性格をしている。

「……学校にでも行くか」

結局、僕には逃げる道しかない。

ため息をつきつつ、ぼやきながら、玄関に向かう。

リビングを出る途中に、一応時計を見てみたが、八時前。

ぎりぎり登校するのは、あまり好きじゃないから、家を出るのにはちょうどいい時間帯なのだが、家を出る理由はかなり情けない。

靴を履き、玄関に置き去りにしておいた力バンを手に取り

「いってきます」

そう言つて、家を出る。

ただ、誰からも返事はない。

母はいまだに夢の世界だろうし、父は仕事で出張中のため不在、美

樹はたぶん無視。

なんだか、本当に、やるせなくなってくる。

家族がいるはずなのに、どうして、一人暮らしの独身男性の寂しい出勤みたいな事をしないとイケないのだろう。

誰でもいいから、せめて一人ぐらい

『いつてらっしゃい』

そう言つて欲しいものだ。

そうなれば、今日一日も頑張ろうと言つ気にもなれると言つのに。これで、今日何度目になるか分からないため息をつく、歩を進める。

外に出ても、まだ朝のため、うだるような暑さではないが、それでも、やはり十分に暑く、学校に付く頃には汗だくとまではいかないだろうが、確実に汗で制服をぬらす事になる。

せつかく新学期が始まるというのに、これでは、爽やかさなど微塵も感じられないものになってしまう。

心機一転、高校でリフレッシュしようと思つていたのに、出鼻からくじかれてしまった。

どうやら、神様はどこまでも、残酷らしい。

しかも、更に試練をお与えになつてくれるらしく、その場に立ち止まり、そのまま視線を横に変える。

登校の時は誰とも約束していない。

そのため、基本的に一人なので、隣には本来なら誰もいないはず。

だけど、家を出た時から、僕の隣にはずっと人の気配。

いや、実際は人じゃないんだから、そういういい方は間違いなんだろうけど、それ以外にうまい表現の仕方を僕は知らないから、結局そう言うしかない。

それに気にするべきはそんな事じゃなくて、隣にいる存在。

ふわふわと浮いて、僕に付いて来ている輩だ。

ある程度覚悟はしていたが、本当に付いてくるとは思わなかった。

というよりも、思いたくなかった。

「どうしたのよ、こんなところで立ち止まって」

呑気にふわふわと浮いているもの　姫は、急に立ち止まった僕を見て訝しげにそう尋ねる。家にいた間も一緒にいる事をさも当然そうにしていたんだから、僕がくつついて来ている事に対して、頭を痛めているとは全く思っていないのだろう。

「なんで付いて来るわけ？」

トラブルメイカーである彼女を学校につれていけば、きっと騒ぎを起こしてくれるだろう。

静かに僕の傍でふわふわ浮いているだけならいいだろうが、落ち着きのない彼女だ、うちよろして、問題を起こしてくれるに違いない。

しかも、今日は退屈な式なのだ、絶対に、我慢なんて出来ないだろう。

「別にいいじゃない。家にいたって暇だし」

とはいえ、だからと言って、家に押し込んでおいたところで、また問題は起こしてくれるだろう。

昨日、昼寝をして、しっかりと休養を終えた後、自宅に帰ってきたら、本当に大変だった。

しまったはずのマンガ本をまた引つ張り出していたかと思うと、過去の再現かのように、床中に本を散乱させていたのだ。

彼女を置いて出て行った時にある程度覚悟していたのだが、まさかここまでとは、と思うような惨劇だったのだ。

もちろん、また母にそれが見つかって、こってりとしぼられてしまった。

「それとも何？私が行っちゃいけないとでも言うつもり？」

よって、まだ、家に置いて行くよりかはましだろうけど、だからと言って、素直に連れて行くわけにもいかない。

やっぱり、騒ぎを起こされるわけにはいかないし、何よりせめて学校ぐらいは安息の地にしておきたい。

「いや、別に。ただ、あんまり騒がないように」

とはいえ、言っても無駄だろう。

彼女も僕が通っている高校の事は知っている。

置いて言っただとしても、勝手に来るだろう。

そうなれば、もう彼女の独断場。

僕を探すためだとしても言っただけ、やりたい放題やって、騒ぎを起こしてくれるに違いない。



なら、最初から、一緒にいて、彼女が暴走しないように気を配って置くほうが、まだなんとかなるかもしれない。

まあ、抑えられる自信はあんまりないけど。

僕が嫌がる事や困る事をやるのが大好きな彼女なのだ。

嬉々として僕の事をいじってくるだろう。

結局、どうあがいても、僕に心休まる場所はないと言っわけだ。

## 第八話 九月一日 姫と僕の痛い登校風景

しばらく歩いた後にようやく学校が見え始めた。

ここに来るまで、本当に苦労した。

元々、家の中にいたときのまま出てきたために、彼女は姿を消しているため、周りには見えない。

そのため、基本的に、端から見れば、僕のやっている事は、誰もいない虚空に向かって話しかけている、ちよつと痛い人だ。

その時は、運良く誰もいなかったため、変な目で見る事はなかったので、助かったけれど、いつまでも、そんな事をしていくわけにもいかない。

通学路のと真ん中なのだ。いつ人が通るかわからない。

すぐに、会話を打ち切り、歩き始めたのだけれども、そんな僕の立場など無視して、彼女は延々と話し続け、相手にされないと分かる

と、今度はいきなり実体化しようとしたのだ。

彼女にしてみれば、相手にされないのは、姿が見えないから、つまり姿が見えれば、相手にしてくれる。

そう単純に考えただけの事なのだろうが、僕にしてみれば、たまったものじゃなかった。

いくら実体化されたところで、部外者である彼女は学校には入れないから、追い出される事になるのは必至の事で、おまけに、容姿に関しては、飛びぬけていいから、周りにかなりバッシングされるだろう。

そして、それ以上に、問題なのは、状況なのだ。

もちろん、その時には既に、周りに人がいたため、いきなり、先ほどまでいなかった人間が、ぽんと出てこられたら、静かな朝の一時をぶち壊す大騒動になってしまう。

慌てて、小声で止めたから、なんとかあったけれど、もし僕の対応が一瞬でも遅く、彼女が実体化するような事になっていたら、ぞっ

としない。

結局、そのままなし崩し的に、小声でばそと彼女と会話をしたのだが、その光景が少々怪しすぎて、痛い人を見るような目で数人に見られてしまった。

こう言うとき、テレパシーみたいなものが出来ればいいと思うのだが、現実はやっぱりそううまくはいかないらしい。

まあ、憑かれていると言っても、別々の存在なのだ。

魂が繋がっているわけでもないのだから、頭の中だけで会話しようというのも無理な話だろう。

「とりあえず、ここからは、黙っていて。話しかけても、答えられないから」

なので、話をするためには、言葉にしなければならぬけれども、さすがに学校に憑いたらそんな事も言えない。

まだ、お互い知らないような相手なら、どんなふうに思われても我慢できるが、さすがにクラスメイトや友人にまで痛い人だとは思われたくない。

まあ、一応、僕が霊に憑かれやすい体質だと言う事は、友人だけなら知っているから、彼らの前に関してなら相手してやる事は可能なのかも知れないけれども、あんまり広めるような事はしたくない。もし、彼女が、美人だと知れば、絶対に実体化させようとするだろう。

僕の周りには基本的に飢えた獣ばかり、きつとなりふり構わず迫ってくるだろうし、おもしろそうな事が大好きな姫はきつと勝手に実体化しようとするだろう。

そうなったら、もう僕では收拾はつかなさそうだ。

「えー、やだ。相手しないと人前で襲うよ?」

「お願いだから、それだけは勘弁」

だから、一番無難な方法を選んだのだが、当の本人は全く納得いかないようす。

まあ、一人でふわふわ浮いてるだけじゃ、確かにおもしろくないの

は分かるし、僕に話し相手になってもらいたがるのも仕方ないだろう。

ただ、どうしても、脅し文句がそれなのだ。

これじゃ、まったく立場があべこべだ。

普通、そう言う言葉は男の人が女の人に言うものだし、そうであっても、言う人自体はほとんどいない。

その言葉を言う自体で、もう犯罪だ、手が後ろに回っても文句は言えない。

なのに、彼女は、そんな危険な言葉を平気で言う。

いったいどんな頭の仕組みをすれば、そういう発想になるのか、教えて欲しいものだ。

「んじゃ、相手しなさい」

「だから、無理だつてば。帰ってからしっかりと相手してやるから、我慢してくれって」

とはいえ、今はそんな事を議論している暇はない。

もう、どんどん学校は近づき、校門は目の前にある。

これ以上、ぼそぼそと独り言のように話すにも限界がある。

「……分かったわよ。その代わり、帰ったらしっかりとおもちゃにさせてもらうからね？」

だから、何が何でも、彼女には、黙っていてもらわないと困るのだが、ようやく彼女にもそれが分かったらしい。

後半部分がちよつと怖い気もするが、この際、そんな事は無視だ。とりあえず、今この場を何とか乗り切れただけでもましだと思いたい。

「んじゃ、私は家に戻っているから」

そして、彼女はそう言うのと、反転して、今来た道を戻っていく。どうやら、これ以上、僕にくっついてくるつもりはないらしい。

まあ、話す事も出来ないのだから、一緒にいても仕方ないだろう。校門をくぐり、昇降口を抜け、そこで、靴を履き替えると、教室にはいる。

そこには、見慣れたクラスメイトの姿がちらほら。

思わず、その姿を見た瞬間に心の奥底からほっとした。

今の今までずっと休まる時なんてなかった。

何かしらの制限付きで行動をするしか出来なかった。

昨日だって、一応、いつもの場所で昼寝をする事は出来たけれども、結界を張ると言う条件下での事。

何も気にせず、何もしないでいられたというわけではない。

だけど、今、この瞬間は違う。

確かに、式は退屈だろうし、ホームルームとかで、いろいろと面倒くさい話し合いもあるだろう。

だけど、そんな事は、延々と気を張り続けて、四六時中周りを気にしないといけなかった事に比べると、蚊に刺された程度だ。

もし、こうして学校にいる限り、姫の魔の手から逃れられると言うのなら、僕は喜んで、いくらでもこの退屈な時間を我慢しよう。

「おはよう」

クラスメイトに、そう声をかける。

僕の席はやや窓際よりの教室の真ん中辺り。

つまり、ものすごく中途半端な場所なわけで、まさしく平々凡々たる僕にぴったりと云った感じだろう。

そんな事をぼんやりと考えながら、僕は席に付いた。

## 第九話 九月一日 苦しい言い訳（前書き）

中途半端に切ったせいで、中途半端な始まり方になっちゃいました

……

なので、まあ、そこらへんは気にしないでください。

………  
お願いします。

## 第九話 九月一日 苦しい言い訳

「おはよう。元気にしてたか？」

僕の隣、つまるところ、ちょうど教室のど真ん中の席なのが、今僕に挨拶をしてきた人。

このクラスでは比較的仲のいい友人。

名前は、稲森誠次。

ただ、誠次と言う名の割りには、兄はおらず、一番上。

どういうネーミングセンスで、両親は、彼の名前をつけたのか知りたいものだ。

まあ、そんな事を言ったところで、一番変なネーミングセンスを持っているのは、間違いなくうちの両親だろうけれども。

普通のネーミングセンスを持っている人間が、男に由貴と名づけるだろうか？

たとえ、いたとしても、自分の苗字を考えたときに、疑問を抱くべきだ。

志亜由貴。

初めて自己紹介された人なんか、絶対『白雪』と勘違いするはずだ。男なのに、白雪。

僕が、まだその名前をネタとして使えるからと言って、気に入っているからいいかもしれないけれど、もし、それでくれたりしたらどうするつもりだったのだろうか。

まあ、うちの母親なら

『結局、ぐれなかったんだからいいでしょう』

あっさりそう言うてくれるだろうが。

結果論からしてみれば、確かにそれは間違いないんだろうけど、やっぱり少々納得いかない。

「まあ、それなりってところかな」

「ふーん。それなり、ねえ？」

この際、両親の素晴らしいネーミングセンスは横に置いておいて、カバンの中に突っ込んでおいた筆箱を机の中にしまうと、カバンを机の横にあるフックにかけ、答えておく。

とりあえず、クラスメイトとの親交を深めるのもいいだろう。

家に帰ったら、それはもうきつと思わず目を瞑りたくなるような地獄の惨劇が待っているのだ。

せめて、後生だから、この瞬間ぐらいは、のんびり穏やかに年頃の少年らしく青春を謳歌しても構わないだろう。

やっぱり、青春と言えば、血と汗と涙と友情だ。

そんな言葉は、ひと昔どころかふた昔もみ昔も前のドラマでしか使われない、と、思いつきり突っ込まれるかもしれないが、そんな事ではくじけない。

今の僕は無敵。

あの何でもかんでも押し付ける、我が家の女王である母や、恐怖の魔王である美樹や、傍若無人でわがままな姫はいないのだ。

机にひじを突いて、ぼんやりと窓の外を眺める。

昔は、いつでもできた事だし、そんなに特別な事ではないと思っていたが、今思うと、本当に貴重なものだと思う。

良く失って初めてその存在の大切さに気付くと言うが、まさしくその通りだ。

ぼんやりとすることが、どれだけ難しいのか、と言う事を姫と一緒にいる事でじつくりと学ばせてもらった。

けれど、今この瞬間は、僕は自由。

僕をこき使ったり、にらんだりするものはいない。

当然、セクハラまがいの発言をしていじり倒して食えるようなエスキャラはどこにもいるはずはない……

「あ、そう言えば、あのいつも一緒にいた後輩とはどうなったんだ？一夏のアバンチュールでもしたのか？」

と思いたかった。

けれど、悲しいかな。



やっぱり、そんなに現実には優しくはないらしい。

神様が残酷な人なのだ。

あの三人と離れたところで、神様はしっかりと僕の事をターゲットにしている。

そういう事なのだろう。

ただ、一つ言わせてもらえば、夏休みはほとんど姫のせいで潰れてしまったのだから、そんな嬉し恥ずかしどきわく体験、みたいなことはなかった。

だいたい、誠次が言っているいつも一緒にいる後輩だって、単なる僕の体質に関係する知り合いでしかなく、そんな事をしあうような仲ではない。

彼女が以前言った、僕に簡易結界を覚えてくれたり、たちの悪い霊を祓ってくれていた恩人で、良く一緒にいるのは、彼女の傍にいれば、霊が寄つて来ないから、と言う理由だけなのだ。

決して、誠次が思っているような関係ではない。

「……あのね、彼女とはそんな関係じゃないの。ただの先輩と後輩。分かる？」

とはいえ、だからと言って、本当の事は言えない。

僕は比較的オープンだし、ネタとして使えるなら別に良いか、と開き直っているからいいけど、彼女の方は僕と違って、隠している。

彼女の場合は、霊が見えるだけではなくて、それを祓う専門の家系でもある。

僕が彼女に簡易結界なんて、端から見たら胡散臭そうな物を教えてもらえたのも、それがあるからだ。

けれど、もし、彼女が霊能力者、しかも、本職の専門家だと知ったら、おそらく周りは彼女を気味悪く思っ、遠ざけようとすると思う。

いくら、霊能力者が、世間的に認知されているからと言って、必ずしも受け入れられてもらえられるとは限らない。

人は、自分の知らない、理解できないものに対しては、少なからず

恐怖を覚えてしまい、敬遠してしまう性質がある。

たぶん、未知の恐怖や危険から逃れるための自衛手段、生存本能から来る物からなんだと思うけど、やはり、実際に敬遠されたら、本当にきつい。

ただ見えるだけの僕ですら、奇異や侮蔑の目で、たまに見られるのだ、僕よりもっとすごい彼女になれば、それはもつとひどいことになってしまっだろう。

見られるだけではなく、実際に攻撃される可能性だってあるだろう。「あれだけ親密なのに、ただの後輩なのか？しょっちゅう一緒にいる姿が発見されているのに、それでもただの後輩と言うつもりなのか？仲良く私服姿でお出かけしている姿も発見されているのに、後輩だなんて言うつもりなのか？彼女の家に入っていくお前と彼女の姿さえも何度も発見されていると言うのに、まだただの後輩だなんて、いうつもりなのか？」

「うつ……」

とはいえ、さすがに、それでは誠次も納得してくれなかった。

まあ、誠次の言う通り、僕と彼女は一緒に居過ぎた。

理由が理由なだけにしかたないと言えば仕方ないのだけれど、事情を知らない誠次にしてみれば、年頃の男女がそれだけ親しげに一緒にいれば、そう思っても当然だろう。

普通、ただの先輩と後輩だけの関係で、そんなにしょっちゅう一緒にいたり、拳句の果てに家に上がるような事はない。

絶対何かあると思ってても仕方ない。

とはいえ、何一つ事情を話せない僕にとっては、どう反論しようもないのだ。

「はい、お答えは？」

そして、とどめの一言。

にこにことした笑顔で、そう言っているが、目は全く笑ってはいない。

『今度こそ、真面目に、しっかり吐け』

暗にそう言っているような目だ。

「好ましくは思ってるよ。彼女はどうか知らないけどね」

結局、白旗を上げるしかなかった。

とりあえず、少しぐらいは誠次の言葉を認めておかないといけな  
いだろう。

ただ、嘘をつかないといけないのは心苦しい。

彼女は、僕に取っては友人だし、恩人だから、好きか嫌いかと言え  
ば、間違いなく好きなのだが、誠次の言うような、恋愛対象として  
の好きではない。

確かに、見た目は可愛らしいし、性格だっていいから、割ともてる  
らしいから、そういう対象に思えてもおかしくないが、それでも、  
やはり僕には彼女にはそういう感情は持てない。

誠次だって、彼女の容姿がいいから、しつこく絡んできたのだろう。  
ちよつとした嫉妬って奴だろう。

まあ、その嫉妬のおかげで、こうしてつきたくもない嘘をつかない  
といけないといけないのは、ちよつと辛いが、

「ふーん、好ましく、ねえ？これまた、曖昧な言い方だな？」

「悪かったな、曖昧で」

「まあ、お前はそういう性格だから、仕方ないか。今日はこのぐら  
いにしておいてやるよ。ちよつとは素直になつたみたいだしな」

それでも、こうして誤魔化せただけでもましと考えよう。

下手に勘ぐられて、せつかく一生懸命になつて彼女が隠している事  
がばれるようなことになつてしまつては、目も当てられない。

せつかくの恩をあだで返すようなものだ。

「……ありがとよ」

僕は、ため息を吐きながら、そう答えたのだった。

## 第十話 九月一日 相方な後輩

退屈な始業式も無事終わり、学校は放課となった。

周りの生徒は散り散りになって、教室で友人と話したり、恋人とこれからのデートの予定を話し合ったりと、各々好きな事をしている。そんな中、僕は、一人静かに、廊下を歩いていた。

とはいえ、だからと言って、そのまま帰るわけではない。

姫の事が心配と言うか、心残りと言うか、早く帰らなかつたら、いったいどうなるのが、怖いけど、このまま帰るわけにもいかない。視線を上げる、ドアの上にあるプレートを見ると

『図書閲覧室』

そう書かれていた。

図書閲覧室、つまりは図書室。

僕の用事とはこれ。

実は、僕は、図書委員に入っている。

とは言っても、自分で立候補したのではなく、他薦で、推薦したのは、誠次。

しかも、その推薦理由が、

『ほら、由貴って、なんとなく図書室が似合いそうな雰囲気だろ。』

それに、白雪姫だって本が好きだったじゃないか』

そんなわけのわからない物なのだ。

だいたい、白雪姫が、本が好きだなんて、聞いた事ない。

もしかしないでも、『不思議の国のアリス』と、ごちゃ混ぜにして、適当に言っただけなのだろう。

とはいえ、誰だって、委員会にはいるなんて、面倒な事はしたくないのだろう。そんな適当な理由に頷き、僕に無理やり押し付けたのだ。

さて、そんな、僕が図書委員になった時の昔話はいいとして、中に入る。

中央にはいくつかの大きな机があり、そこにはすでに数人の人が集まっている。

「おはよう。それともこんにちは、かな？」

その中にいる一人の少女の隣に腰掛けると、挨拶をする。良く見知った人物。

と言うよりも、今朝、学校に来た時に、誠次が言っていた、いつも一緒にいる後輩だ。

彼女の名前は、鈴原志穂。

後輩と言っただけあって、僕の一つ下で、現在高校一年生。

もちろん、図書室にいるのだから、彼女も当然図書委員で、そもそも、僕と彼女が知り合ったのも、同じ図書委員だったから、という理由なのだ。

「時間的には微妙ですね。でも、まあ、こんにちは、でいいんじゃないですか？それなら、ある程度誤魔化しがききますし」

その後輩は、くすくす、と笑いながら、そう答える。

まあ、確かに彼女の言う通り、こんにちはならある程度誤魔化しが効くだろう。

おはよう、とか、こんばんは、それにおやすみ、とかは、時間限定なところがあるけれど、こんにちは、には、厳密な時間の決まりはないし、ある程度、大まかに出来る。

「そうだな。んじゃ、改めましてこんにちは」

「はい、こんにちは、先輩」

そして、改めて挨拶をしなおし、それと同時にお互いくすくすと笑い出す。

わざわざする必要なんてないのだが、まあ、ここらへんは単なる遊びだ。

彼女はのりがいいので、こういう言葉遊びみたいな事はしょっちゅうやっているし、それがまた、本当に楽しいのだ。

我ながら良い相方を見つけたと思う。

まあ、相方といったところで、漫才を始めるわけではないし、そん

な独特なのりが通じ合えるから、周りに誤解されるのだろうけれど。  
「そう言えば、先輩は夏休み、どうでしたか？」

ひとしきり笑いあった後、彼女は、いまだ表情に笑顔を残しながら、問いかけてきた。

彼女と最後に会ったのは、七月の末。つまり、一月以上あっていない事になる。

「うーん、まあ、いつもどおり、かな？」

夏休みの事を思いだしながら、そう答える。

姫のせいで、心休まることはないし、今にも発狂しそうだったのは確かだったけれど、霊が僕に憑いたり、その霊が悪さをしてくるのは日常茶飯事の事。

そう考えるといつもどおりと言えはいつも通りと言えなくはないのだ。

まあ、それが日常だなんて、あまり嬉しいとは思えないが。

「やっぱり、そうですか。ごめんなさいね」

彼女も、僕の言葉の裏を読み取ったのだろっ、申し訳なさそうに返す。

確かに、彼女と一緒にいれば、僕があ場所で、姫に憑かれるような事はなかったかもしれないし、例え、憑かれたとしても、彼女の力で、被う事だってできたかもしれない。

「いや、構わないよ。それより、そう言えば、夏休みはどうだった？ 確か、旅行に行ってたんだよね？」

だけど、だからと言って、彼女が悪いわけではない。

あくまでも、霊を呼びやすいのは、僕の体質のせいであって、彼女のせいではない。

それに、好意で被ってくれているのだから、感謝こそすれど、非難するのは間違いだし、彼女に責任を押し付けるのは、問題外だ。

「……旅行、ですか？」

だから、さっさと話を変えてしまおうと思ったのだが、彼女は何の事だが分かっていない様子。

まあ、それも仕方ないのかもしれない。

実際には、彼女は旅行には行っていないのだから、思い当たる節がないのは当然の事。

ただ、ここは学校で、周りには人がいるため本当の事を言えない。

「そう、旅行。八月にはいると同時に行った旅行」

「……ああ、あれですか。はい、そうですね。確かに、旅行に行きました」

そのため、今度は、少しだけ言い方を変えてみたのだが、どうやら今度は理解できたらしい。

実際に彼女が行ったのは旅行ではなく、修行。

奥秩父に両親に連れられて山籠りしてきたのだ。

だから、さっき、僕の事で彼女がすまなさそうにしていたが、どうしようもなかったのだ。

彼女には彼女の用事があったのだ。

まさか、その修行をやめろ、なんていえないし、言うわけにはいかないだろう。

こんなに良くしてもらっているのだ、これ以上わがまま言うわけにはいかない。

それこそ、そんな事をしたら、姫の仲間入りじゃないか。

どんな事があっても、それだけは、お断りだ。

「で、どうだったの、その旅行？」

修行のための山籠り。

当然、僕みたいな一般人はやったことないから、どんなものかわからない。

以前は、滝に打たれたり、断食をしたり、お経を唱えたりするものだと思っていたのだけれども、あっさりそれは彼女に否定された。

昔ならいざ知らず、現代では滝で打たれたり、断食をしたりはしないらしい。

それらは、そもそも邪念を祓ったり、身体を浄化させるためにあるらしく、単に修行をするのなら、そんな事はする必要はないらしい。

「はい、充実したものでしたよ」

そのため少々気になるのだが、どうやら良いものだったらしい。

そう答える彼女の顔は本当にいきいきしていて、その言葉にはどこにも嘘がないのが良く分かる。

「そう良かったね」

言葉どおりそれなら良かったと思う。

無事に楽しく出来たのなら最高だろう。

まあ、嫌な雰囲気を払拭できた事も、良かったと思っているけど。人の事を、自分の事以上に心配する、彼女の優しいところは、本当に良いところだと思うけど、そのせいで、暗い雰囲気になるのは嫌だし、やっぱり、せっかく一緒にいるのだから、楽しく話したいし、彼女には笑っていて欲しい。

なんて、そんなふうに思っているのが、誠次にばれたら、それこそ本当に勘違いされそうだが、それが僕の偽らざる気持ちだし、それに何より、やっぱり友人だろうと誰だろうと、やっぱり話している時は、笑ってもらいたいと思うのは、誰だって同じだと思う。

「はい、そろそろ委員会を始めます」

カウンターからそう言う声がした。

二人して、視線をカウンターに持っていくと、そこには司書の先生の姿があり、周りを見てみれば、すっかり人はそろっている。

どうやら、彼女と話している間に、集まっていたみたいだ。

もう少し、いろいろと話してたいが、さすがに話し合いの時まで話すわけにはいかないだろう。

「んじゃ、後で、もう少し詳しく聞かせてくれる？」

また、話し合いが終わった後にも、ゆっくりと話せば良いだけの事。

わざわざ、こそこそ隠れて話す必要もない。

時間はたっぷりあるんだ。

それに、その時ならば、変に取り繕ったような話し方をしなくてもいいだろうから、もっと気楽に詳しく話せると思う。



「はい、そうですね」

彼女も、それに頷いたので、ここで僕達は一旦会話を終わると、二人そろって委員会に参加した。

第十話 九月一日 相方な後輩（後書き）

とりあえず、ここに来て、ようやく主要登場人物が勢ぞろい。  
長かったなあ……

しかも、この時点で、もうそろそろで物語の折り返し地点になるわけですけどね。

## 第十一話 九月一日 夢ぶち壊し

「これからもよろしくな、相棒さん」

僕は、そう言っていると彼女の肩をぽんと叩く。

「はい、よろしく願います」

彼女も、頷くと、くすくすと笑いながらそれに答える。

もちろん、僕達がそんな事を言い合うのには、ちゃんと理由はある。今日、委員会が行われた理由がそれだ。

図書委員の仕事は大きく分けて二つある。

本の受け入れや整理などの裏方。

そして、もう一つは、昼休みや放課後の当番。

司書の先生の手伝いだ。

それをうちでは、二人一組でやるのだが、その一緒にやる相手と言うのが、僕の場合は彼女なのだ。

僕が彼女の事を相棒と言ったのは、そういうわけだ。

ちなみに、彼女と組むのはこれで二回目。

一学期の当番も同じだった。

まあ、基本的に、当番は一学期の当番を引き継ぐから、僕達が、また同じ日の当番になるのは、当然と言えば当然なのだが。

「んじゃ、そろそろ帰るか？」

周りを見渡してみれば、もう誰もいなかった。

どうやら、それぞれ帰ったらしい。

それなら、僕達もそろそろ帰ったほうがいいだろう。

姫の事もあるし。

「はい、そうですね」

彼女も、頷くと、カバンを取って立ち上がったので、彼女を引き連れて図書室を出る。

その時、一瞬だけ、またこの姿を見て、勘違いされるんだろうな、そう思ったが、この際気にしない事にした。

「ごちゃごちゃ考えるよりも、楽しいなら、楽しい。」

それで十分だ。

特別教棟から出て、昇降口に向かい、それぞれの下駄箱で靴を履き替えると、昇降口が出る。

その際に、ちらりと目の端に、誠次の姿を捉えたが、気にしない。にやにやといやらしい笑みを浮かべていたが、そんなものは記憶からデリートしておく。

「んで、修行の方はどんな感じだったの？充実したとは言ってたけど」

そして、校門を出て、周りに人がいなくなつたところで、話を切り出す。

彼女と、いろいろ当たり障りのない世間話をするのも好きだが、今は、彼女の修行の話の方が聞きたい。

八月中ずつと山に籠ってやっていたのだ。

気にするな、と言うほうが無茶な話だ。

僕のような一般人の知らない特別な修行方法で、特訓をしているかもしれないし、はたまた、たくさんの霊を、びしびし被っていたのかもしれない。

いや、もしかすると、新しい技を伝授されているかもしれないのだ。鈴原流奥義、何々、とか。

まあ、最後の奥義云々の話しは冗談だけど、それでも、やっぱり、いったいどんな生活だったのかは物凄く気になってしまふのだ。

「うーん、そうですね。たいしたことはやってないですよ。山に籠って修行と言っても、どちらかと言うと、別荘に遊びに行ったという感じです。修行らしい修行だって、ほとんどまともにしていませんから」

が、期待虚しく彼女の答えはあまりにも悲惨だった。

「せいぜいまともにやった修行だって、軽い長刀の練習程度で、それ以外は本当に、学校の宿題やったり、お昼寝したりでしたし……」  
「なんか、もう夢も希望もない、と言うのはこの事なのだろうか。」

せめて、もう少し幻想を持たせて欲しかった。

と言うよりも、こんな単なるお遊びのために、行ったとも言っただろうか？

「あと、そうですね、テレビも普通に見てましたよ。いや、ちゃんと写るもんなんですね」

そして、それに答えるかのように、とどめの一言。

ありがたみもなにもない。

そんな適当なものだろうか、修行と言うものは。

なんだか、そんな適当なものに助けられている自分が情けないし、頼ろうとしている事自体恥じるべき事なんじゃないのかと思う。

だいたい、なんで奥秩父にテレビの回線が繋がっているのだ。

あんな人里はなれた秘境のような場所なんだから、もっと神秘的にして欲しいものだ。

これなら、別に修行なんかに行かずに、ここに残ってくれても良かったんじゃないかとさえ思えてくる。

とはいえ、さすがに実際にはそれは言わない。

少々不満があると言えばあるのだけれども、やはり、それは言うてはいけない。

「まあ、楽しかったなら、それでいいよ、うん」

だから、とりあえず、適当にお茶を濁しておく。

これ以上、このネタでは盛り上がりそうにもない。

それに、もうそろそろ切り出してもいいかもしれない。

元々、今日の本題は別にちゃんとあるわけだし。

そもそも、そのために、修行ネタをふったわけだし。

「それよりも、ちょっと頼みたい事があるんだけどいい？」

「はい？」

「あつてもらいたい霊がいるんだ」

そして、ついに切り出す。

それは彼女にいつもお願いしていた、たちの悪い物を抜ってもらう事。

もちろん会ってもらいたい霊なんて物は、一つだけ。

姫だ。

姫のたちの悪さは筋金入りだから、大丈夫だろう。

あんな淫魔やらサキユスバスみたいな人をたちの悪いと言わずに、  
なんと言っ。

僕なら、絶対にたちの悪い、と判断する。

とはいえ、だからと言って、別に会わせて、被ってもらいたい、  
というわけでもない。

確かに、騒ぎは起こしたり、セクハラをしたり、迫ってきたり、魂  
を狙ってくるなど、僕にして見れば非常に迷惑極まりない事ばかり  
をしてくれたんだけど、それでも、被っ、というよりも、無理  
やり成仏させるような事はしたくない。

彼女とて、そんなに悪い霊でもないし、実際に実害を出したわけじ  
やない。

ほとんど、あれは単に遊びの範疇の事だと思うし、まだ笑って済ま  
せられる事でもある。

時々、本当に心の奥底から殺してやりたいと思うときも、確かにあ  
るけど、それだって、本当に心の奥底から憎んで言っているわけで  
もないし。

ただ、それでもやっぱりいつもやりこめられているのは、僕  
としては悔しいし、それにより、いつまで理性が持つかも怪  
しい。

というわけで、せめて、彼女にとって脅威となるものの存在を僕が  
持っている。

その事を示して起きたいのだ。

そうすれば、さすがに、彼女も少々は自重してくれるかもしれない。  
つまり、ペットのしつけみたいなものだ。

自分が上位者である、そう思わせるのだ。

まあ、とはいえ、もしかすると、それでは霊に対して甘いのかもし  
れないと思う。

確かに、今は実害はない。

彼女の性格のおかげだろうが、誰かを呪い殺したりするような事もなければ、僕の身体をのつとろうとしている様子もない。力を全く使おうとしていない。

そのため、現状ならば、比較的安全なものなのだ。けれど、だからと言って、そのまま、彼女が何もしいとは限らない。

今は、キスを迫り、魂を少し抜こうとするだけにとどまっているけれど、それがいつエスカレートするかはわからない。

いきなり、誰彼構わず襲ったり、志穂ですら、手のつけられないような状況になってしまう可能性だって十分にあるのだ、それを考えると、できるだけ早く、後々の事を考えて、成仏させてしまうほうがいいのかもしれない。

いや、そうすべきなんだと思う。

だけど……

「その憑いた奴がちよつと変でね、困ってるんだ。だから、軽く脅しをかけて欲しいんだ」

僕にはやっぱりできない。

例え、その結果として、かなりの被害が出たとしても、やっぱり、彼女が成仏する事を望むならまだしも、何もしていない状況で、いきなり成仏させようなんて、僕には出来ない。

誰かの意思を無視して、自分の気持ちを押し付けるような事はしたくない。

それが、たとえ、生きた人ではなく、霊であつたとしても。

「だめ、かな？」

そして、僕は、彼女に問う。

結局は、全てを決めるのは彼女。

僕が、お願いをしたところで、彼女にそれをするだけの体力がなかったり、または、する必要がないと感じれば、彼女は何もしない。実際に、お願いしても断られてしまった事は何度もある。

だから、今回も断られる可能性だつて十分に考えられる。  
そろりそろりと、彼女の表情を盗み見る。

だいたい、聞いたときの反応で分かる。  
申し訳なさそうな顔をしていなければ、基本的に、断われたりはしない。

さて、彼女の浮かべる表情とはどんなものなのだろうか。



## 第十二話 九月一日 僕と後輩と痛い下校風景……デジャヴ？

そろりそろりと彼女の顔を見ている。

「はい、いいですよ」

けれど、彼女は、どこにもそんな表情を浮かべる事なく、穏やかな笑顔を僕に見せ、そう頷いて見せた。

ほっと一安心。

ここで、断られたら、どうしようもなかった。

とりあえず、僕の穏やかな生活への道も一歩前進。

「うちにいるんだけど、構わないよね？」

ただ、一応、もう一度確認。

姫がいるのは、僕の家。

確かに、誠次が言ったように、僕は志穂の家に何度かお邪魔している。

ちろん、たちの悪い霊に憑かれた時の事で、被ってもらったために、わざわざ行った。

別に、何か特別な道具が必要だったり、家に帰らないと出来なかったりするわけではない。

単に、彼女の家なら、誰にも見られる事なく、しかも、安全に行えるから行っているわけに過ぎない。

除霊をして入るときの姿は、やはり異質で、人が見たら、奇行にしか見えないから、そうするしかないのだ。

とはいえ、今は違う。

ただ、会うだけで、被ったりする必要はない。

たとえ、脅して一発かますだけだったとしても、そんなにおどろおどろしいような事はせずに、軽い物でも十分に出来るはずだ。

だから、ほとんど遊びに行くようなものだ。

しかも、当の霊と一緒に連れて来ていないのだ、かなり怪しい物だつてある。

別に、僕は彼女をどうこうするつもりはない。

というか、そんな事が出来るようならば、彼女に頼るような羽目にならず、いくらでも、姫をやりこめる事ぐらい出来たはずだ。

でも、それは僕の中での話で、世間一般的に見てたら、やっぱり少々危ない感じもするだろう。

だから、そう聞いたのだが

「はい、構いませんよ」

あっさりと頷いてくれた。

信頼してもらえた事が素直に嬉しい。

そんな甲斐性がないと思われているだけなのかも知れないけれど。

「それにしても、先輩の家か。ちよつと楽しみかも」

どちらにしろ、助かった事には変わりはないので、その言葉を聞いて、安堵の声を漏らしていると、彼女はそう続けた。

その表情は、どこか晴れやかで、嬉しそう。

なぜ、そんなに嬉しそうなのは、全く分からない。

もしかして、身の危険とか、そういう事を、全く考えず、条件反射に答えたのかもしれない。

それだけ、僕の事を信用してくれているだけの事なのかもしれないけど、もう少ししっかりと考えて欲しい。

と言うよりも、自分の容姿について、自覚があるんだろうか。

……いや、ないだろうな。

自分に寄せられている好意に全く気付かない鈍い人だし。

以前、机の中に、ラブレターが入ってたときの話を聞いたときなんて、本当に相手の人が可哀想に思えた。

そのラブレターには宛名はなく、ただ、裏にそのラブレターを書いた人の名前が書かれていただけだった。

もちろん、普通なら、宛先はなかったとしても、自分への物だと思っただろう。

何度もラブレターをもらったり、告白を受けているんだから、そう思うのは普通なのだ。

まあ、そのたびに、何で私がそんな物をもらったり、されたりするのだろうと、首を傾げていたが。

そこらへんから、自分がどれだけ整った容姿をしているのかを、全く分かっていないのだが、それでも、しょっちゅう告白されているのだ、それが自分の物だと思ってもおかしくはないはずなのだ。

なのに、彼女は、こともあるうか、そのラブレターを書いた本人に『これ、間違つて入ってましたよ』

そう言つて、返してしまつたのだ。

もちろん、書いた本人もびっくり。

まさか、そんな反応されるなんて思つてもみなかつたのだろう。

彼女の話では、しばらく呆然とした後、

『あ、ありがとう』

そう言つて受け取つたらしいのだが、あまりにも切ないお話だ。

それを聞いた瞬間、思わず、大爆笑してしまつた。

書いた本人にしてみれば、悲劇だろうし、もし、それを書いたのが僕だったら、余りの恥ずかしさに悶え死ぬ事になつていたと思うけれども、他人から見れば、これ以上の喜劇はない。

ふられるならまだしも、相手にすらされていないのだ、笑い物以外なんでもないだろう。

もちろん、隣にいた彼女は、そんな僕の姿を見て、きょんととしていたが。

まあ、そんなわけだから、彼女は恋愛関係においては本当に鈍い。

未発達と行つてもいいと思う。

もしかすると、初恋だつてまだなのかもしれない。

そんな彼女なのだ、きつと身の危険とか、そういうのすら全く考えおよびつかないのかもしれない。

そう考えると、少々頭が痛くなつた。

姫の事だ。

もし、初恋すらまだのような純情で純真無垢そんな志穂が、姫に会つたら、いったいどうなるのだろうか。

あまつさえ、姫お得意の下ネタや卑猥で教育上不適切な単語を連続してきたら、いったいどうなるだろう。

そんな絶望的な世界を想像すらしたくない。

僕は、呼んだ事を、恐ろしく後悔する羽目になるかもしれない。

とはいえ、だからといって、今更、やめにするわけにもいかない。

「ふんふん 先輩のおうち」

隣にいる彼女は、非常にご機嫌そうで、なんだかネジが一本や二本ぐらい抜けてしまったようなテンションで、わけのわからない歌を小声で唄っている。

こんな嬉しそうな彼女を見て、やっぱり、行くのを止めよう、なんていえるだろうか。

しかも、その理由が、相手の霊が下ネタや卑猥で教育上不適切な単語を言つて来るから、なんてものじゃ、彼女も納得しないだろう。というか、そんな理由すら言えないかもしれない。

下ネタや卑猥で教育上不適切な単語なんて、彼女には、縁遠いもの。女の子同士で話しているうちに、そういう会話になる事だって普通はあるのだろうが、彼女の場合、周りの友人も彼女の純情さと言うか、箱入り娘度を見て、彼女の前ではそんな会話なんてほとんどしない。

したとしても、本当に可愛らしいものだ。

当の彼女は、何の事だが全く分かっていなかったらしいが。

やっぱり、霊能力者一族と言うのは、あんまりよろしいものではないらしい。

そこまで箱入り娘にするのは、問題だ。

もう少し危機感を持たせるために外を見させるべきだ。

まあ、志穂の場合は、手遅れだろうけど。

もうそんなふうに育ってしまったのだから。

「ふんふんふーん。おうちで二人きり」

さらに、彼女は歌い続ける。

たぶん、僕には聞こえていないと思っているんだろうが、こんな傍

にいれば、聞こうとしなくても聞こえてしまう。

しかも、なんとなく危険なワードが飛び交っていたような気がする。だいたい、二人きりと言っても、妹の美樹も僕と同じく、今日は始業式で、その後、昼まで部活があるみたいだから、いないんだけれども、母もいれば、姫もいるのだから、そんな物になるわけがない。そもそも、彼女はこんなキャラクターだっただろうか。

僕の知っている彼女は、もう少し物静か、というか、大人しい子だった。

いったい、何が彼女をそうさせるのだろうか。

少々気になるし、できればそのところを詳しく聞きたいのだが、

「ふふんふーん。どきわく体験」

ちよつと怖いから、できそうにもない。

なんだか、彼女が知らない人、というか完璧に痛い人に見える。

それに、

「はい、到着」

家に着いてしまったのだ、そんな暇もないだろう。

「ただいま」

「おじゃまします」

二人そろってそれぞれそう言って、家の中に入った。

### 第十三話 九月一日 僕と後輩とのときわく体験！？

家の中は意外と静かで、荒れている様子もない。

まあ、姿を消しているはずだし、部屋の中にいるはずだから、ここらへんが散らかっているわけもないが。

靴を脱いで、家に上がる。

けれど、靴は僕と、今脱いでいる志穂の二人分だけ。

姫はもちろん靴なんて履いていないから、なくて当然なのだが、母の分がない。

どこかに出かけたのかもしれない。

そう言えば、もうすぐお昼だし、お昼ご飯の材料でも買いに行ったのかもしれない。

「あー、しまったかも」

と、そこまで考えたところで、自分の失敗に気が付いた。

少々自分の事で一杯一杯になっていたせい、志穂のお昼の事を全く考えていなかった。

彼女も僕と同じで、今日は昼まで。

当然、お弁当なんて物は持ってきていないだろう。

そうなれば、彼女のお昼はない。

これは、大失敗だ。

「どうかしましたか？」

「いや、気にしないで」

「そうですか？」

彼女はきょとんしながらも、頷く。

せめて、お昼ご飯ぐらい食べてから来てもらえば良かったのかもしれないが、今まで一度も彼女を僕の家に呼んだ事なんてないのため、道は全然知らない。

そうなれば、逆に僕達が行くしかないんだろうけど、絶対に姫は付いて来ないだろう。

もちろん、うまく誤魔化せば最初の内ぐらいはどうかできるだろうけれども、やはり、彼女の家が近づくとなんか難しいと思う。

彼女の家の外見は、そんなにいかにも霊能力者一族の家、みたいなおどろおどろしい感じはしないけれど、それでも雰囲気は凜としていて、ちよつとした威圧感を持っている。

勘のいい姫の事だ、あつさりと逃げてしまつかもしれない。

なら、ここに呼ぶしかなかったのだ。

お昼ご飯の事も、後で母に頼めばいいだろう。

変に誤解される可能性もあるが、そのときはその時だ。

「あの、それで、ご家族の人は？」

ひとまず、さつさと姫と会わせてしまおう。

そう思つて、自分の部屋に案内させようとしたところで、彼女は、きよきよと周りを睨まわしながら、そう尋ねる。

思わず、背中に嫌な汗をかく。

もともと、母がいると思つていたから、彼女を家に呼んだのだ。

もちろん、何度も言っているが、いかがわしい事なんてするつもりは毛頭ない。

けれど、それでも、やはり、女の子を安心させるためには、やはり親がいないのはきつい。

別に紹介するとかそう言う事をするつもりは全くないけれど、それでも、家に二人きり、と言うのは少々まずいだろう。

とはいえ、だからと言って、嘘をつくのはまずい。

あんまり嘘をつくのは、うまくない。

すぐに顔に出てしまう。

それに、話しこんでいる途中で帰ってきたら、かなり気まずい。

「えーと、いないみたい。たぶん、お昼の買い物にでも行ったと思う」

「…え」

結局、正直なところを言うしかない。

それはそれで気まずくなるかも仕方ない。

嘘をつくよりかはましだ。

案の定、それを聞いた彼女と言えば、ちょっと驚いたような顔をしている。

来るまで、変な歌を唄ってはいたが、やはり、想像上で二人きりになるのと、実際に二人きりになるのでは、大きな違いがあるみたいだ。

もじもじと恥ずかしそうにしている。

僕としては、そんな態度を取られるほうが逆にどきまぎしてしまう。まあ、ただ、唯一の救いと言えば、

「ま、まあ、上にその会わせたい霊がいるから、あがるつか？」

上に姫がいる事。

彼女がいれば、とりあえず、変な事はまず起きる事はないだろう。

まあ、へたれで甲斐性なしの僕だから、変な事なんてないだろうけど。

とんとん、と彼女を連れて階段をのぼる。

「……ふ……り……り、ど……くた……ん」

後ろにいる彼女がぼそぼそ何か言っているが、小声のせいとか全く聞こえない。

少々気になるが、この際無視しておこう。

「ここが僕の部屋。んで、会ってほしい霊もここにいます」

階段を昇りきり、部屋の前に立つと一旦止まり、彼女の方に向き治るとそういう。

さすがに、いきなりあけるのもなん。

この部屋にいる姫はとりあえずかなりインパクトが大きい。

いきなり会わせて、あまりのショックに倒れる、なんて事はないだろうけど、それでも、かなりのショックをうけるとは思っ

ワンクッションぐらい置いておいた方がいいだろう。

「んじゃ、開けるね」

しっかりと彼女がドアの前にたち、ちょうどいい間を取り終えると、そう言っ

てドアを開け



「えっと、名前は姫。見た目はいいけど、性格はあれだから気をつけてね」

即座に、もう一度彼女の方に向き直り、紹介しておく。帰ってきたと同時に突撃してくるであろう姫の機先を制するため、だが、目の前にいる彼女からは反応はない。

そして、なぜか、背後からの反応もない。嫌な予感がした。

それに合わせて、背中に冷たい汗をかき始める。

ぎぎぎ、とまるで油の切れたぜんまいのような音を脳内で感じながら、ゆっくりゆっくりと自分の部屋を見してみる。

本来なら、そこには、姫がいて、大騒ぎをしているはず。

いや、そうしていないといけないはずなのだ。なのに……

「あの、誰もいないんですけど」

「うそーん」

けれど、そこには姫はいなかった。

綺麗さっぱりどこにも姫の姿はなく、散らかった部屋があるだけ。思わず、あまりのショックに、分けの分からない反応を取ってしまった。

おそらく、この部屋の様子からして、確実に姫は一度帰ってきたんだろう。

そうでなければ、昨日綺麗にしたばかりの部屋がこんなまるで泥棒に入ってから散らかったような散らかり具合になるはずはない。

そして、今いないのも、暇になったかどうかで、部屋をこのまま散らかしたまま出かけてしまったんだろう。

とはいえ、この状況はあまりよろしくない。

いると思っていたはずの親は不在で、しかも、目当ての姫もどこにもいない。

完全に一つ屋根の下に二人きり。

最初から、そんなつもりなんて毛頭なかったから、余計に心理的に

プレッシャーを感じてしまう。

再度、彼女の方へと向き直って見るが、見なければ良かったのかも  
しれない。

恥ずかしげに、頬を朱に染め、もじもじとしている。

その姿を見て、この事を意識していると思わずに、何と思えと言っ  
たのだ。

「あー、うん。たぶん、どっかに出かけてるみたい。とりあえず、  
お茶でも淹れてくるから、適当に座って待ってて」

あまりの恥ずかしさにいたたまれなくなって、僕は、逃げ出すよう  
にそう言つと、階段をどたと降りていく。

ダイニングに入ると、コップを出すと、すぐに蛇口を捻って、水を  
注ぐと一気におおる。

頬を触れば、明らかに熱い。

確実に、赤くなっていると思う。

予想外の出来事とは言え、緊張しすぎだ。

第一、僕と彼女はただの友達なのだ、何を気にする必要があるとい  
うのだ。

僕と彼女が、恋人同士だったり、または僕が彼女に気があるなら、  
どきまぎするような状況かもしれないが、そんなものじゃないのだ  
から、むしろ堂々としておくべきなのだ。

軽く顔をぱしっと叩くと、戸棚から、カップとソーサー、さらにポ  
ットを出す。

そこに、紅茶パックを入れ、お湯をそそぐ。

一応、茶葉の紅茶もあるにはあるのだけれども、僕は紅茶の淹れ方  
なんて、知らないから使えない。

しつかりとお湯に浸して、味と薫りを取ると、パックを三角コーナ  
ーに捨てて、紅茶を淹れたポットとカップ、ソーサーを、それぞれ  
トレイに置くと、机の上に置いてある軽い茶菓子を入れておく。

まあ、茶菓子と言っても、饅頭だが。

紅茶にお饅頭と言っ組み合わせに、違和感を感じたりはするのだけ

れども、目に付くところにあるお茶菓子はそれしかないのだから仕方がない。

確か、母が、お土産にもらってきたものだ。

それらを載せたトレイを上手に持ち上げると、こぼさないように運ぶ。

ダイニングを出て、階段を昇る辺りが一番の難所だが、それも無事切り抜けると、自分の部屋の前にたつ。

部屋の扉は閉められており、おそらく、彼女は、部屋の中にいるだろう。

あんな散らかった部屋に押し込んでしまったことが、少々恥ずかしかったが、あの時の僕にはそれぐらいしかできなかったので、許してもらおう。

コンコン、と、ドアを叩き

「お茶入れてきたよ」

そう言うのと、落とさないように、バランスよくトレイをもち、ドアを開けて中に入る。

「あ、ありがとうございます」

「いいえ、はい、どうぞ」

テーブルの傍に腰を賭けていた彼女の前に、ソーサーとカップを置き、それに紅茶を淹れ、その傍にお茶菓子を置くと、僕もテーブルの傍に座る。

彼女は、僕が座る野を確認すると、紅茶に口を付ける。

そう言えば、彼女が紅茶を飲んでいるところは初めて見る。

彼女とは、一緒にご飯を食べたり、家にお邪魔した時なんかにお茶をご馳走してもらった事は何度かあるのだけれども、紅茶、それとコーヒーなんかを飲んでいる姿を見た事は一度もない。

ほとんど、緑茶か麦茶を飲んでいるところしか見た事はない。

「おいしいですね」

一瞬、和茶しかダメなのか、そう思って心配したが、どうやらそれは杞憂ですんだらしく、彼女は、美味しそうにそれを飲んでいる。

「うん、美味しい」

それに安心した僕も、紅茶に口を付ける。

まだまだ暑い、この残暑の時期に、熱い紅茶を飲むのは、ちょっとおかしいかもしれないが、アイステイーなんて物は、この家にはないから、ホットにするしかない。

「…んく」

もう一口紅茶を口に含むと、今度は、饅頭の包装紙を解くと、かじる。

しっとりとした白餡の滑らかな甘さと少し渋みのある皮が絡み合い、程よい口辺りになる。

中々、おいしい。

ただ、やっぱり難点を上げるならば、一緒に飲むのが紅茶と言う事ぐらいだ。

やっぱり、饅頭と一緒に飲むんだつたら、煎茶がいいだろう。

とはいえ、残念ながら、この時期に煎茶は家がない。

やはり、どうしてもこの暑い時期に飲むのは、麦茶になってしまう。

第十四話 九月一日 二人でお片づけ（前書き）

ちよつと間隔空きましたねえ。

うん、まあ、大丈夫さ。

今日は二話更新だしww

## 第十四話 九月一日 二人でお片づけ

「……ん、ごちそうさま」

そして、饅頭の最後のひとかけらを食べ終わると、残っている紅茶も一気に飲む。

まだ、少々熱いが、それでも、一気に飲めないほどではない。

彼女の方も、紅茶がまだ半分ほど残って入るぐらいで、饅頭の方は、食べ終えている。

まあ、一つしか持ってきていないのだから、すぐになくなってしまふのは当たり前か。

お茶も飲み終わり、手持ち無沙汰になったので、周りを見渡す。相変わらず、物凄い散らかりよう。

もし、これを僕が学校に行っている間の数時間の間にやったというのなら、すごいものだ。

ある意味才能と言ってもいいだろう。

もちろん、褒め言葉ではないが。

「……ごめんな。わざわざ来てもらったのに、家には誰もいないわ、部屋は散らかってるわ、目的の奴はいないわ、で。本当に申し訳ない」

しかも、勝手にいなくなるし。

本当に困ったものだ。

「いえ、構いませんよ。こうして、遊びに来るだけでも楽しいですし」

「そう言ってくれると助かるよ」

彼女がまだ笑ってそう言ってくれるから、ましだけど、僕としては非常に心苦しいものがある。

できる事なら今すぐ帰ってきて欲しい。

そうじゃないと、間が持たない。

なんともなしに彼女の方をちらりと見てみる。

とりあえず、退屈じゃないか心配だったが、彼女は興味深そうに、きよろきよろと辺りを見まわしてる。

何か、おもしろいものでもあるのだろうか。

まあ、男子にしてみれば、女子の部屋なんかは完全に未知の世界で、いろいろと気になってしまふところがあるから、彼女がそうしてしまふのも、そういう気持ちと似たような物なのかもしれない。

とはいえ、この部屋には、どこにも男子特有の物はない。

それこそ、ベッドの下や本棚の裏に置かなければならないような類の本なんて一冊もない。

そんなものが、見つかった日には、それをネタにして、姫が襲ってくるかもしれない。

まあ、それ以前に、あんまりそう言うものには興味がないというものもあるけれど。

「すごいだろう、この散らかりよう。昨日の夜に頑張つて綺麗にしたのに、僕が高校に行つて数時間空けている間に、これだけの事をやるんだから」

「ふふ、そうですね」

床に散らばっている本を手にとると、ため息混じりにそう言う。

その言葉を聞いた彼女も、苦笑している。

「ある意味才能だね、ここまで来ると」

そんな彼女につられて、僕も苦笑すると、立ち上がり、手に持っているマンガ本を元の場所に戻す。

お客がいる以上、母が家に帰ってきたら、様子見ぐらいしにくるだろう。

その時、散らかっていたら、またお小言を言われてしまふ。

「あ、手伝いますよ」

更に、床に散らばっているマンガ本を拾い、元の場所に場所に戻している、彼女も立ち上がり、手伝いを申し出てくれる。

本当にありがたい。

「ありがとう」

素直にお礼を言うと、手伝ってもらう。

一人でやるよりも二人でやるほうがはかどる。

彼女が、それぞれ同じシリーズに集めて、それを僕が本棚に並べる。散らばっている量はかなり多いが、それでも、彼女が手伝ってくれているおかげで、早く終わりそうだ。

これなら、母が帰ってくるまでに終わってしまうだろう。

受け取ったマンガ本を、本棚に並べつつ、彼女の方へと視線を写す。ときばきと動くその姿は、掃除をやり慣れているように見える。

たぶん、これが姫だったら、こうはいかないだろう。

そもそも、掃除なんて物はしないし、手伝いを頼んだところで、何もしないのだが、それでも、もし手伝ってくれたとしても、足手まといになっても、戦力にはならないだろう。

本当に、どうしようもない霊だ。

「うし、終わり、と。ありがとね」

「いいえ、構いませんよ」

最後のマンガ本を受け取ると、それを元に戻し、ようやく終わる。時間としては、数分とかかかっていない。

思ったよりも疲れなかったのは、彼女のおかげだろう。

一人で鬱々とやるよりも、やはり誰かと一緒に協力してやるほうが、楽でいい。

「んじゃ、ちょっと紅茶淹れなおしてくるから、ちょっと座って待ってて」

とはいえ、それでも少々疲れたし、喉も渴いた。

それに、手伝ってもらったのだから、何のお礼もしないというのも気が引ける。

彼女を、テーブルの傍に座らせると、ポットをトレイに載せると、そのまま部屋を出て、そのままダイニングに向かう。

その途中で時計を見たが、針はもうすぐで十二時を指そうとしている。

と言う事は、さすがに、そろそろ母も帰ってくるだろう。



昼ご飯の準備だつてあるわけだし。

先ほど取った同じ方法で、紅茶を淹れると、また、階段をのぼり、部屋に戻る。

「ただいま。はい、どうぞ」

そして、座っている彼女の目の前にあるカップに紅茶を注ぐと、差し出す。

「ありがとうございます」

「いえいえ、どういたしまして」

彼女のお礼に答えながら、今度は自分のカップに紅茶を注ぐと、口をつける。

さつきと同じメーカーの同じ銘柄のはずなんだけど、味が少々違う。さつきよりも、少しだけ渋い。

どうやら、少々浸しすぎたようだ。

まあ、僕は、渋いものや苦いものには、ある程度耐性があるし、基本的に紅茶とかコーヒーは、ノンシュガーノンミルクで飲むので、そんなに辛くはない。

「ん、美味しい」

けれど、彼女は違うかも知れない。

そう思つて、ちらりと彼女の方を見てみたが、意外にも美味しそうに飲んでいる。

彼女も渋い物には慣れているのかもしれない。

そう言えば、彼女の家に行った時、茶室があったから、抹茶とかを飲む機会が良くあったのかもしれない。

もしそうなら、渋いのに慣れているのも分かる。

一度、小学校か中学校か忘れたが、お茶を点てる機会があったんだけど、あの時飲んだ抹茶の味は今でも忘れない。

もう、なんと言つか、思わず顔をしかめ、口中が気持ち悪くなるほど渋かったのを覚えている。

その時は、本当に、このんで抹茶を飲む人の気持ちが全く理解できず、舌がおかしいんじゃないのか、と、そう思ってしまったものだ。

もちろん、今も理解できない。

もし、お茶を出されても、即座に拒否するだろう。

あんな苦くて渋くて口中が、何とも形容しがたい不思議な感覚に苛まれるような物を飲みたいとは思えない。

再び、カップに口を付け、紅茶を飲む。

ちよつとだけ渋みと薫りが増した紅茶は、それはそれで美味しい。さつきみたいに、渋みと薫りが弱いのも、好きだが、僕としては、こっちの方が割りと好きだ。

淡い味よりも、やっぱり、しっかりとした味の方がいい。

まあ、舌が肥えてなくて、しっかりと味が付いてないと、良く分からないから、と言うのもあるが。

最後の一口を一気に飲むと、カップをソーサーの上に置く。

彼女の方を見ると、まだ、半分ほど残っている。

そんな彼女から視線を外すと、ぼんやりと窓の外を見る。

相変わらず、窓の外から見える空は、青く澄みわたり、顔を覗かせている太陽は燦々と照りつけている。

こんな時期に、良く出かけるものだ。

姫の事を考えていると、思わずそんな事が浮かんだ。

まあ、霊だから、実体化していないかぎり、暑いとか寒いとか、そう言ったものは感じないだろうが、それでも、こんな時期に出かけたいとは思わないはずだ。

霊なら霊らしく、もっと暗くてじめじめとしたところを好んで欲しい。

それとも、もしかして、このまま帰ってこないつもりなのだろうか。全く相手にされない事に拗ねて、別の相手を探しに行っているのか。もしれない。

もしそうなら、本当に助かる。

まあ、たぶん、そんな事にはならないだろうと思うけれど。

どんなに、僕以外の人に憑け、と言っても、無視して、僕に憑いて迫り続けてきたのだ。

いきなり、ここであつさりと手を引くとは思えない。

それに何より

「ん、美味しい」

ここで、いなくなれたら、志穂になんて言えばいいのかわからない。

わざわざ会わせに来たのに、いなくなりました、では困る。

それに、下手したら、霊にあわせる事を口実に、彼女を誰もいない家に連れ込んだ、そう誤解されてしまうかもしれない。

たぶん、彼女の事だから、気を悪くするような事はないだろうが、それでも、やはり気持ちがいい物ではないと思う。

第十五話 九月一日 姫 vs 志穂 熱き戦いの始まり（謎（前書き））

まあ、熱いかどうかは知りません。  
知りませんが、二人の仲では熱いんでしょう。

第十五話 九月一日 姫 vs 志穂 熱き戦いの始まり（謎

心の中で、

『早く帰って来て』

そんな無駄とも思えるお祈りをしていると

「ただいま」

不意に声がした。

高くも低くもない、聞きなれたアルト。

おそらく、母だ。

立ち上がり、部屋から出て、階段から玄関を見ると、そこには、母の姿がちゃんとある。

どうやら、間違いはなかったらしい。

とりあえず、母が帰って来てくれただけでもまだ。

「おかえり」

僕は、そうとだけ、返すと、また部屋に戻る。

「ご両親だったんですか？」

「うん、母さんだった。すぐ傍に買い物袋があったから、やっぱり、買い物に行ってたみたい」

部屋に戻ってくると同時に尋ねた彼女の問いに、答えると、腰をかける。

「あの、やっぱり、ご挨拶はした方がいいですよね？」

「…は？」

「お邪魔しているわけですし」

「……ああ、そう言う事」

唐突に彼女が言った言葉の真意が理解できずに、一瞬きよんとしってしまったが、付け加えてくれた言葉で分かった。

彼女の気持ちは良く分かる。

僕も、初めて彼女の家に上がったときは、ちゃんと彼女のご両親に挨拶をした。

家に上げてもらい、いろいろとお世話してもらったのだから、当然の事だ。

彼女もそれと同じような気持ちなのだろう。

「うん、んじゃ、下に降りようか」

ただ、それなら、ちょうどいい。

もうそろそろお昼だ。

そのついでに、彼女の分の昼食を頼もう。

まさしく、渡りに舟、とはこの事だ。

テーブルの上に置いてあるカップとソーサーをトレイの上に載せると、立ち上がる。

目の前にいる彼女も、それに合わせて、立ち上がったので、部屋の外に出る。

……いや、出ようとした、そっちの方が正しいだろう。

ドアノブに手をかけ、ドアを開けたところで

「やつほー、おかえりー」

突貫して来た輩がいるのだ。

いきなりの攻撃に体勢を崩して、危うくトレイに載せているカップ類が落ちそうになったが、すんでのところで、体勢を整える。

「うんうん、ちゃんと約束通りいい子に、帰ってきたみたいね。そんな賢い由貴には、お姉さんからのキスをプレゼント」

けれど、すぐに姫がへばりついてきたので、またバランスを崩す。

慌てて、志穂の方へと向き直り、視線だけで助けを請うが

「え…あ…は？」

何が何やらさっぱり理解できずに、混乱してしまっているのだろう。言葉にならない声を漏らして、あたふたとしている。

どうやら、助けは期待できないらしい。

体勢を整える事は諦め、そのまま床に倒れこむ。

そのせいで、姫に押し倒されたような体勢になってしまっているが、ショックをうまく吸収する事ができたおかげで、何とかトレイの上の物を割るような事はせずにすんだ。

「はいはい、由貴は目を閉じるの。ほら、ぶちゅー、としてあげるから」

とはいえ、トレイの上の物の安全を確保する事は出来たが、自分の身の安全の確保は出来ていない。

マウントポジションを取った彼女は、しっかりと両手で、僕の頬をがっちり固定すると、唇を近づけてくる。

「ば、ばか、やめろ」

必死になってもがいて、姫の魔の手から逃げ出そうとするが、彼女は、器用にその衝撃を受け流す。

こんなときに、そんな無駄なスキルを発動しないで欲しい。

「大丈夫、恥ずかしいのは、最初だけだから。きつと、しばらくしたら由貴からもねだるようになるよ」

「なるか！」

「ホントに？」

「当たり前だ！」

「んじゃ、今ここで確かめてみよう？」

「いらんわ！」

何も出来ずにいるため、せめての抵抗に、そう叫ぶが、そんな叫びも虚しく、ともに動けない僕の唇に、彼女はじりじりと近づく。

口元はだらしく緩み、その目は恍惚と輝いている。

今まで、待ちに待った時が、今ここに叶おうとしているのだ。

そんな表情になってしまうのは良く分かる。

良く分かるが、もし唇を奪われれば、その瞬間に、僕の負けだ。

今まで必死になって守ってきた物が全くの無駄に終わってしまうのだ。

とはいえ、今更、必死に抵抗したところで、それが功を奏すとは思えない。

（神様、仏様、閻魔様、サタン様、どうぞお助けくださいませ）  
こうなれば、神頼みしかない。

自分の知っているあらゆる神に、祈りを捧げ、助けを請う。

サタン様は、神様どころか、悪の大王だけど、この際、そんな事は言っていられない。

溺れる者は、藁でも掴むのだ。

「ほらほら、据え膳食わぬは男の恥、て言うで……！」

果たして、本当にこのまま、唇を奪われてしまうのか、心の中でさめざめと泣きながら、悲嘆にくれていたのだが、いきなり、ガン、という鈍い音ともに、身体が軽くなった。

慌てて、目を開け、起き上がってみると、すぐ傍に、頭を抱えてうずくまっている姫の姿がある。

その目じりには軽く涙が浮かんでいる。

「とりあえず、大丈夫ですか？」

涙を流す霊なんているんだ。

そんな姫の姿を眺めて、そう思っていると、すぐ傍に、どうやらいつの間にかに、復活していた志穂の姿があった。

どうやら、その言葉からすると、助けてくれたのは、彼女のようだ。ほっと安堵の息を吐きつつ、感謝の意を込めて、お礼を言おうと、口を開きかけたところで、彼女の手を持っている物を見えた。

トレイだ。

さっき、押し倒された時に、転がしてしまった奴だろう。

先ほどした鈍い音は、もしかしないでも、これのせいなのだろうか？ たらり、と背中に嫌な汗をかく。

いくらプラスチック製のトレイとはいえ、それなりに硬いし、音からしても、きつと角で殴ったんだろうが、そうとう痛いはず。

それを何でもなさそうにやっているのだ、少々怖い。

けれど、まあ、助かったには違いはない。

背に腹は変えられまい。

感謝感謝だ。



第十六話 九月一日 姫 vs 志穂 熱き舌戦（前書き）

最近、いろいろあつて更新が出来てません。

すみません……

というか、こっちじゃなくて、そろそろもう一つの連載どうにかしないとなあ……

まあ、僕の計画性のなさは置いておいて、どうぞ楽しんでください。

第十六話 九月一日 姫 vs 志穂 熱き舌戦

「痛いじゃない、何するのよ」

殴られた姫はジト目で睨みつつ、そう言うが、

「変態は黙っていてください」

ガン、とまた再び鈍い音がする。

志穂はとりあえず取り合うつもりは毛頭ないみたいだ。

また、同じように角で殴ったのだろぅが、なかなかやる事が残酷だ。なんだか、女性の怖さの片鱗を見たような気がする。

と言うよりも、彼女もこんな事をする人だったんだ、その事実の方が、シヨックが大きい。

いつも、大和撫子のように、穏やかで優しい笑みを浮かべていた姿はそこにはない。

「変態とは、失礼ね。私たちは、相思相愛なの。恋人なの。キスをし合うような仲なの。つまり、あなたは、お邪魔虫。お分かり？」

そんな彼女に、噛み付く姫。

そんなものになった覚えなんてないので、文句を言いたいところなのだが

「あなたが、先輩の恋人？冗談は休みや休みにしてください。真面目な先輩が、あなたみたいな淫逸な人を恋人にするわけがありません」

僕が口を挟む間もなく、彼女が応戦している。

本来なら、この場面は、僕が口を出すはずだし、そもそも彼女には、口論する理由なんて、ないのに、どうしてそうなるのか、全く予想が付かない。

それに、淫逸、という言葉が彼女は知っていた事も驚きだ。

そういう方面には疎いとはかり思っていたから、そんな言葉が出てくるとは思わないし、第一、そんな言葉は使わない。

僕だって、一瞬、淫逸と聞いて、分からなかった。

「あら、由貴だつて、男の子なのよ。いつも一緒にいれば、そういう気持ちになつてもおかしくないわ」

「そんな事はありません。密室で二人きりになつても、何もしいような先輩なんですから」

「それは、あなたが魅力ないからじゃないの？ そんなちつさな胸じや、由貴だつてそんな気もおきないでしょうしね」

「私は大ききじゃなくて、形で勝負なんです！」

そして、さらに舌戦はヒートアップ。

とはいえ、どちらかと言うと、姫の方が優勢。

まあ、確かに、見た感じ、姫に比べると志穂の胸は、少々小さい。

だからと言って、別に志穂の胸が特別小さいわけではなく、姫が少々大きいだけで、気にする事ではない。

それに、別に僕は大きいのが好きなわけではない。

まあ、そりや、確かに大きい事に越した事はないのかもしれないけど、だからと言って、どうしても大きくないとダメ、というわけでもない。

と、僕は何を冷静に分析しているのだろう。

二人の女子の胸の大きさ談義を冷静にしている場合じゃないはずだ。一瞬、どこかに意識が行きかけたが、それを何とかたぐい寄せる。

ここは、がつん、と割って入って止めるべきだ。

よし、行け、由貴。

ここで男を見せないといつ男を見せるんだ。

「とりあえず、落ち着……」

「あら、私だつて、形は綺麗よ。スタイルを保つために、それなりにエクササイズはかかしてないんだから」

「だから、落ち……」

「それってつまり、エクササイズをしないと現状を保てないほど、老化してるって事でしょ」

なんていったところで、結局、僕の負け。

一生懸命になつて割って入ろうとはするが、全く効果はなく、完全

に無視、シャットアウトだ。

完全に二人だけの世界に入ってしまった、僕の存在は蚊帳の外になっている。

「……はあ」

思わずため息が出る。

なんで、こんな事になっているのか、いまだに分からない。

だいたい、なんでこんな喧嘩になるのだ。

これじゃ、まるで、一人の男を奪い合う女二人の争奪戦みたいじゃないか。

姫は、僕の事を食料としか思っていないはずだし、志穂だって、ただの先輩と後輩の関係なのだから、そんなものになるはずはない。姫の場合は、まだ、自分の食料が取られそうになっているから、それに対して怒っている、と言う可能性もあるのだが、それはそれで、なんとなく彼女の話している様子を見たら、素直に頷けそうにない。だからと言って、じゃあ、どんな理由なのかと聞かれると分からないが。

それに、志穂の事だって、確かに、仲はいいし、親しい友人と言っても間違いはないだろう。

けれど、あくまでも親しい友人で、それ以上の関係ではない。

例え、自分の友人がいかかわしさ満点の女性に誘惑されているのを見過ごせないから、という理由で、言い争っているとしても、少々行き過ぎの感も否めない。

こんな奪い合いのような喧嘩になるはずがないのだ。

それとも、本当に、僕の事を奪い合っているとも言っのだろうか、こんな容姿も並、勉強も並、運動神経も並な、この僕を。

「違うわよ。よりいっそう、由貴に愛してもらえるための身体を作っているだけの事。つまり、愛が為せる技よ」

「残念でしたね。私の友人からリークしてもらった先輩のフェチ情報では、スレンダーで華奢な人が好きなんです。あなたみたいに、無駄に肉付きのいい身体じゃ、先輩はなびきません」

なんとなくだが、そう思えるようになってきた気がする。

姫は姫で、僕への愛とか言ってるし、志穂は志穂で、僕のフェチ情報を取りくしてもらっている。

そんな言葉を聞いたら、もうそう思うしかないだろう。

とはいえ、今更つつこむのも、なんだと思うけど、そもそも、姫は、霊で死んでしまっている以上、体重は増えたり減ったりしないのだから、エクササイズなんかをやっても意味はない。

どんな事をしてスタイルなんてものは変わりはないのだ。

だというのに、それに触れない志穂。

もしかしないでも、目の前にいるのが霊だと気付いていないんじゃないのだろうか。

気付いていれば、霊相手にいちいち目くじら立てても仕方がないと割り切れるはずだし、我慢が出来なかったとしても、あっさりと調伏させてしまうはずだ。

それなのに、それをしないと言う事は、全く分かっていないと言う事だろう。

明らかに、目の前にいる姫は、それと分かる雰囲気をぶんぶん振りまいているのに、専門家の彼女がそれを見逃してどうするということだ。

それとも、それが分からないぐらいに、頭に血が昇ってしまったているのだろうか。

もし、そうなら、僕の中での鈴原志穂像を少し修正する必要があるだろう。

「ふん、例え、そうだとしても、あなたみたいに、経験のないねねの女じゃ、由貴は満足しないのよ。私みたいに、経験豊富な大人の女性じゃないとね」

「何が経験豊富な大人の女性ですか。単なる淫女なだけじゃないですか」

それにしても、よくよく続くものだと思う。

彼女達の言い合いを、聞いていると、そう思える。

とりあえず、僕が何を言っても無駄な事は分かったので、傍観者の立場を取る事にした。

観察しているだけでは、解決なんてしないだろうが、完全に無視されている以上、どう動いたところで、解決しそうにもないと思う。それに、姫の突撃の事ですっかり忘れていたが、志穂の昼食の事だつてあるのだ。

こんなところで、無駄にじたばたするよりも、さっさと下に降りて母に言いに行った方が建設的だろう。

「あー、たぶん、聞こえてないと思うけど、下に降りるから」

「淫女つて、失礼な人ね。言っておくけど、私は安売りなんてしないわ」

「じゃあ、どうして、嫌がる先輩を無理やり押し倒してたんですか」とはいえ、一応、何も言わずに降りた、とばれたら、二人の熱が今度僕にきそうなので、申し訳程度に言ってみたのだが、案の定無視された。

最初から分かっていたはずなんだけど、実際に無視されると、なんだか、そこはかとなく切なくなる。

ほとんど、負け犬気分で、とぼとぼと部屋から出る。

相変わらず背後では、女二人の戦いが繰り広げられている。

せめて、部屋に戻ってくるときまでには、終わっていて欲しい。

まあ、たぶん、期待するだけ無駄だろうとは思っけど。

## 第十七話 九月一日 ひとまずの決着、一時停戦とも言う

階段を降りて、キッチンにはいると、そこには、料理をしている母の姿がある。

どうやら、今日は焼きそばらしく、キャベツなどの野菜や肉が置いてあり、母は、やっぱり面倒臭そうに、キャベツを切っている。

一瞬、そのまま回れ右をして、キッチンから出たくなった。

この状況で、僕の姿を見つけた母はきつと、僕にパスをするはずだ。

「あ、ちようど、良かったわ。ちよつと今疲れてるから、後よろしく」

けれど、足を一步引き、そのまま回れ右をしようとしたところで、見つかってしまった。

その母は、僕の姿を見つけるや否や、着ていたエプロンを脱ぐと、それを僕に押し付けて、ささとリビングに行ってしまう。

本当に、わが道を付き進む人だ。

家事なんて知ったこっちゃない、と言わんばかりだ。

「あー、今、友達が来てるんだけど、その子も一緒に食べさせてもいいよね？」

「別にいいわよ。その代わり、由貴が全部作りなさいよ」

本当は、それでも主婦か、そう言っただけでやりたいところだが、言ったところで無駄なので諦める。

一度、そう言った時は、

『お弁当に、晩御飯、掃除洗濯。それだけやってもらってるんだから、十分でしょう』

なんて言い返されてしまった。

確かに、それだけやってもらっているのだから、十分と言えば十分なのかも知れない。

それ以上を期待するのは、もしかするとたんなるわがままなのかもしれない。

だけど、それをさも当然そうに、しかも、自慢げに言うのは、少しおかしいんじゃないか、と思うのは、僕だけだろうか。

いや、できれば、僕だけであってほしくない。

蛇口を捻って水を出し、手を洗うと、包丁を握って、きりかけの野菜を切る。

ただ、出ているのは三人分なので、足りない志穂の分は、冷蔵庫から新しく出すと、それも合わせて、切り、ガスコンロのスイッチを入れ、フライパンを温める。

十分に温まったのを確認すると、キャベツ、ニンジン、タマネギ、豚肉の順に入れて、火をしっかりと通すと、最後に中華そばを入れ、塩コショウで、軽く下味をつけてから、しばらく熱したところで、最後に焼きそば用のソースをかけて、更に麺と具になじませながら、芳ばしい匂いがして来るまで、更に、熱する。

「ふーん、少しは手際が良くなってきたわね」

「母さんのおかげでね」

「しっかりと感謝しなさいよ」

いつの間にか、キッチンに戻ってきていた母が、後ろからフライパンを覗きこみながらそういつてきた母に、皮肉を言ってみたが、あっさりと返されてしまった。

まあ、亀の甲より年の功、ということわざがあるように、年輪を重ねた分だけ、母の方が口達者なのだろう。

「はい、完成。呼んでくるから、皿は自分で用意して」

最後に青海苔と鰹節を散らして出来上がり。

コンロの火を消すと、母にそう言つと、キッチンを出て、二階に上る。

その際、また面倒臭そうに文句を言う母の声がしたけれど、それは無視する。

いちいち、相手にしていたら、せつかく出来上がった焼きそばが、冷めてしまう。

階段を上りきり、部屋の前に立つ。



相変わらず、ドアの向こうでは口論は続いているみたいで、部屋から声が漏れ出ている。

いったい、どうしたら、そこまで口論を続けられるのか、本当に不思議だが、聞いたところで答えは帰ってこないだろう。

内心でため息を付きながら、ドアを開けると中に入る。

途端に、先ほどまでドア越しで聞こえていた声が、直接耳に届く。

その大きさと言ったら、思わず、顔をしかめてしまうほどだ。

さっさと逃げ出しておいて正解だったようだ。

「あー、えっと、志穂、昼飯食っていかないか？」

こんな大声での口論の最中に、そんな事を言ったところで、聞いてもらえないと分かりつつも、一応形式的に、言うが

「いつその事、誰かに揉んでもらったらどうなの？そしたら、そのちっさな胸も大きくなるんじゃないかしら」

「そんな迷信、今時、誰も信じてませんよ！」

やはり、聞いてもらえない。

本日二回目の事とは言え、やはり少々こたえるものがある。

とはいえ、だからと言って、今度も諦めるわけにもいかない。

せつかく準備をしたんだから、食べてもらいたいというのが、作った人間としての気持ちだ。

それに、姫は良いとしても、志穂は、生きてる人間だ。

何も食べないというわけにはいかないだろう。

健康的な生活を送って入る彼女だから、朝はしっかりと食べてきたんだろうとは思っけれど、それでも、昼は昼でしっかりと食べないと身体に悪いし、今食べておかないと、変な時間にお腹がすくかもしれない。

こうなれば、強硬手段しかないだろう。

とりあえず、姫の事は放っておくとして、志穂のそばまで歩み寄ると

「ああ、それとも、あなたのその無駄に大きい胸は、そうやって揉まもが……！」

彼女の口を塞ぐ。

こうしておけば、志穂の方は、口を出すことは出来ない。

「由貴、これは女と女のプライドを賭けた戦いなの、邪魔しないで」  
「とりあえず、ご飯食べてくるから、姫はそこで待っている事」

姫の方は、突然の介入で、ちよつと怒っているみたいだが、適当に流す。

真正面から相手していると、いつまでたっても、前に進まない。

そのまま、志穂を引きずるようにして、部屋を出る。

相変わらず、彼女はもがもがと口をさせながら、じたばたと暴れている。

このまま、解放するのは少々怖いが、このまま口を塞いでいるうちに、窒息されてはたまらないので、

「はい、もう暴れないですよ」

そう言うてから、そこで彼女を解放する。

先ほどの彼女の行動を考えたら、それを素直に聞いてくれるとは、ちよつと思えなかったのだが、ようやく頭が冷えたのか、冷静さを取り戻した彼女は、恥ずかしそうに、こくん、と頷いた。

まあ、彼女にしてみれば、先ほどの姿は穴があつたら入りたいほど恥ずかしい事だろう。

普段の彼女では、考えられない姿だったわけだし。

その逆に、相手の姫はいつもどおりの姿だろう。

あの人を小馬鹿にしたような態度は、いつでもそうだ。

もしかすると、単に、姫は志穂をからかっていただけなのかもしれない。

彼女は、変に大人気ないところがあるから、その可能性は十分に……

「逃げたわね！」  
ないか。

やはり、からかっていたわけではなく、本当の喧嘩だったのだろう。  
大人気ない、大人気ない、とは思っていたが、まさかここまで大人気ないとは思わなかった。

かなりの年を食っているはずなのだから、もう少し落ち着いて欲し

い。

「これから、お昼なんだけど、志穂も食べるよね？」

とりあえず、姫の事はいいとして、さつさと腹ごなしをしたい。

昼食を自分で作っていたせいか、すっかりお腹がすいてしまった。

「え？ いや、それは悪いですよ」

「というか、食べてもらわないと困るんだけどね。もう作っちゃったわけだし」

とんとん、と小気味良く、階段を降りる。

彼女はいきなりの誘いにちよつと驚き、申し訳なさそうにするが、今言っている通り、食べてもらわないと困る。

彼女が食べなければ、誰も食べる人がおらず、余ってしまうのだ。

「とりあえず、由貴特製焼きそばなんだけど、食べ……」

「いただきます」

なので、できれば食べてもらいたいので、どうにか説得しようと試みたのだが、あっさりと僕の言葉をさえぎって、頷いてくれた。

先ほどまで、申し訳なさそうにしていた彼女の顔が、今は、どこか嬉しそうに笑みを浮かべている。

いったい、何がそんなに嬉しいのか、全く分からない。

昼食が浮いたのが嬉しいのか、はたまた、焼きそばが好物なのか、どちらにしろ、僕にはさっぱりだ。

「うん、ありがと」

でも、とりあえず、食べてくれるに越した事はない。

## 第十八話 九月一日 悪戯な家族と

二人揃って、階段を降りると、そのままダイニングに入る。そこには、母といつの間にかに帰ってきた美樹の姿がある。

ただ、帰ってきたばかりのせいのため、着替えておらず、少々汚れた体操服姿だ。

とりあえず、恥ずかしいから、できれば着替えて欲しい。

その二人は、僕、と言うよりも、志穂が入ってくると同時に、きよんとした顔をしている。

もしかすると、僕が連れてきた友人が女の子だったから、驚いているのかもしれない。

今まで、女の子の知り合いを家に連れてきた事はないし、連れてくるような友人がいるとも話してはいない。

「えっと、友達の志穂。うちの高校の後輩なんだ」

「鈴原志穂、といいます。よろしく願います」

ちよっとしたショックから相変わらず抜けきれない二人のために、僕から、行動を起こす。

僕の知っている志穂は元来奥ゆかしくて、自分から前に出るようなタイプじゃないため、僕が何か言わないと、挨拶はできないだろうし、目の前にいる二人は、問題外だ。

「由貴の母です」

「妹の美樹です」

そのおかげか、何とか凍っていた頭を解凍した二人は、なんとかそれに答える。

ただ、相変わらず、ショックはぬぐえていない。

一度フリーズした頭は、そう簡単には戻らないのだろう。

「とりあえず、志穂は席に座ってて」

とりあえず、志穂に席を進めると、僕達の皿を取りに行く。

既に、母と美樹の二人の前には自分の焼きそばの入った食器とかが

おかれているが、僕達の席の前には何も無い。

どうやら自分で用意しろ、との事らしい。

やはり、どこまでも面倒臭がりといったところだろう。

そのまま、キッチンに向かう。

「あ、私も手伝いますよ」

「ううん、構わないから、座ってて」

その際、彼女が、手伝いを願い出てくれたが、彼女はお客様。手伝わせるわけにはいかない。

彼女の申し出を断ると、どうやらちゃんと僕の言う事を聞いてくれたらしく、更に焼き傍が持つてある。

それを、お箸、それから、麦茶の入ったコップと一緒に、トレイに載せると、ダイニングに戻る。

そう言えば、お茶をするときのために、使ったトレイやカップ類を部屋に置きっぱなしにしていた。

後で、戻しにおかないと、母からのお小言がまた飛ぶだろう。

自分の時は面倒くさいと言って、適当にやるくせに、僕がそうしようとする、すぐに文句を言うのだから、困ったものだ。

「はい、由貴特製ソース焼きそばです」

そんな事を、考えながら、持つてきた食器を並べる。

母、美樹が隣り合って座っている、四人がけのテーブルは必然的に、僕と志穂が隣り合わせになる。

「ありがとうございます」

「まあ、あんまり得意じゃないから、味は期待しないで」

それを受け取った彼女は、しげしげと眺めており、その表情はあいかわらず嬉しそうに緩んでいる。

嫌そうな顔をされるよりも嬉しそうにしてくれる方がいいのだけれども、そんなに嬉しそうにされると少々照れる。

彼女の隣のいすに腰をかけながら、そんな事を言ったのも、単なる照れ隠しだ。

「なんだか、初々しいわね」

「新妻に初めて料理を作って上げた夫、みたいだよね」

目の前にいる二人は、僕達のやりとりを見て、小声でそういつている。

二人とも聞こえていないかと思っているみたいだが、すぐそばにいるんだから、聞きたくなくても、聞こえてしまう。

ただ、隣にいる志穂は、いまだに僕が作った焼きそばを嬉しそうに凝視しているため、聞こえていなかったみたいだが。

どうやら、一つの事に集中すると周りが見えなくなってしまうタイプらしい。

また一つ、新しい彼女の一面を見れたような気がする。

「んじゃ、食べようか？」

「あ、はい」

とはいえ、いつまでも、そんな観察されても、焼きそばはなくならない。

ただでさえ、二階でのやりとりで遅くなったせいで、少し冷え始めているのだ、これ以上冷めさせたくはない。

彼女にそう声をかけ

『いただきます』

一緒に手を合わせると、そう言っただけで食べ始める。

味の方は意外といい。

あまり作りなれてないせいで、そんなに上手とは言えないが、食べられないものではない。

素人の焼きそばにしては上出来だろう。

「そばがばさばさ。野菜の切り方がばらばら。味にむらがある。全然ダメね」

ただ、目の前にいる母にしてみれば、及第点ももらえないみたいだが。

まあ、長年主婦をやってきて、ほとんど極めたと言っても良いぐらい料理のうまい母なのだから、そういわれるのは仕方ないのだが、それでも少しぐらいは褒めてくれても良いと思う。

世の中には、まともに料理の出来ない人がわんさかいるのだ、包丁を扱えるだけでも、ましだ。

「そうですか？私は十分美味しいと思いますけど」

「あら、鈴原さんは優しいのね。こんなものに及第点をあげるなんて。だけど、そんな甘い事を言っちゃダメよ。この程度で、満足しているようじゃ、志亜家の台所を取り仕切るなんて、夢のまた夢なんだから。だから、ここは厳しくいかないと」

「うんうん、そうですよ。お兄ちゃんはお褒めとすぐに付け上がって天狗になるから、とことん貶してやるぐらいがちょうど良いんですよ」

「…はあ」

一生懸命フオローをしようとしてくれた志穂だけど、逆にあっさり返されてしまう。

確かに、味はまだまだだし、母の言うとおり、満足できるようなレベルではない。

ただ、せっかくの彼女の好意をそこまで否定しなくても良いとは思う。

「ありがとう。志穂だけでもそう言ってくれると嬉しいよ」

「良かったわね。採点の甘い彼女で」

だから、今度は僕がフオローをしようとしたのだけれども、今度は僕に向かって問題発言。

明らかに、今、母が言った『彼女』のニュアンスは、恋人としての『彼女』だ。

母の表情を見ると、にやり、としたり顔をしているところから、良く分かる。

母の隣にいる美樹もにやにやとしている。

僕達の関係を分かっていて、そんな事を言っているんだろう。

「やっぱり誰かに褒めてもらえないようじゃ、作り甲斐がないからね」

けれど、僕はそれを無視して、続けた。

もちろん、僕と志穂は恋人同士ではなく、ただの先輩後輩で、色恋沙汰なん全く縁のない関係。

だから、本来なら、そこで否定しないといけなところなんだけど、おそらく、そこで、反論したところで、こっちが痛手を負うのは分かりきっている。

隣には、頬を朱に染めて、おろおろと動揺している彼女の姿があった。

いい加減、鈍く、自信過剰とは程遠く、むしろ、それとは逆方向に付き進んで行く僕でも、分かてしまつような反応をしているのだ、母と美樹でもすぐ気が付くだろう。

そんな状況で下手に反論すれば、志穂と気まずい雰囲気になるかもしれない。

そう言うときは相手にしないのが一番だ。

僕はそう言つと、さつさと、皿の中身を片付ける。

逃げるが勝ちだ。

まあ、彼女を一人にしてしまうのは、心苦しいものがあるが、さすがに二人も志穂に照準を合わせるような事はないだろう。

元々、二人があんな事を言つたのも、遠まわしに僕をからかつての事。

僕がいなければ、普通に会話となるだろう。

さすがに、少しぐらいはからかわれてしまつかもしれないが、それでも、さっきのような人の悪いネタでからかったりはしないはずだ。

「ごちそうさま」

あつさりと完食し終えると、そう言つて、片付けの準備をする。

「あー、逃げるつもりね」

「ばか、片付けるだけだよ」

その姿を見て、美樹が即座に僕の行動を見抜いたが、用意していた言葉を言つと、キッチンに戻る。

「ごちそうさま」

どうやら、考える事は同じのようで、僕に引き続き、志穂もさつさ



と食べ終わると、キッチンに逃げてくる。

お茶をしていたときもそうだが、もしかすると、彼女は食べるのが早いかもしれない。

男である僕に比べて女である彼女の方が量が少ないのは、当然だけど、それでも、同じ量の美樹や母の皿の上には、まだ半分前後は残っている。

僕達の事をからかう事に集中していたとは言え、それでも、十分に早いと思える。

## 第十九話 九月一日 結局の決着の終着

「ごめんね、痛い家族で」

キッチンに逃げてきた彼女から、皿とコップを受け取ると、そう謝っておく。

気分を害している様子はないが、それでもパニックしていたのは確かだ。

謝っておくべきだろう。

「……楽しい家族ですね」

「無理して褒めなくていいから」

謝罪の言葉を受けた彼女は、やや頬を引きつらせながら、精一杯誤魔化す。

さすがに、堂々と、問題あり、とは言えないみたいだ。

今二解にいる姫ならば、確実に、堂々と文句は言うだろうが。

それ以前に、堂々と、恋人宣言するだろうが。

そこのところが、姫と志穂の違いだろう。

そして、慌てふためき、困ってしまうのは僕一人だろう。

それを考えると、姫じゃなくて、志穂で良かったのだろうが、それでも、やっぱり、これからの事を考えると、少々辛い。

絶対、事あるごとに、からかってくるだろう。

これからの暗い未来の展望に、内心でため息を付きつつ、洗い物を始める。

いつまでも、何もしなかったら、またダイニングにいる二人に、口を挟まれかねない。

今も、ちらりと見たが、にたにたと笑いながら、僕達の事を見ている。

「洗い物は、僕がやるから、志穂は戻っていて良いよ」

とりあえず、このままだとしても、二人にはからかわれるだけなので、さっさと進めてしまおう。

志穂に関しては、悪いが、向こうに戻ってもらうしかない。

これぐらいなら一人で十分に出来るので、彼女の手は必要ない。

「いえ、さすがにそういうわけにはいきません。せめて、手伝わせてください」

とはいえ、彼女も頷こうとはしない。

言葉振りでは殊勝な事を言っているが、とりあえず、向こうには行きたくないのだろう。

まあ、誰だってからかわれると分かっている、わざわざ自分から好んで行くような酔狂な輩はいないだろう。

特に、先ほど、また恥をさらしてしまったのだから、これ以上は、恥をさらしたくはないのだろう。

「んじゃ、とりあえず、志穂は、磨いた奴を水でゆすいどいて」  
スペースを開けると、彼女を招き入れる。

また、からかわれるかもしれないが、そうなる前に逃げてしまえば良いだけの事。

手早く食器を磨き、彼女に手渡す。

さすがは、女の子と言っべきか、受け取った彼女は、手際良く洗い流していく。

ゆすぐだけなので、そんなにスキルはいらないかもしれないが。

洗い物を終えた僕達は、さっさとその場から逃げ出した。

背後から、くすくす、と笑う声が聞こえたが、聞こえなかったふりをする。

そして、今は、玄関前。

どうやら、彼女はこれから用事があるらしく、これ以上はいられないらしい。

なんだか、何のために、彼女の事をこうして、ここに呼んだのか、良く分からなくなってしまった。

「今日はごちそうさまでした」

靴を履き終えた彼女は、ぺこりと頭を下げるとそう言う。

「いや、こっちこそ、なんだが、嫌な思いばかりさせてごめんね」とはいえ、頭を下げたいのはこっちの方だ。

本当に今日は彼女に悪い事をしてしまった。

ほんのちよつとの間に、かかせなくてもいい恥をかかせてしまったのだ。

平謝りしないといけないのは、たぶん、こっちだ。

「いいえ、そんな、謝らないで下さいよ。本当に楽しかったですから」

けれど、彼女はそれにくびを振ると

「来たかった先輩のお家には来れましたし、ご家族にもちゃんと挨拶が出来ました。それに何より先輩の手料理が食べられましたからね。幸せですよ」

顔をほころばせて、そう言う。

その表情からして、その言葉には嘘はないのだろう。本当にいい子だ。

こんな子に、慕われている僕は本当に幸せ物だろう。

「それに、むしろ、謝らないといけないのは、私の方ですよ」

「そんな事はないだろう?」

「いいえ。姫さんの事どうにもできませんでしたし」

「……え」

けれど、緩んでいたのもそれまで、彼女は表情を硬くした。

気付いていないものだ、ずっと思っていたが、それは僕の勘違いだったようだ。

「あれだけ強い力を持った霊は始めて見ました。しかも、実体化しているなんて……正直言つて、私にはどうにもできません。父ならあるいはもしかすると、どうにかできるかもしれませんが、どちらにしろ、今の私には手も足も出ないと思います」

けれど、それ以上に驚いたのは、志穂ですら姫を調伏できないと言

う事。

今まで、彼女は、僕にとっては、雲の上の存在の人だった。僕がどうやっても引き剥がす事の出来なかった霊を、あっさりと被ってくれた彼女。

別に、全知全能とかそういうふうに、思っているわけではないが、それでも、そんなあっさりと降伏するような事があるとは思えなかった。

しかも、その相手が、あの姫だとは。

「本当にすみません。せつかく私の事を頼りにしてくれたのに、お役にたてなくて」

「いや、別にいいよ。確かに、迫られて困ってはいるけど、殺されそうなのでもないし。気にしなくても良いよ」

「でも……！」

「それに、勝手を言っているのは、こっちの方だからね。志穂が気にする事じゃないよ」

それが、シヨックだったのは確かだ。

でも、だからと言って、やっぱり志穂が悪いわけじゃない。

彼女のせいで、姫がとり憑いたわけじゃない。

全部、僕がうかつだったせいなんだ。

姫に会った時に、結界をはらなかつたのも僕が悪ければ、眼が会った時に、さっさと逃げなかつたのも、キスを避けられなかつたのも、全部僕が悪いのだ。

彼女が気にする事ではない。

「……ありがとうございます」

けれど、それで納得するような彼女ではない。

それでも、優しい彼女は、僕の顔を立てるために、それに頷くと、

「それじゃ、私はこれで失礼しますね」

そう言つて、玄関を出て行った。

彼女の性格を分かつた上で、言つた事なのだが、心苦しい。

もしかすると、この事は、彼女には言わなかつたほうが良かったの

かもしれない。

迷惑がかかるのはかかるけれど、別に、実害があるわけでもないし、放っておいたら、いつの間にか、いなくなる可能性だってあるのだ。それなら、志穂に頼る必要なんてない。

自分一人ですぐにかする事はできたはずなんだ。

「……はあ」

とはいえ、今更そんな事を考えたところで、後の祭り。どうしようもないだろう。

盛大なため息を吐くと、僕は、自分の部屋に戻った。

**第十九話 九月一日 結局の決着の終着（後書き）**

これで第二章で終了です。

次が最終章になります。

ここまで静かですが、この後どうなるか。

まあ、作者のみぞ知る、と言う事でww

第二十話 九月二日 男の嫉妬はそれはそれで怖いのか？

今日一日の荒行を終えると、おもむろに立ち上がる。

今の僕は一人。

傍には、姫の姿はない。

今日もお留守番だ。

もちろん、帰ったら、精一杯御奉仕するように仰せつかってしまつた。

しかも、どうやら、昨日の事をずいぶん根に持っているらしく、しばらくは、名前どおりにお姫様扱いしなくてはならない。

せめてもの救いはキスを強要して来ない事ぐらいだろうか。

とはいえ、それでも、衣服を剥ぎ取られ、もう少しのところで、操を奪われてしまうところだったけれども。

あの時は本当にあせった。

志穂にさよならを言った後、部屋に戻った僕の背後から襲って来たのだ。

そして、押し倒されたと思ったら、次の瞬間には、あつという間に上半身裸にされてしまった。

必死になって抵抗して、マウントポジションと言う圧倒的不利な体勢から、彼女にアイアンクローを食らわせて、なんとか逃げ出したのだ。

僕としても、女の人に暴力を振るうのは、あまり好きじゃないのだが、背に腹は変えられなかった。

やはり、操を奪われるのだけでもどうしても、勘弁して欲しかった。  
『はあ』

昨日のハプニングを思いだし、たまらずため息を付いたのだが、それが隣にいる誰かさんと重なった。  
誠次だ。

今にも死にそうなほど、真っ青な顔をしている。



「ああ、しよっぱなから崖つぶちだよ」

一瞬どうしたものかと思ったが、すぐに答えは出た。  
どうやら、全滅らしい。

新学期二日目。

今日は、恒例の期首テストがあった。

とりあえず、夏休みの間の勉強の成果をはかるためのものみたいだが、僕達生徒にしてみれば、嫌がらせとしか思えない。

ただでさえ、宿題だけで、息切れを起こしそうなのに、その上、期首テストの勉強までするととなると、遊ぶ暇なんてなくなってしまふ。だから、たいてい、よっぱど真面目な生徒じゃない限り、期首テストなんかの勉強なんてしない。

その結果、誠次のようになってしまうのだ。

まあ、誠次の場合、宿題すらやっていないから、そうなって当然なんだろうけど。

「自業自得だ、諦めろ」

真っ白になりかけている誠次の肩をぽんと叩き、そう言う。

結局、ちゃんと勉強しなかったのが悪いだけだ。

宿題しかやっていない僕でさえなんとか、半分は出来たのだ。

それすらサボった誠次がそうになってしまうのは、当然の事だろう。同情してやる余地もない。

ただ、一人虚空を見つめながら、ぶつぶつと言っているその姿は、背筋が冷えるほど気持ち悪い。

「んじゃ、先帰るな」

それに、まともに反応を返してくれるようすもないので、誠次の事は放って廊下に出る。

テストも終わったばかりのそこは、下校途中か、はたまた部活に行く途中の生徒であふれかえっている。

そんな中に見知った顔を見つけた。

たくさんの人の中、遠目からでも分かる整った顔。

そして、それ以上に独特の凜と澄んだ雰囲気。

志穂だ。

けれど、何故彼女がここににいるのかが、分からない。

本来、僕の一つ下の彼女は、僕達の学年とは校舎は同じでも、階は違う。

そのため、用事がないと、こんなところに来る事はない。

「あ、先輩」

それを疑問に思いながら、歩み寄ると、彼女もそれに気付いたらしく、走って近づいてくる。

「何してるんだ？」

彼女が僕の傍まで歩み寄って来たところで、そう尋ねる。

いつの間にか、野次馬が集まり、周りからは好奇の視線が集まって来ている。

その中には、さっきまで死んでいたはずの誠次の姿もあるが、この際、それは無視する。

「昨日の事で、ちょっと先輩にお話があるんです」

「昨日の？ああ、あれね。分かった。」

どうやら、用事は僕らしく、その内容は、昨日の事。

間違いなく、姫関連の事だろう。

けれど、さすがに、それをここで話すのも憚れる。

こんなたくさんの人間が聞き耳を立てているような場所でする内容ではない。

「でも、ここで話すのは、なんだし、場所を変えようか？」

「あ、いえ、そんな事は気にしないで下さい。ただ、うちに来て、父に会ってもらいたいだけですから。」

そう思って、場所移動を提案してみたのだが、彼女はあっさりと言ってしまった。

けれど、それは僕が危惧したようなものではなかった。

父に会ってもらいたい。

それだけでは、確かに、姫の事を感じられる事はない。

彼女も、それなりに考えて、そう言ったのだらう。

しかし、もう少し考えて欲しい。

周りの野次馬は騒ぎ始めている。

耳を済ませて見れば

「親に紹介？」

「もしかして、婚約？」

「まじかよ、俺、彼女の事、狙ってたのに」

「くそ、白雪なんて言う男とも女とも付かない奴の分際で、生意気な」

「人目のないところで、こっそりやっちまうか？」

恐ろしい会話が繰り広げられている。

特に最後の言葉は聞き逃せない。

ここしばらく、人目のない場所は通らないように気をつけなくてはいけないだろう。

でなければ、確実に、僕は次の日のお天道様を見る事が出来ないと思う。

女の嫉妬は、陰湿で怖いと言うが、やはり、男の嫉妬は、それはそれで怖い。

直球勝負過ぎるために、分かりやすい実害が出やすいのだ。

「うん、そっか。了解、さっさと行こうか」

分けが分からず、きょんとしている彼女の手を握ると、その場から離れる。

途端に、僕に対する非難や暴言が聞こえるが、やはりここも無視。

いちいち、相手にしていたら身が持たない。

とりあえず、後が怖いけれど、今は逃げるしかないだろう。

それに、落ち着いた頃合に、弁明できるようならば、弁明すればいいわけだし。

まあ、まともに相手にしてくれなさそうだが。

「せ、先輩。こんな人前で手を握るなんて、ちょっと、大胆すぎます」

それ以上に、志穂が勘違いしているのが、怖いが。

もしこれが、姫にばれたらと思うと……

怖すぎて、想像すら出来ない。

ただ、とりあえず、言える事は、きっと、なんらかの強硬手段で、操を狙われる事になってしまっだろう。

そんな冗談のような笑いを笑い飛ばす事も出来ず、ため息を付きながら、彼女の家に向かった。

## 第二十一話

二十分ほどかけて歩いた後に、彼女の家に付いた。

もちろん、既に、手は離れている。

つなぐ必要がないのだから、当然だ。

これ以上、スキャンダルを振りまきたくはない。

まあ、あの場で手を握ってしまった時点で、ほとんど手遅れのような気がするが、気持ちの問題だ。

さて、それは、置いておくとして、目の前にある彼女の家を見る。

そこには、いかにもその土地の名家と言わんばかりの立派な屋敷が建っており、何度もここには来ているが、どうしても、この圧倒的な威圧感にはなれない。

たぶん、僕が妬ましく思われるのには、これも含まれると思う。

可愛くて、性格も良く、勉強も出来て、しかも、家はお金持ち。

こんな絵に描いたようなお嬢様を奪ったのだ、そう思ってしまったのも仕方ないのかもしれない。

もちろん、志穂の気持ちはどうであれ、真実は全く異なっているのだ、そんなふうになたまれても、僕としては、迷惑以外なんでもないのだけれども。

それに、確かに、家は大きいけれど、彼女の家がお金持ちと言うわけでもない。

家は、先祖伝来の物を、何度も修繕して使って入るらしいし、それに何より、彼女の家の仕事上、表切って言えるものでもなく、仕事自体も少なく、しかも、報酬は、リスクに比べると、少々安く、意外と儲けは少ないらしい。

「あの、どうかしましたか？」

と、どうやら、ぼんやりとしすぎたようで、彼女が不思議そうに僕の事を見る。

「いや、なんでもないよ」

「そうですか？なら、父が待っています。どうぞ  
それを笑って誤魔化す。」

彼女の方は、あまり納得していないようだが、深く突っ込む事はせず、僕の事を家に招き入れる。

どうやら、彼女のお父さんに会わせる事の方が、先決のようだ。と言う事は、もしかすると、割と重要な話なのかもしれない。

まあ、志穂ですら、手も足も出ない霊である姫と一緒にいるのだ、確かにそれは大問題なのかもしれない。

ただ、中身の方は本当にお粗末で、たいそれたことはしそうにもないけれど。

そんなたわいのない事を思いつつ、彼女に従って中に入る。相変わらず、木と畳の良い匂いのする家だ。

一般的家庭のうちでは縁のない匂いだが、不思議と懐かしくて、心地いい。

先祖代々受け継がれて来た、僕の日本人としての性が、知らず知らずのうちに、それを求めていたのかもしれない。

板張りの廊下は、古いはずなのに、きしむようすはない。

元々の材質が丈夫なのか、それとも、上手に使っているのか、いや、両方なのかもしれない。

元々、古来からある伝統の日本建築は、木しか使わないのに非常に丈夫で、長持ちする。

確かに、火に弱く、火事になりやすいと言う弱点はあるが、火元さえ気を付けて、上手に使ってやれば、存分に長持ちする。

「お父さん、先輩に来ていただきました。入りますよ」

「ああ。どうぞ」

鳥と目のない事を考えながら、彼女に従って付いているうちに、付いてしまったらしい。

「失礼します」

二人そろってそう言うと、中に入る。

屋敷の外見に似合わずそこまで広くない和室には、そんなに物はな

い。

せいぜい、少々日焼けしてしまっている本や掛け軸が、ある程度。そんな中に、彼女のお父さんはいた。

純日本人の顔をしたその人は、がっしりとしながらも、無駄な肉を持たない均整の取れた身体をしており、同じ年頃のはずの僕の父とは似ても似つかない。

「おひさしぶりです」

僕は、頭を深々と下げると挨拶をする。

少々やりすぎの感が自分でもするのだが、どうしても、彼を目の前にするとそうしてしまう。

この家に来るたびに、何度も会っているのだけれども、どうしても、彼の独特の雰囲気の前になると、落ち着かず、萎縮してしまう。

だからと言って、彼から威圧されているわけでもない。

見た目は、渋い大人の男性と言った感じなんだけど、中身はいたって気さくな人で、志穂の父親だという事が頷ける、穏やかな表情をしている。僕の事だって、かのじよにさんざんめいわくをかけたたり、厄介事を押し付けてしまっているのだから、疎ましく思っても当然なのだろうに、娘に近づく悪い虫のような扱い方もせず、優しく接してくれる。

たぶん、こういう人の事を、男が憧れる男、と言ったと思う。

ただ、そんなパーフェクトな人だからこそ、どこか、何か全てを見透かされているような気分がしてしまう。

特に、穏やかな表情を浮かべる顔に埋め込まれた瞳に見つめられてしまうと、何とも形容し難い不思議な感覚に陥ってしまう。

「ひさしぶりだね。最後に会ったのは、七月の初旬だったかな？」

「はい」

「確か、あの時に憑いてたのは、綺麗に顔が剥げてた女性の霊だったかな？」

「……ええ、そうですね」

「いや、失礼した。君にとってはあまりいい思い出ではないのだから」

ら、言うべきではなかったな」

少々顔を引きつらせた僕を見ると、彼はそう言って苦笑する。

確かに、彼の言う通り、あまり良い思い出とは言えそうにない。

本来、霊は生前の姿を色濃く残し、傷などのない綺麗な姿をしている。

僕が見て来た霊だつて、普通の人とはほとんど変わりない、それこそ普通に生きている人間と見間違ってしまうような姿をしていた。

けれど、あの時に憑かれてしまった霊に関しては、例外だったらしく、死んだ直後の綺麗に顔が剥げていた姿をしていたのだ。

志穂や志穂のお父さんのように、そういう事を生業にして、経験を重ねている人達にして見れば、慣れているようなことかもしれないのだが、僕のような、そう言った経験のない人間にしてみれば、恐怖意外なんでもなかった。

初めて見た時は、本当に失神しそうになったし、少々トラウマになっている。

「あの、それで、お話つて、なんでしょう？ 姫の事だと聞いたんですが」

彼の言葉のせいか、今またちらほらと頭に、その時の気持ちの悪い姿が浮かんで来たので、それを払拭するように、先に進める。

「ああ、そうだったね。うん、その事は昨日、娘から聞いている」けれど、その途端に、彼の表情が変わる。

先ほどまで、穏やかな表情は一変、非常に真剣で、穏やかとは対極に位置する緊張に満ちた表情をしている。

今まで何度もこの家に来て、憑かれていた霊を見てもらったが、こんな表情を見た事は一度もない。

「ひめ、さん、だったよね、確か」

「はい」

「実体化できる霊。しかも、志穂が手も足も出ない程力を持っている。正直、初めて聞いた時は、自分の娘の言っている事ながら、全く信じられなかったよ」



彼の言葉は少なからず、ショックだった。

何も知らない一般人である僕は当然として、専門家ながらも、まだまだ若い志穂が知らない事があったとしても、まさか彼ですら、および付かないものだとは思わなかった。

「君が知っている通り、霊はあくまでも、精神エネルギー、思念、想いと言ってもいいだろう、その塊に過ぎない。よって、普通に考えると人に直接物理的に干渉する事はできない。干渉できるような存在ではないからだ。それでも、霊障が起きてしまうのは、その霊が間接的に干渉を起こすから、人やその他の物が持つ精神エネルギーに干渉して、間接的にその存在に心理的作用を引き起こすからだ。精神エネルギーになれば、同じ精神エネルギーである彼らも、干渉する事は可能だからね」

初めて、彼に出会ったとき。

その時も、彼はそう言っていた。

霊は直接触れる事は出来ない。

ただ、同じ精神エネルギーであるものになら、干渉する事も出来る。人の場合は魂だ。

現在、魂なんてあやふやで曖昧なもののため、科学では認知されていない概念なのだが、それでも、それがあると仮定をすれば、彼の言っている事は、すんなりと筋が通る。

「けれど、君に今憑いているその霊。それは、異質だ。正直言つて、今まで見た事などないし、それどころか前例なんて聞いた事はない。全くの未知のものだ」

そして、だからこそ、姫はおかしいのだ。

姫は霊だ。

それは何があっても変わらない。

彼女からも霊特有の気配は感じられた。

それは、今まで感じてきた物と寸分の狂いもない全く同じ物だった。だから、彼女が霊ではないなんて事はない。

第一、もし僕が分からなかったとしても、志穂がいる。

まだまだ未熟な僕なら勘違いするかもしれないが、志穂は間違える事はないはずだ。

今までやってきた経験があるのだから。

「正直言つて、私は、その存在は危険だと思う。実体化している以上、霊にある直接物理的に干渉ができないと言う制限はなく、なんのしがらみもなく力を使える。しかも、一般の人には、実体化を解けば、見えなくなってしまうのだから、対応のしようもない。下手をすると、大惨事が起る可能性だってある」

彼の言う事。

それは、僕も何度と考えた事。

僕には、霊にどんな力があるのかは、知らない。せいぜい、知っている事と言えば、呪いをかけたり、身体をのつとったりする事ぐらいで、それ以外の事は何も知らない。

けれど、それだけでも、十分危険なのに違いないのも確か。

一人の命を軽く奪ってしまうのだ、危険でないはずがない。

そして、その上に、姫は実体化して、直接人に手を出す事が出来る。普通の霊以上の事が出来てしまうのだ。

「だから、私は……」

そこで、彼は一旦切った。

もしかすると、逡巡しているのかもしれない。

はたまた、それ以外の思惑があるのかもしれない。

が、どちらにしろ、僕には分からないし、それに何より言う事は分かっている。

「抜つてしまふべきだと思う」

それしかないだろう。

「例え、今実害がないとしても、未来、何もないとも限らないし、起こってからでは遅い。対策は事前に行うべきだと思う」

僕とは違って、彼には甘さはない。

必要ならば、あっさりと切る。

もしかすると、僕が彼の前に出ると、緊張してしまうのは、そのせ

いなのかもしれない。

自分もいつか切られるのではないのか、と。

「ただ、だからと言って、あっさり被ってしまうのも考え物だ」

「え？」

けれど、そんな考えも、彼の言葉を聞いて、掻き消える。

思わぬ言葉に頭が混乱する。

「と言うよりも、被えるかどうかが怪しいと言ったところだろう。」

彼女は未知の存在だ。彼女の事を何も知らない以上、どう対応すればいいのかなど、分からない。それゆえに、私で彼女を相手に出来るかどうかは分からない。もしかすると、私も、娘同様、彼女に手も足も出ないかもしれない」

しかし、そんな僕を置き去りにするかのように彼は続ける。

ただ、納得はできる。

不確定要素の強い相手と戦うのは、かなり危険が伴う。

ある程度の情報がなければ、下手をすれば、こちらが痛手を被る可能性がある。

「それに……」

彼は更に続ける。

ただ、その声はどこか少し逡巡しているように、何かに悩んでいるかのように思える。

その何かは、良く分からない。

それでも、僕ですら分かってしまうほど、彼を悩ませるのだ、それは大きな問題なのかもしれない。

「君の気持ちもある。」

しかし、その答えは、存外小さなものだった。

「君は彼女の事を嫌ってはいないし、無理に被おうとする様子もない。おそらく、君は君なりに彼女の存在を受け入れているんだろう。ならば、それを無理やり引き裂くわけにもいくまい。知人の気持ち傷つけるような事はしたくない」

それは、彼からの僕への優しさ。

決して傷つけないようにとする慈しみ。

その心遣いが、正直嬉しかった。

確かに、彼の言う通り、被ってしまうほうがいいのは分かる。

彼女はあまりにも危険すぎる。

特に、彼ですら、うまく被えるかどうかがわからなくなってしまった今では、更に強く思う。

けれど、どうしても、心がそれに付いていかない。

理性では、被うべきと分かっているけど、それに素直に頷けない。

短い間だけ一緒にいたのだ、あっさりと切り捨てる事なんて出来ない。

だから、もし、やめられるのなら、やめて欲しい。

それが、自分勝手な自己満足だったとしても、そう思う。

そして、彼は続ける。

「それに、被わずに、彼女を抑える方法もある」

「え？」

一瞬、彼の言っている言葉の意味が理解できず、思わずきょとんとしてしまったが、その言葉を二度ほど反芻したところで、ようやく理解で来た。

ただ、もし、それが出来るのなら、願ってもいない。

非常に喜ばしい事だ。

思わず顔がほころび、ほっと一安心したのだが、目の前にいる彼は先ほどと変わらず、真剣そのもの。

「ただ、その代わり、それをすれば、確実に君は自由でなくなる」

分けも分からず、再度きょとんとしていたが、それも彼の言葉を聞いてすぐに分かった。

いや、予想すべき事だったのかもしれない。

もし、何の問題もなく、簡単に抑える事が出来たのなら、彼は最初からそれを提案するはずだ。

無理に被えば、僕は辛い思いをするし、自分自身良心の呵責を感じるかもしれない。

けれど、逆に被わなければ、不確定要素を孕む危険を野放しにしてしまう事になる。

だから、何の問題がなければ、どちらの状態も回避できる方法を選ぶはずだ。

なのに、わざわざまどろっこしい言い方をしたという事は、それはそれで問題があると取ってしかるべきだった。

「自由がなくなると言う事はどういう事ですか？」

それでも、その可能性に賭けてみたかった。

もし、僕にできる事があるのなら、やってみたいと思った。

「それはだね、君が彼女の主人になる事。彼女を自分に従属させる事だよ」

## 第二十二話 九月二日 妖しの風音

いつの間にか、日は落ち、既に世界には闇に満たされている。

意外と長居してしまつたみたいで、そろそろ帰らないと、母に小言をぐちぐちと言われてしまつたろう。

けれど、そんなことは裏腹に僕の足は、家へと向かつていない。

帰りたくない。

心のどこかでそう思っているのだろう。

僕は夜道を一人で歩く。

途中まで、志穂が送るとは言ってくれたけど、それは断つておいた。今は一人になりたかつた。

彼女のお父さんは、あの後、続けてこう言った。

「主人、従属。そう言うのと、なんだか仰々しく聞こえるが、簡単に言えば、守護霊のようなものにする事。もちろん、君には、既に守護霊はいるし、それに何より、守護霊では、彼女を縛る事はできない。あくまでも、守護霊は任意の存在であつて、強制力はない。だから、より強い束縛と強制力を持たせるために、君と彼女を魂で繋ぐ。君の魂で作つた鎖で彼女を絡み取り、逃げられないように、楔を打つ。そうすれば、君は彼女に対する強制力を持ち、抑圧する事が出来る」

それは、彼女に手錠をかけるようなもの。

彼女の完全な自由意志を奪うようなもの。

マリオネットに仕立て上げようとするもの。

「ただ、その代わり、そうする事で、君もまた、普通ではいられなくなる。一度繋いでしまつたものは、もう二度と引き離す事は出来ず、彼女と死ぬまで一緒にいなくてはならない。そして、魂を繋いでしまえば、お互い、完全な他人ではいられず、影響を受け合い、変質してしまう。今の君は、霊を引き寄せやすい体質であるだけで、それ以外は、普通の人とは何も変わらない。ただ、もし変質してし

まえば、君は、私たちと同じような属性を持つ事になり、私たちと同じような生活を送らざるをえなくなる可能性もある」

そして、逆に、僕自身もまた、見えない鎖で縛られる。

普通に生活をして、普通に恋をして、普通の家庭を築く。

それができなくなる。

それどころか、僕は、一般社会にいながらも、その世界で生きる事すら出来なくなる。

自分を隠し、誰にも何も言えず、ただただ、一人となる。

「本来、こんな事は、君ではなく、私たちのような人間の仕事だが、私たちでは彼女が頷くまい。だいたい、主従の関係を築くのであれば、よっぽどの力の差がなければ、無理やり押さえつける事は出来ない。それに、君の事を考えて、被わないのだから、君が責任の一端を担うべきでもあるしね。だから、すまないと思うが、君にお願いするしかない」

彼の言う事は最もなのだ。

僕の気持ちを配慮して、彼女を被わない。

ならば、僕が彼女に対する責任を負わなくてはいけない。

当然の事だ。

「もちろん、それは君にとっては、あまりにも大きすぎる責任だ。

それを君に押し付ける気もない。だから、君に決めて欲しい。彼女をどうするか。君はどうしたいのか。その事を決めて欲しい」

そして、彼は最後にそう言った。

つまり、全ては僕任せ。

彼女を被うか、それとも、お互いがお互いを縛り付けるのか、それを決めるのは僕なのだ。

だけど、僕はそれに答えられなかった。

周りを見回す。

気が付くと、いつの間にか、山の中にいた。

良く来る、あの納涼には最適な場所。

僕は、知らず知らずのうちに、一人でいられる場所を、誰にも邪魔

されない場所を求めて、ここに来てしまっていたみたいだ。

いつも、座っている場所まで行くと、そこに腰掛ける。

上を見上げて、枝や葉で隠されて、空は見えない。

そのため、辺りは暗く、不気味な雰囲気をしている。

そう言えば、夜にここに来るのは初めてだった。

ここに来る時はいつも、昼間で、夜になると帰っていた。

だから、こんな時間に来た事なんてないのだが、夜になったと言うだけでこれだけ印象が変わると思わなかった。

いつもの穏やかで優しく包み込んでくれるような雰囲気はなく、怪しく今にも闇に飲み込まれてしまいそうになる。

いや、もしかすると、こここの雰囲気は何も変わっていないのかもしれない。

ただ、僕の方が、周りが見えなくなってしまうほど、悩みこんでいるだけなのかもしれない。

『彼女をどうするか。君はどうしたいのか。その事を決めて欲しい』彼の言葉が脳裏に掠める。

自分の一生に関わる事なのだ。

自分で決めないといけないのは分かっている。

そして、自分の性格を考えると、どれを選ぶべきなのかも分かっている。

僕には、姫を被えない。

実際に、僕が被うわけじゃないんだけど、それでも被えない。憎む事も恨む事もできない彼女を、あっさりと切り捨てられない。

けれど、だからと言って、彼女を受け入れる事も出来ない。

彼女を受け入れれば、僕の一般人としての生活が終わる。

それは、きつと今まで育てて来てくれた両親を裏切る事になると思う。

なんだかんだと面倒事を押し付けてきたり、からかわれたりというのと嫌な事もされてきたけれど、それでも、大切に生きて来てくれた、好きでいてくれた両親。



その二人は、僕には当たり前前の幸せを望んでいる。

特別になろうとしなくても良い。

無理なんてしなくてもいい。

ただ、僕が僕としてあり、幸せでいてくれれば、それでいい、そう思ってくれている。

なのに、僕が彼女を受けいれれば、両親が望んでいる当たり前前の幸せを捨てて、二人にしたら、何がなんだか良く分からない奇妙な世界に足を踏む込む事になる。

きつと納得なんてしてくれないと思う。

それに、それ以上に、僕には、姫を受け止める覚悟がない。

今、こんな状況になって初めて、志穂の気持ち分かるような気がする。

普通の人とは全く違う存在になってしまう。

普通の人には受け入れられない存在になってしまう。

嫌われ、排斥され、後ろ指を差され、笑われてしまいかもしれない。それが、怖い。

初めて会った時の志穂もそんな感じがあった。

自分が人と違う事に怯えていた。

できる事なら、自分も普通でありたかった。

そして、自分が普通じゃない事がばれたらどうしよう。

そんな思いがにじみ出ていた。

僕はそれを軽く見ていた。

確かに、少しだけ人と違う。

人によっては、それを忌み嫌い、排斥しようとするかもしれない。

だけど、それでも、ただ、少しだけ人と違うだけで、何も変わらない、ちよつと人が持っていない力をもっているだけに過ぎない。

そう思っていた。

だけど、今、自分がそうなるうとしている。

もしかすると、人から忌み嫌われるかもしれない。

家族にまで迷惑をかけてしまいかもしれない。

大切な人を傷つけてしまいかもしれない。

その事が、自分の一生だけでなく、家族の一生を左右するかもしれない。

そんな事を考えたら、僕は答えが出せなかった。

彼女を切り捨てる覚悟も、受け入れる覚悟もどちらもない。

こんな中途半端な気持ちじゃ、何も決められない。

結局、僕はこうしてここに逃げてきてしまった。

ざわり、と風が吹く+。

暑い時期ではちょうど良い涼しさを保つこの場所は、曆的には秋になり、しかも夜になってしまっている今では、どこか肌寒く感じる。そして、さらに風が吹く。

今度は先ほどよりも強く、寒い。

思わず身をすくめる。

気が付けば、身体はすっかり冷えて、震えている。

どうやら、冷やしすぎたのかもしれない。

正直言つて、今の精神状態で家に帰りたくないが、だからと言って、長居しすぎて風邪を引くわけにも行かない。

おもむろに立ち上がり、来た道を戻る。

暗く、見通しの悪い場所だが、それでも通り慣れた道。

ポケットから出した携帯を明かりにして、山を降りる。

ざわり、また、風が吹く。

先ほどよりも、また強く、寒い。

心の芯まで冷えてしまいそうなほど、強い冷氣。

まるで、冬の風のように、下着とカッターシャツの薄手では、非常に寒く、身体は次第に震えだしている。

僕は、走り出した。

このまま、呑気にしてたら、本当に風を引きかねない。

それに、この風も何か嫌な予感がする。

初めて姫と会った時。

あのときに、吹いた凜と張り詰めた冷たい風。

まるで、何かに狙われているような、絡み取られているような、そんな感じのする風を一身に浴びている。

第二十三話 九月二日 心残り

「はあ、はあ、はあ」

いつしか、僕の吐く息は荒くなっていた。

いくら慣れた山道とはいえ、やはり、平らではない道を走れば、思った以上に、走りにくく、体力の減り方も早いのもかもしれない。ざわり、また、風が吹く。

更に、強い風。

予想外の強風に、思わず、バランスを崩し、その場に倒れこむ。慌てて、立ち上がるが

「痛っ」

どうやら、足をくじいたのだろうか、左足首に鈍い痛みがする。

けれど、僕はそれを我慢して、再度走り出す。

左足を踏み込むたびに、痛むが、そんな事は言っていられない。

何かが、そう正体の分からない何かが、僕の事を絡めとろうとしている。

もし、ここで止まれば、ここで止まってしまえば、取り返しの付かない状況になる。

だから、痛む足を引きずるようにしながらも、走る。

一生懸命に走る。

だけど、

「……なんで」

気が付いたら、また最初の場所に戻っていた。

あの、いつも昼寝していた場所。

先ほど、逃げ出したはずの場所。

ざわり、と、また風が吹く。

全てを奪い去るかのように。

全てを嘲笑うかのように。

僕は振り返る。

どうして、こんな事になっているのか分からない。

一対何が僕を絡めとろうとしているのかなんて分からない。

ただ、背中から感じる独特の気配。

身体中を舐めまわされているような不快な感覚。

前方を見据え、すっと目を細める。

確かに、そこには何かがある。

靄に囲まれてはつきりとしなが、それでも、そこに自分にとって  
は良くないものがある事が良く分かる。

何度も経験して来た事。

できる事なら、本当は経験したくなかった事。

「あびらうんけん・そわか」

虚空に円を描き、最後にその中心に点を置く。

志穂に教えてもらった、簡易結界。

僕を守護してくれる存在から力を借りるための儀式。

普段は、簡略してしか使わないから、わざわざ言ったりしな  
いけれど、今回はそんな事は言っていられない。

自分でも分かるほど、空気がぴりぴりとしていて、肌がちくちくと  
痛む。

しかし、相変わらず身体中にまとわり付くような嫌な感じもなくな  
らない。

はつきり言って、僕が相手に出来るような相手じゃない事ぐらい分  
かっている。

かなりたちの悪い霊だろう。

けれど、諦めて、為されるがまま、あっさりと陥落する分けにもい  
かない。

明らかに、僕を狙って来ている。

狩りをしている者の気配。

「臨・兵・闘・者・皆・陣・烈・在・前」

更に、九字の印を切る。

九字護身法と呼ばれる結界。

簡易ながらも、力のある結界を生み出す呪法。

その一言一言に力を込め、言霊にする。

力は言葉に込められた想いの分だけ強くなる。

特に、未熟で力の足りない僕には、それをするのとしないのでは、効果が大きく違う。

そして、ついに気配の主が動いた。

靄が掻き消え、そこから現れたのは異形の存在。

思わず、悲鳴をあげてしまいそうになるほど、醜悪な姿。

顔のパーツの位置はいびつで、骨格も歪んでいる。

更に、身体も四肢はついているが、折れているのかどうか分からないが、本来ならありえない方向を向いている。

「はっ！」

ともすれば、一瞬にして、恐怖のどん底に叩き落とされそうな状況。けれど、大声で叫ぶ事で、恐怖を振り払い、力を込めて編んだ結界を展開する。

付き進んできていた異形のそれは、展開した結界に激突すると、弾き飛ばされる。

思いを込めた編んだ結界は意外と強靱で、簡単には壊れない。

とはいえ、だからと言って、そのまま攻勢に移れるわけでもない。

僕が出来るのは専守防衛。

守って、守って、守りきって、逃げる。

攻撃手段なんてない。

けれど、このまま背を向けて逃げ出したところで、到底逃げ切れるとは思えない。

彼らのような、霊が何を出来るのか、僕は知らないが、それでも、今の状況を作ったのが、目の前にいる異形だと言う事ぐらいは分かる。

いくら、夜道で暗く、明かりが携帯だけとは言え、迷うような事はない。

できる事なら、携帯を使って、このまま逃げ出したいのだけれども、

それも、目の前の霊の影響かどうかは分からないが、圏外になっている。

「ぎゃああああ」

無様に倒れこんだ異形の霊は、起き上がると、また僕に襲いかかってくる。

その喉から発せられる声は、醜悪な姿に見合った醜いもの。思わず居竦みそうになるが、必死にそれに耐える。

結界の強さは思いの強さ。

気持ちが折れれば、一瞬にして壊れてしまう。

異形の霊は再度結界に当身をするも、やはり僕の編んだ結界は壊せず、吹き飛ぶ。

けれど、それもいつまでも持ちこたえるとは思えない。

「あびらうんけん・そわか・臨・兵・闘・者・皆・陣・烈・在・前・二重結界」

更に結界を編み、強化する。

とりあえず、考える時間が必要になる。

とはいえ、できる事はそんなに多くはない。

攻撃手段がなく、おそらく結界のようなもので、逃げられないように閉じ込めているんだろうが、それを打ち破る手段を僕が持っていない以上、この場から出る事は不可能。

一番、可能性があるのは、このまま助けを待つ事だが、それもあまり期待できない。

明日になれば、姫が探してくれる可能性もあるが、そんなに長い間結界を保つ事は出来ない。

僕程度の力では、せいぜいもっても数時間程度だろう。

距離を取りつつ、攻撃を受けないようにすれば、ある程度時間は延びるだろうが、それでもどんなに頑張っても、次の日を迎えられる自信はない。

それに、この空間内は、目の前にいる異形の世界なのだ、簡単に距離を取る事も難しいだろう。

現状では、手は、ない。

なら、一か八か攻撃に移ってみるのもいいかもしれない。いくら、未熟とは言え、僕もそれなりに力はある。

志穂や彼女のお父さんのように、一撃でしとめられるような力はないが、それでも目くらましや気を散らす程度なら出来る可能性はあるし、うまく行けば結界に綻びが出来て、そこから逃げ出せるかもしれない。

ただ、その難点をあげるとすれば、僕がその呪法を知らない事。もちろん、呪法なんてものがなくても、効果は出せる。

そもそも、呪法というものは、よりイメージを強くしたり、精神を集中させたりと、補助的な役目しかない。

普段九字護法を使うとき、僕が簡易省略できたのも、うまくイメージして、それに言霊をのせる事が出来たからだ。

もちろん、省略している分、効果は落ちるが、それでも使えないわけではない。

「ぎいいやああ」

異形の霊がおぞましい雄叫びをあげて、体当たりをしてくる。

途端に、何とか先ほどまでは、持ちこたえていた九字護法の結界に、ひびが入る。

思わず舌打ちをする。

思考に意識がいつていた分、結界が少し脆くなってしまったのだらう。

次にそこを狙われてしまえば、確実に壊れてしまう。

一度ひびが入れば、もうそれは使い物にならない。

再度九字護法の結界を編みなおすしかないだろう。

やはり、今は攻撃云々の話をしている暇はない。

とりあえずは、身の安全の確保。

そして、ゆっくりと考える時間が出来てからだ。

「あびらうんけん……」

再度九字の印を切ろうと、用意をし始めたところで、異形の霊が動



くの止め、僕をじつと見る。

その行動を見て、何故か嫌な予感がした。

ただ、立ち止まっているだけで、何もしていない。

だから、不安に思う事は何も無いはずなのだが、それでも、払拭出来ない嫌な気配。

まるで、何かを見落としているような感じがする。

それでも、慌てて、印の続きを切る。

心が揺れているせいか、先ほどまで張り詰めていた集中力は途切れ  
たせいか、思うように力をコントロールできないが、それでも、補  
修をしないわけにはいかない。

「臨・兵・闘・者・皆・陣・烈・在・前」

指先に、言葉に、力が籠らないが、無理やり編みこむ。

その言葉によつて、おぼろげながらも生み出された力は、ひび割れ  
た結界を修復し、完全な状態に戻る。

これで、直接攻撃を受ける事はない。

ほっと、一息を付き、再度、心を落ち着かせる。

その間、それは、なんのアクションを起こしてきていない。

もしかすると、単に攻撃できない状況にただけで、僕の思い過こ  
しだったのかもしれない。

平静を取り戻していくうちに、先ほどまであった、不安は完全に搔  
き消えていた。

もう一度、視線を異形の霊に戻し、見据える。

相変わらず、ただただ、突っ立っているだけ。

これなら、注意する必要はない。

このままいけば、諦めてくれるかもしれない。

思わず、そんな安易な事まで浮かんできた。

けれど、目の前の異形の霊が、不意に、にたり、と笑った次の瞬間、  
ずっと身体が重くなった。

結界は、傷一つついていない。

と言うよりも、目の前のそれは全く動いていないのだから、何かが

起こったはずはない。

なのだが、全く身体が動かない。

いや、それどころから、視界がぼやけて来て、はっきりと物が見えなくなってきた。

「くっ」

思わず、その場に崩れこむ。

わけがわからない。

なぜ、こんな事になっているのか。

どうして、身体が動かないのか。

まるで、金縛りにあつたかのように。

「……しまった」

そこまで、考えが言つたところで、結論にたどり着いた。

そして、それと同時に、嫌な予感の分けも分かった。

九字護法の結界。

あくまでも、それは霊を近づけない、浸入させないためのものであり、霊が引き起こした霊障までは、防ぐ事は出来ない。

それを防ぐためには、また別の結界が必要になる。

「ぐっ」

身体中から力が抜け、起き上がることも出来ず、自分の身体のはずなのに、他人の身体のように思えてくる。

その間に、異形の霊は、九字護法の結界を壊し、僕の目の前に立っている。

身体が自由に動かない以上、僕にはもうどうしようもない。

確実に、しとめられてしまつたろう。

それは、つまり、終わりと言う事。

その事実が気付いた途端に、身体中に恐怖が走る。

喉がカラカラに渴き、ひり付く。

必死になって、抵抗したいのに、身体は動いてくれない。

その事実が、更に恐怖を助長させる。

そして、それと同時に、姫についての答えが出せなかった事が、や

るせなかった。

あれだけ悩んだのに、答えも出せずに、終わる。  
それが悔しかった。

第二十三話 九月二日 心残り（後書き）

この作品では初バトルでした。

まあ、戦う手段を持っていないので、闘いと言えるものでもありませんでしたがね。

次回決着編です。

第二十四話 九月二日 導き出された答え

ひゅっ、と風きり音がした。

それは、おそらく、僕の止めを差すのだろう。  
霊が人を殺すとき。

それは、どうやって、殺すのだろう。

直接手段には訴えられない以上、普通の人がやるようにやっても殺せない。

もしかすると、単に身体を奪われるだけなのかもしれない。  
殺されるわけじゃないのかもしれない。

だけど、結局は、僕がいなくなってしまう以上、それは死と同じ意味だと思う。

更に、もう一度、ひゅっ、と風きり音がした。

しかし、感触は何も来ない。

それどころか、逆に、頭の冴えが戻ってきて、先ほどまであった、身体にかかる重圧が全くなくなってしまっている。

分らない。

いきなりの展開に、思考が追いつかない。

「間に合いましたか」

頭の中がぐちゃぐちゃに混乱して、それでも、動けるはずなのに、動こうとせず、その場にうつぶせにしていたら、不意に天から声がした。

いや、頭上だ。

しかも、その声は、良く聞き慣れたもの。

「大丈夫ですか？」

そつと、その声の主が、僕を支える。

そろそろと目を開ける。

先ほどまでばやけていた視界は、綺麗に澄みわたり、しっかりと捉える事ができる。

「すみません、遅くなっちゃって。本当は、もう少し早く助けるつもりだったんですが、道に迷ってしまったんです」

けれど、意識はなかなか戻って来ない。

いまだに、混乱していて、脳の処理が追いつかない。

「ううん、ありがとう。助かったよ、志穂」

それでも、なんとか礼だけは言う。

目の前にいるのは、志穂。

そして、少し離れたところで、先ほど、僕が相手をしていた、異形の霊を相手にしている姫の姿がある。

どうやら、二人が僕を助けてくれたらしい。

「どうして、ここで襲われているって分かったんだ？」

彼女の肩を借りながら、なんとか立ち上がると、そう尋ねる。

僕が、ここにいるのも知らなければ、襲われている事も当然知らないはず。

なのに、なぜ、こんなところで、こうもタイミング良く助けてくれたのか、不思議で仕方ない。

「すみません、つけてたんです」

けれど、その答えは思いのほか簡単な事だった。

あまり気持ちのいい物ではないが。

「やっぱり、心配だったんです。姫さんの事で、先輩すごく悩んでましたし。だから、勇気付けたくて、でも、どうすればいいのか分からなくて、それで、つけてたんです」

とはいえ、それは、仕方ないのかもしれない。

もし、僕が逆の立場だったら、志穂の立場だったら、同じ事をしていたかもしれない。

例え、しなかったとしても、彼女の事を心配して、気を揉んでいたと思う。

「そうしたら、先輩は山の中に入って行っちゃったから、慌てましたよ。先輩は知らないかもしれませんが、ここは危険なんですよ？」  
けれど、次の言葉は驚きだった。

ここには、いつも、心を休めるために来ていた。

昼過ぎだったから、というのがあるのかもしれないが、それでも、姫とあの異形の霊以外は、一度も見た事はない。

「独特の磁場を持つているせいか、たちが悪くて、しかもかなり強い霊がたくさんいるんです。私たちだって、あんまり好んで近づくようなところではないのに、先輩のように無意識に引き寄せてしまう体質の人が入ったら、それこそ、格好の獲物になってしまいますから」

けれど、志穂がそういうと言う事は、それが真実なんだろう。

ならば、どうして、今まで、僕は姫と異形の霊以外見た事なかったのだろう。

「そっか、ありがとう」

だが、いくら考えてみたところで、きっと答えは出ないと思う。僕は何も知らなさ過ぎる。

何も知らずに、何も出来ずに、何も決められない。

だから、殺されそうになったし、助けてもらっている。

余りにも情けなさ過ぎる話だ。

女の子に、しかも、自分より年下の女の子に助けられるなんて。

「なあ、どうすればいいと思う？」

こんな事じゃダメな事ぐらい分かっている。

自分の事ぐらい、自分で決めないといけない事ぐらい分かっている。でも、それでも、僕は、彼女に頼ってしまった。

頭の中がぐちゃぐちゃで、何がどうなっているのか分からなくて、そもそも自分はどんな人間で、何を為したいのか、それすら分からない。

だから、今、この弱っている機会を使ってしまったている。

襲われ、殺されかけ、一人では立ってられない状況。

すがりつく事も、必死になって手を伸ばして、助けを請う事も、ある意味許される状況。

それを利用して、僕は必死になって助けを求めている。

「ごめんなさい。私には答えられません」

けれど、彼女は、その手を握り返してはくれなかった。当然と言えば当然の事。

これは、僕の人生であり、僕が責任を持たないといけない事。そんな事はわかっていて、彼女がそうする事も予測していたのに、やっぱりシヨックが隠せなかった。

「ただ、私は先輩がしたいようにすればいいと思います」

そして、彼女は続けて、そう言う。

だけど、そんな言葉なんて聞きたくなかった。

自由意志と言えば、聞こえはいいが、結局、僕に押し付けているだけの事。

僕には決められない。

姫を切る事、家族を裏切る事、そのどちらかを選ぶ事なんて出来ない。

「先輩は何がしたいんですか？どうしたいんですか？」

できる事なら、耳を塞ぎたかった。

これ以上、そんな言葉を聞いていたら、僕は、自分がどうなるか分からない。

だから、追い込まれるような、そんな志穂の言葉なんて聞きたくない。

「先輩が辛いのは、分かります。姫さんを切る事ができない。だからと言って、私たちと同じ世界に飛び込む事だって出来ない。もし、同じ立場に立たされれば、私だって、決める事なんてできません。どっちも大切ですから」

そう、どっちも大切なのだ。

家族も、姫も。

いや、それだけじゃない、志穂も、誠次も、その他の友人達の事が大切だ。

一緒にいてくれて、一緒に笑ってくれて、一緒に悲しんでくれて、一緒に悩んでくれて、いろんな時と一緒に過ごしてくれた。



それは姫だつて変わらない。

例え、その付き合いが短い時間だつたとしても、霊だつたとしても、それでも大切なのは代わらない。

「ねえ、先輩。先輩が、守りたい物はなんですか？先輩が大切にしたいものはなんですか？先輩が失いたくないものはなんですか？そんなに悩むものなんですか？」

「そんなの全部に決まっている」

「なら、それでいいじゃないですか」

「え？」

切り捨てるような事なんて出来ない。

どっちかを選ぶ事なんて出来ない。

だから、選べない。

そう思つて言つた。

そして、そんな事を言えば、笑われるかもしれない。

はたまた、なじられるかもしれない。

そう思つていた。

けれど、彼女の言つた言葉は違つた。

笑うわけでも、なじるわけでも、否定するわけでもなく、肯定だつた。

「先輩。父の言つた言葉を気にしすぎです。先輩は、別に父の言つた通りにしなくてはいけない義務なんてないんです。確かに、父が言つた事のどちらかを選べば、間違いなんて起きないかもしれませんが。大損害が出る前に対応できるかもしれません。だけど、それに先輩が縛られる必要はないんです。先輩は先輩で、父は父。確かに知人かもしれませんけど、ただの知人でしかない父には、先輩に対する強制力なんてないんです。先輩が好きなようにやっても文句は言つ事は出来ないんです。何も問題を起こして居ない以上」

僕の言葉を認めてくれた。

だけど、実際、それは真実だと思う。

彼には、僕を縛る事は出来ない。

僕の行動を制限する権利なんてないんだ。

「んじゃ、今のままの生活を望んでもいいのかな？」

「はい、先輩がそれを望むんだったら、そうすればいいと思います」  
確認するように言った言葉に、彼女は頷いてくれた。

「だったら、答えは決まったよ。姫は抜かない。だけど、彼女を縛るような事もしない。今のままでいる。どっちも選ばない」  
どっちも選ばない。

やっぱり、僕はどこまでも弱い人間だから。

切り捨てる事も、自分が一般人でなくなる事も、覚悟を決める事も、何も出来ない。

だから、僕は、今のままを望む。

例え、その結果として、大惨事を起こす事に鳴ったとしても。

「ああ、やだやだ、ホント弱いくせに、手のかかる相手って嫌なものね。余計な力を使っちゃったわ。あ、由貴、大丈夫だった？」

異形の霊を倒し終わったのだろう、姫が戻ってきた。

その表情は、どこか優しく、安堵しているようにみえる。

もしかしないでも、心配してくれたんだろう。

「ああ、大丈夫だよ。ありがとうね、姫」

「あら、感謝してるなら、そのついでに、ちようどいいから、キスさせてよ。お腹すいちゃって、たまんないのよ」

「だめです！どさくさにまぎれて、なんて事を言ってるんですか」

「頑張ったんだから、当然の権利よ。貴方みたいに、どこにいるのか分からず迷いに迷った拳句、戦闘にも参加しなかったわけじゃないんだから」

「し、しかたないでしょう、貴方みたいに、変なリーダーがついてないんです」

「と言う事は、あなたの愛もそれまで、と言ったところかしら？」

「そんな事はありません！絶対に、私の方が上です」

それが嬉しくて、素直にお礼を言ったんだけど、それが原因で喧嘩になってしまった。

というか、志穂の場合、もう僕への気持ちを、隠す気なんてないんだろうか。

今まで、全くそんなそぶりも見せなかったというのに、どういつ心境の変化だろうか。

女の子と言うものは、本当に謎だ。

ただ、それでも、分かるものだってある。  
それは、

「さあ、帰ろう。皆で仲良く、ね」

そんな二人が大好きで、一緒にいたい、と言う事。

まあ、姫に関しては、今一なんとも言えないが、志穂の好きとは少し違うかもしれないが。

**第二十四話 九月二日 導き出された答え（後書き）**

次回エピソードになります。

お付き合いありがとうございました。

## エピソード

「相変わらず、暑いな」

夏の暑さはまだまだ残っているのか、日がもうそろそろ落ちると言うのに、身体中から汗が吹き出している。

「ふーん、たいへんね」

そんな僕とは対照的に、隣にいる姫は、汗一つかいておらず、呑気な表情をしている。

霊である姫は、実体化していなければ、熱かろうと寒かろうと、関係ない。

霊だから、と言ってしまえば、おしまいだけど、正直ちょっとだけ羨ましい。

夕暮れ時の空は、茜色に染まり、その光を受けている僕達自身もまた、茜色に染まっている。

今日の僕達は、ちょっとしたお出かけをしていた。

一応、名目上はデートとなっていたんだけど、実際は、志穂の家に行って来ただけの事。

昨日の今日だけでも、自分が出した答えを、志穂のお父さんに言いに行ってきたのだ。

そのついでに、姫を紹介しておいた。

もちろん、そんなところにつれていけば、姫の身に何か起きるかもしれない。

姫だって、あんな危険なところに行きたがらないかもしれない。

それでも、連れていったのは、逃げるような事はしなかったから。

切り捨てる事も、一般人でなくなる事も、覚悟を決める事も出来ないけれど、それでも、決めた以上、その答えからは逃げたくなかった。

認めてもらわないといけないと思った。

だから、連れていったのだ。

もちろん、決めた以上は、もし反対されたとしても、僕の事を無視して、強硬手段に出たとしても、しっかりと自分の意思を貫き、姫の事を守るつもりでもいた。

まあ、実際は、反対されるような事はなかったけれども。

こっちの方が拍子抜けるほど、あっさりと快諾してくれた。それどころか、

「うん、いろいろと苦労するだろうが、志穂共々三人で仲良く楽しくやってくれたまえ」

穏やかに笑みを浮かべながら、応援までしてくれたのだ。

そこまで言ったところで、なんとなくだけど、彼の気持ちが分かったような気がする。

たぶん、試したんだと思う。

それは、別に僕が何を選ぶか、ではない。

もし、どんな答えでも、僕が悩み、しっかりと考えた結果として出てきたものなら、彼は何も言わなかったと思う。

ただ、彼が見たかったのは、僕の姿勢。

何を大切に思い、何を守りたいと思い、何を選ぶのか。

そして、その時の態度はどんなものなのか。

それを見たかっただけなんだと思う。

相変わらず、空は赤い。

ただ、逆方向を見てみれば、すでに、少しずつ色は闇色に近づいている。

夜は霊の時間。

闇の濃い時間帯は、僕のような一般人では、耐えられない恐怖の時間。

それが、昨日の体験で良く分かった。

だけど、その日は、それ以上にもっと大切な事を知る事が出来た。

僕の弱さと気持ち、願い、望み。

僕が大切にしようとしている価値観。

そして、

「ねえ、姫。夏休みのあの日。初めて会った日だけど、僕に憑いたのは、気まぐれでも何でもなく、ただ、守ろうとしてくれたんだろう？いつものように」

姫の事。

あれから、何度も考えていた。

強く、たちの悪い霊がたくさんいるはずなのに、寄ってこなかったのか。

どうして、姫が僕に憑いたのか。

なぜ、きまぐれのような感覚で憑いたはずなのに、志穂と奪い合いのような事をしたのか。

そして、あの時感じた嫌な感触の正体。

一杯一杯考えて、そして出てきた答え。

姫が僕を守って居てくれていた、それだった。

姫と初めて会った時と昨日のあの異形の霊が出た時。

あの二つの雰囲気は、本当にそっくり、と言うよりも、そのままだった。

全く、同じ存在の出現。

そう考えたほうがしっくり来るぐらいだったのだ。

「あら、ばれちゃった？まあ、由貴の言う通りよ。見てて危なっかしいから、眼が離せなかったのよ」

それを彼女は頷く。

今まで隠してきた事が、ばれたのだ。

しかも、人に知られたら恥ずかしい類の話なのだ、照れたり、否定したりする場面だろうに、彼女はどこか嬉しそうにしている。

そう言えば、志穂の時もそうだった気がした。

隠している事。

人には話したくない恥ずかしい話。

なのに、それが、僕にばれた時、僕が感づいた時、その事を嬉しそうにしていたい。

やはり、女の子は分からない。

いったい、どういう精神構造をしていると言っのだろうか。

「ホント、危なっかしすぎるのよ、あなたは。もう少し気をつけるのよ？もう二度とあんなのはごめんだからね」

「分かってる。あそこには、もう行かない」

それが不思議で、出来れば、聞いてみたいのだけれども、あえて聞かない。

たぶん、聞いたって、分かんないし、それになにより、

「とりあえず、また、新しく涼めるところを探すよ」

今は、呑気な話をずっとしていたい。

そう思うから。



## エピソード（後書き）

一応、これで終了です。

終了ですが、まあ、始まりといえは始まりです。

なので作者のやる気と要望があれば続きを書こうかなと思います。  
お付き合いありがとうございましたww

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4323d/>

---

僕と妖し

2010年10月9日15時08分発行